

京都市内遺跡試掘調査報告

平成 2 4 年 度

2 0 1 3 年 3 月

京 都 市 文 化 市 民 局

京都市内遺跡試掘調査報告

平成 2 4 年 度

2 0 1 3 年 3 月

京 都 市 文 化 市 民 局



写真1 調査区全景（南から・第IV章-2）



写真2 調査区全景（南から・第IV章-5）

ご あ い さ つ

京都市は、平安京建都以来、我が国の政治・経済・宗教の発展に中心的役割を果たした都市であり、またその永い時間の中で生み育てられてきた華麗かつ繊細な文化を今に伝える、世界でも有数の文化都市であります。

市内には数多くの文化財が存在し、埋蔵文化財包蔵地も市街化区域の4割を超える地域に広く分布しています。古代から近世にわたる永い歴史の中で幾層にも積み重なった遺跡は、我が国の歴史や文化を正しく理解するうえで欠かすことのできない国民共有の財産です。

本市では、先人が残した貴重な埋蔵文化財を適切に、後世に伝える責務を果たし、また、将来にわたって日本文化を国内外に発信していけるよう、その活用にも取り組んでおります。

この度、平成24年度に文化庁の国庫補助を得て実施しました埋蔵文化財調査成果をまとめた報告書を作成いたしました。この報告書が、京都の歴史と文化財への理解を深めるために、広く御活用いただければ幸いに存じます。

文末になりましたが、各調査の実施に当たり、御理解、御協力を賜りました市民の皆様と、御指導を賜りました関係機関の皆様には厚く御礼を申し上げます。

平成25年3月

京都市文化市民局 文化芸術担当局長 平竹 耕三

例 言

- 1 本書は、京都市が文化庁の国庫補助を得て実施した平成 24 年度の京都市内遺跡試掘調査報告書である。平成 24 年 1 月から 12 月まで実施した試掘調査のうち、重要な成果のあったものについて本文中で報告している。ただし、試掘調査の結果、発掘調査を指導したものについては、発掘調査報告書の刊行を待つこととし、一覧表にのみ掲載している。
- 2 試掘調査を実施したすべての地区・所在地・調査日・調査概要については、試掘調査一覧表に掲載している（87～92 頁）。なお、各章表題末尾の番号と調査一覧表の番号並びに図版の番号は対応している。
- 3 本文の執筆分担は、本文の末尾に記している。
- 4 本書報告の調査のうち、基準点測量を実施した調査の方位及び座標は、世界測地系平面直角座標系 VI による。標高は T.P.（東京湾平均海面高度）による。
- 5 本書に使用した地図は、本市の都市計画局発行の都市計画基本図（縮尺 1/2,500）を複製して調整したものを掲載している。なお図版に使用した地図の縮尺は以下のとおりである。
図版 1～13 1/8,000 図版 14～20 1/10,000
- 6 本書に使用した土壌色名は、農林水産省農林水産技術会議事務局監修『新版標準土色帳』に準じた。
- 7 遺物整理にあたっては、岩本淳子・上茶谷美保・上別府亜紀・小出忠之の協力を得た。
- 8 調査及び本書作成は京都市文化市民局 文化芸術都市推進室 文化財保護課が担当し、(財)京都市埋蔵文化財研究所の協力を得た。

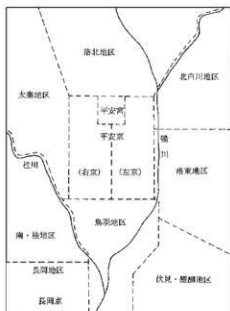


図1 調査地区割図

目 次

	頁
I 試掘調査の概要	1
II 平安宮	3
1 中和院跡（上京区稲葉町 442 他）	3
III 平安京左京	8
1 五条三坊十一町跡・烏丸綾小路遺跡（下京区山王町 557-1 他）	8
IV 平安京右京	14
1 北辺四坊六・七町跡・史跡妙心寺境内（右京区花園妙心寺町 1）	14
2 二条四坊六町跡・安井馬塚古墳群（右京区太秦安井馬塚町 2 の一部他）	19
3 三条二坊十二町跡・西ノ京遺跡（中京区西ノ京新建町 8）	22
4 四条一坊七町跡（中京区壬生天池町 29-3, 15）	26
5 四条四坊四町跡・山ノ内遺跡・西院城跡（右京区西院四条畑町 2）	30
6 八条一坊二・三・四町跡・御土居跡（下京区歎喜寺町 3-14 他）	35
V その他市内遺跡	42
1 郡城跡・東衣手町遺跡（右京区西京極東衣手町 68-1）	42
2 植物園北遺跡（左京区松ヶ崎今海道町 9 他）	46
3 北野廃寺・北野遺跡（北区北野下白梅町 44-1）	49
4 雲林院跡（北区紫野雲林院町 40）	53
5 法勝寺跡・岡崎遺跡 1（左京区岡崎法勝寺町 4-1-3）	57
6 法勝寺跡・岡崎遺跡 2（左京区岡崎法勝寺町）	62
7 伏見城跡（伏見区桃山町本多上野 9-1）	71
8 烏羽離宮跡・烏羽遺跡（伏見区竹田浄菩提院町 52 他）	77
9 長岡京左京一条四坊五町・東土川遺跡（伏見区久我東土川町 346-3, 350-2）	81
VI 試掘調査一覧表	87
報告書抄録	93

図 版 目 次

- 図版 1 平安宮
- 図版 2 平安京 左京 北辺・一・二・三条 一・二坊
- 図版 3 " 左京 北辺・一・二・三条 三・四坊
- 図版 4 " 左京 四・五・六条 一・二坊
- 図版 5 " 左京 四・五・六条 三・四坊
- 図版 6 " 左京 七・八・九条 一・二坊
- 図版 7 " 左京 七・八・九条 三・四坊
- 図版 8 " 右京 北辺・一・二・三条 三・四坊
- 図版 9 " 右京 北辺・一・二・三条 一・二坊
- 図版 10 " 右京 四・五・六条 三・四坊
- 図版 11 " 右京 四・五・六条 一・二坊
- 図版 12 " 右京 七・八・九条 三・四坊
- 図版 13 " 右京 七・八・九条 一・二坊
- 図版 14 史跡名勝嵐山／仁和寺院家跡／史跡名勝嵐山・臨川寺境内・嵯峨遺跡／草木町遺跡・太秦馬塚町遺跡・村ノ内町遺跡・常盤東ノ町古墳群・常盤仲之町遺跡・広隆寺旧境内
- 図版 15 郡城跡・東衣手町遺跡／嵯峨野高田町遺跡／本山古墳群／植物園北遺跡／北野鹿寺・北野遺跡／雲林院跡／寺町旧域・室町殿跡・上京遺跡
- 図版 16 白河街区跡・岡崎遺跡・白河南殿跡・法勝寺跡／御土居跡・寺町旧域／將軍塚古墳群／珍皇寺旧境内・六波羅政庁跡・法住寺殿跡・妙法院境内／安朱遺跡／山科本願寺跡
- 図版 17 中臣遺跡／勸修寺旧境内／深草坊町遺跡・貞観寺跡・安楽行院跡／嵐山谷ヶ辻子町遺跡／福西古墳群／中久世遺跡・大敷遺跡
- 図版 18 伏見城跡・太閤堤・向島城跡
- 図版 19 烏羽離宮跡・烏羽遺跡・下烏羽遺跡
- 図版 20 長岡京跡・東土川遺跡・鶏冠井清水遺跡・羽東師菱川城跡・羽東師志水町遺跡
- 図版 21 長岡京跡

I 試掘調査の概要

1 京都市内の埋蔵文化財行政

京都市で所管する周知の埋蔵文化財包蔵地（以下、遺跡という。）は、京北町との合併に伴う遺跡地図の改訂を経て、792件を数える。その範囲内でおこなわれる土木工事に対しては、遺跡の重要度と工事規模に応じて「慎重工事」・「詳細分布調査」・「試掘調査」・「発掘調査」の4種の行政指導を行っている。この指導業務は、当初、文化財保護課が行い、昭和55年の京都市埋蔵文化財調査センター設立以後はセンターが担当してきた。しかし、センターが平成18年4月1日付で文化財保護課と統合され、現在は文化財保護課保護第二係がこれを担当している。

行政指導に基づいて実施される調査には、国庫補助による調査と原因者負担による調査があるが、詳細分布調査と試掘調査については国庫補助事業として実施している。国庫補助事業による詳細分布調査と発掘調査は財団法人京都市埋蔵文化財研究所（以下、「埋文研」という。）へ委託し、その成果は毎年、別冊の報告書により報告されている。

本報告書は、平成24年1月～12月に文化財保護課が実施した、国庫補助事業による試掘調査をとりまとめたものである。文化財保護課で実施する試掘調査は、届出や通知を受けた工事予定地内における遺跡の有無、あるいは遺跡の残存状況やその範囲を把握し、遺跡が良好に存在し、工事がその遺跡を破壊する場合には発掘調査を指導し、設計変更などにより遺跡の保護が可能であれば開発者に対して遺跡保護の措置を指示するなど、文化財保護行政上、非常に重要な業務であり、現在は4名の技師が常時、従事している。

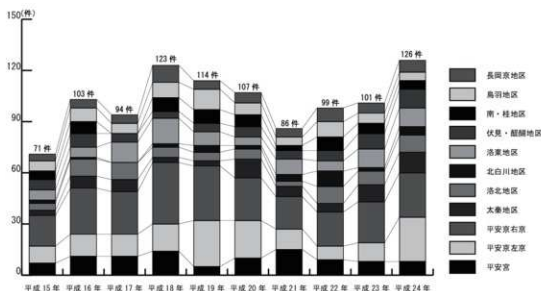


図2 年次別・地区別試掘調査実施件数

平成 24 年 1 月～12 月に文化財保護法に基づいて提出された届出（文化財保護法第 93 条）・通知（同法第 94 条）件数は、総数で 1,159 件になる。これは前年と比べ 154 件（15.3% 増）の増加である。平成 21 年以降、3 年連続で増加傾向にあり、過去 10 年間で最高件数である。これらの届出・通知に対して、文化財保護課は詳細分布調査 498 件（前年 456 件、9.2% 増）、試掘調査 134 件（同 101 件、32.6% 増）、発掘調査 9 件（同 7 件、28.5% 増）、慎重工事 518 件（同 443 件、16.9% 増）の指導をおこなった。こうした指導に基づき、平成 24 年に文化財保護課が実施した試掘調査件数は 126 件である。届出内容は、郊外では共同住宅の建設や宅地造成のほか、工場建設が増え、市街地では特に共同住宅の建設が目立つ。大半の地区で昨年度とほぼ同様、もしくは 25% の増加が認められ、全体的に増加傾向を示す。この中でも特に平安京左京地区は、昨年比 2.2 倍以上と増加率が突出しており、昨年と比べ京都市街地中心部における開発行為が活発になっていることが分かる。

2 平成 24 年の試掘調査概要

文化財保護課及び埋文研では京都市域を 12 のエリアに区分している（図 1）。平成 24 年の試掘調査の地域別件数は、平安宮地区 8 件、平安京左京地区 26 件、平安京右京地区 26 件、太秦地区 12 件、洛北地域 10 件、北白川地区 5 件、洛東地区 11 件、伏見・醍醐地区 11 件、南・桂地区 5 件、鳥羽地区 5 件、長岡京地区 7 件、京北地区 0 件である。このうち 27 件（V 章・試掘調査一覧表参照）については発掘調査を指示し、うち埋文研が 11 件（No.2・14・36・44・52・56・59・78・84・101・122）、古代文化調査会（代表家崎孝治）が 2 件（No.5・25）、関西文化財調査会（代表吉川義彦）が 1 件（No.6）、株式会社イビソク（代表森重幸）が 1 件（No.87）、株式会社日開調査設計コンサルタント（代表取締役社長小林大太）が 1 件（No.77）の計 16 件の調査を年内に実施した。

発掘調査を行ったことで顕著な成果が挙げられた事案としては、平安時代前期の条坊関連遺構や大型掘立柱建物群を検出した平安京右京三条三坊四町跡・西ノ京遺跡（No.14）、当該遺跡初の発掘調査で弥生時代後期と古墳時代後期の集落跡が検出された嵯峨野高田町遺跡（No.77）、平安時代後期の版築土壇や柱穴などを検出した白河街区跡・岡崎遺跡（No.87）などが挙げられる。

また工事の掘削深度が試掘調査で確認した遺構面より十分に浅いため、または設計や工法の変更により当面の保存が図られたなどの理由から、発掘調査に至らなかった例が 9 件あり、このうちの 7 件（No.17・54・89・90・91・118・121）を本書において報告する。一方、保存措置が講じられなかったものの報告すべき成果のあった試掘調査として、中和院西限の溝を検出した平安宮中和院跡（No.1）、朱雀院園池関連遺構を検出した平安京右京四条一坊七町跡（No.58）、竪穴建物跡を検出した植物園北遺跡（No.80）、大規模造成痕跡と大名屋敷関連遺構を検出した伏見城跡（No.106）の他、5 件（No.55・60・76・81・83）の調査が挙げられる。これに加え、本年度は史跡指定地での現状変更に伴って実施した試掘調査のうち 1 件（No.12）について、詳細を報告する。

（奥井 智子）

II - 1 平安宮中和院跡 No. 1



図3 調査位置図 (1:5,000)

1 はじめに

調査地は上京区稲葉町地内に位置し、平安宮中和院跡に該当する。ここに高齢者住宅新築工事が計画されたため、試掘調査を行った。中和院は歴代都城の中でも平安宮で初めて存在が確認される施設で、宮の中心、内裏の西側で大極殿院北側に位置する。中院・神今食院とも称され、新嘗祭や神今食祭の天皇親祭を伴う祭祀の場として利用されている。陽明文庫本「宮城図」では築地で内裏と共に囲われており、中和院の性格をよく示しているといえよう。

中和院は、延暦年間には既に造営されていたことが知られており¹⁾、「宮城図」からは、北東部に正殿である神嘉殿と渡り廊下で結ばれた東西舎、北殿で構成されていることがわかる。

院内の調査では、北築地と側溝²⁾、内裏との境である東築地と両側溝³⁾、掘り込み地業⁴⁾などが

確認され、南北57丈・東西50丈に復原されている。

今回の調査地は、復原では内裏の修復を担当する木工内候と想定されるとともに、中和院推定西築地心を含む一帯であったことから、区画の痕跡と院西部の土地利用状況を確認することを主目的とした。

調査は1月30・31日に実施。調査区を5箇所設け、面積は計98㎡である。

2 層序と遺構

調査区は、中和院西限を確認するため1・4・5Tr.を、院内の土地利用状況を確認するために2Tr.・3Tr.を設けた(図4)。調査地の基盤層は東から西に向かって緩やかに下がり、高い所で標高46.3m、低い所で45.8mを測る。基本層序は2Tr.を除いてほぼ共通しており、表土・現代盛土以下、-1.9～2.0mまで厚い近世堆積層が認められ、直下で基盤層となる。基盤層上面が遺構面であることから、平安時代の遺構面は一定の削平を受けているものと考えられる。なお、2Tr.については標高45.4mまで攪乱が及び、遺構面は大幅に削平を受けていた。

遺構は、平安時代の溝・土坑、近世の溝・瓦廃棄土坑・土取穴等を確認している(図5)。

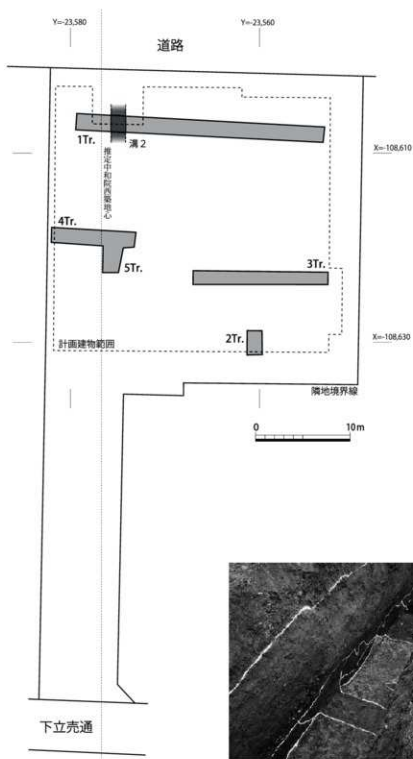


図4 調査区配置図 (1:400)

写真1 1Tr. 溝2 (南西から)



1Tr. では西端で溝2 (写真1) を確認した。南北溝で幅は1.3m、深さ0.2mを測り、埋土は黒褐色砂泥で平安時代の瓦を含む。推定西築地心に近接することから、区画に関わる遺構と捉えることができよう。1Tr. 中央東寄りで検出した土坑1 (図5) は近世の井戸跡で、埋土には平安時代の瓦が大量に含まれていた。3Tr. では溝、土坑等を確認しているが、出土遺物が無く時期を特定できるものではない。1Tr. で溝2を確認したため、その延長線上に4・5Tr. を設定したが、近世に遺構面が削平され溝の延長を確認することはできなかった。

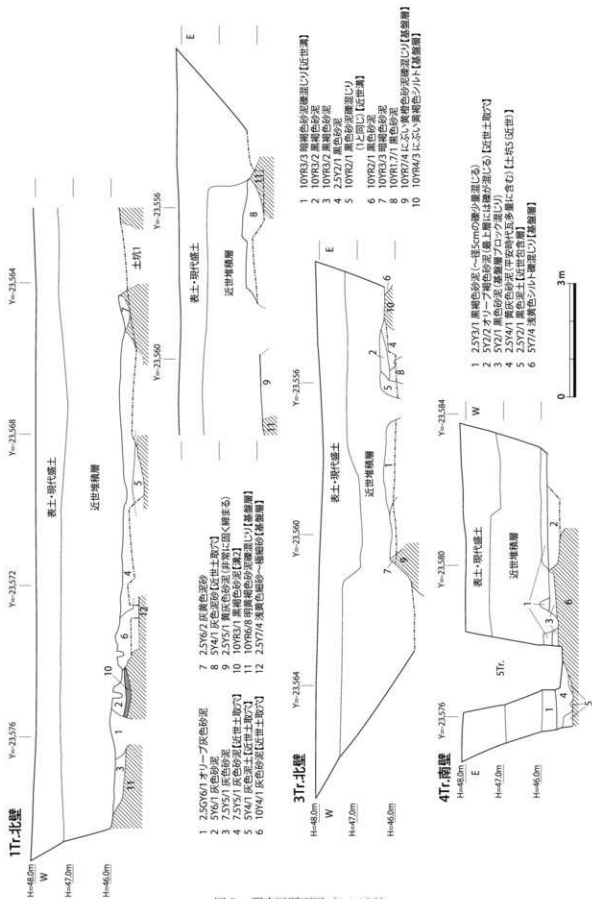


図5 調査区断面図(1:100)

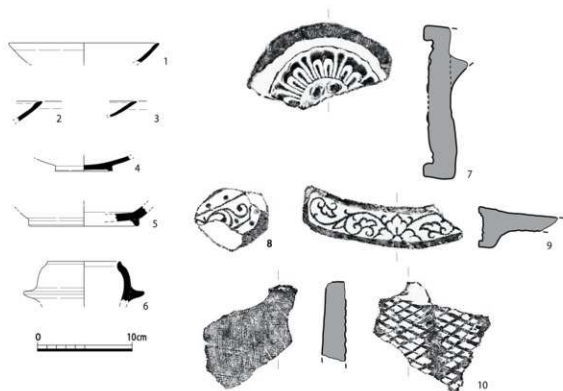


図6 遺物実測図(1:4)

3 遺物

出土した遺物の時期は、平安時代のものが多いが、江戸時代の遺構から出土したものが大半を占める。内訳は、土師器・須恵器・緑釉陶器・瓦などであるが、瓦以外は少量である(図6)。

1～3は土師器皿である。いずれも口縁端部内面に面を持ち外面には一段の横ナデを施す。1は口径16cm。いずれも16世紀前半(X期古)⁶⁾に属する。4は全面施釉された緑釉陶器皿で淡緑色を呈する。高台は削り出しの輪高台で、内面はヘラミガキ、高台を除く外面はヘラケズリを施す。9世紀前半。5は須恵器杯Bである。底径11.4cm。摩耗が進み調整不明。9世紀代に属する。6は瓦質土器のミニチュア羽釜で、仏具と考えられる。口径7.5cm。室町時代に属する。1～4は1Tr.掘削中に、5・6は4Tr.の土坑5から出土した。7は複弁八葉蓮華文軒丸瓦で、胎土に砂粒を多量に含む。興福寺の永承時再建(1047年頃)瓦と同文である。平安時代後期。8は緑釉の均整唐草文軒平瓦(NS207)である。残存状況が悪い。胎土にやや大粒の砂粒を含み、焼成は軟質である。無釉の同范瓦が西賀茂瓦窯群から出土している。平安時代前期。9は均整唐草文軒平瓦である。中心飾りは半裁花卉で左右に唐草を2回反転する。焼成は良好で硬質であり、胎土には砂粒と石英を多量に含む。瓦当面には離れ砂が付着する。同文瓦が東寺から出土している。平安時代後期。10は平瓦で凸面に格子叩きを施す。7・9・10は1Tr.土坑1, 8は4Tr.土坑5から出土した。

4 まとめ

今回の調査で確認した溝2は、中和院推定西築地心に近く院西限の区画溝である可能性が高いが、南延長線に設定した4・5Tr.では後世の削平により確認し得なかった。中和院の復原東西幅(50丈)は、内裏との境である東築地を確認した成果を宮中軸線で折り返した数値であり、豊楽院や中務省、太政官等と同じ幅である。今回、西限推定ライン付近に溝2を確認したことは、現状の復原案を補強する成果といえよう。

また、室町時代後半の遺物を認めたことは、内野である調査地周辺が当該期に再び開発の手が加わったことを示しており、平安宮廃絶後の土地利用の様相の一端を明らかにすることができたといえよう。(西森 正晃)

註

- 1) 「暴風大風、中院西樓倒、打死牛。」『日本後紀』延暦二十三年(804)八月壬子条
- 2) 「中和院一内蔵寮跡(付章 未報告調査の概要)『平安宮1』(財)京都市埋蔵文化財研究所、1995年
- 3) 「平安宮内裏院跡」『京都市内遺跡試掘立会調査概報 昭和62年度』京都市文化観光局、1988年
- 4) 「平安宮中和院跡」『平安京跡発掘調査概報 平成元年度』京都市文化観光局、1990年ほか
千本下立売交差点やや北側を中心に、深さ約1.1m、東西約40m以上に及ぶ掘り込み地業が確認されている。この範囲が宮城の中央北よりで、中和院のほぼ中央であることから、神嘉殿に伴うものと推定されている。ただし、陽明文庫本『宮城図』には、神嘉殿は院北西部に描かれている。
- 5) 「可修造風損所々事。(中略)中院。七間三面檜皮葺屋一宇。摂津国。神嘉殿東西廊廿間。西十間出雲国。同日改備中。東十間加賀国。同日改伊予。四間一面檜皮葺西屋一宇。和泉国。備中。三間渡殿一宇。摂津国。同日改伊予。」『左徑記』長元七年八月十九日条
神嘉殿そのものが檜皮葺との記載はないが、天皇親祭の舞台である神嘉殿が榎瓦葺とは考えにくいだろう。
- 6) 土師器皿の年代観は、小森俊寛・上村憲章「京都の都市遺跡から出土する土器の編年的研究」『研究紀要』第3号、(財)京都市埋蔵文化財研究所、1996年に依拠する。

III - 1 平安京左京五条三坊十一町跡・烏丸綾小路遺跡 (平成 23 年度 No.40)

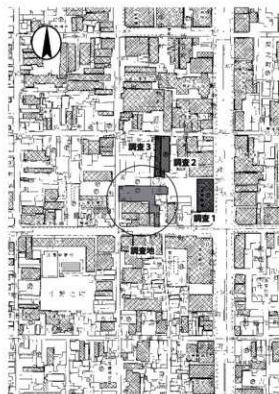


図7 調査位置図 (1:5,000)

1 はじめに

本件は下京区山王町地内におけるプライダル会場建設計画に伴う試掘調査である。調査地は、平安京左京五条三坊十一町跡と烏丸綾小路遺跡に該当している。十一町については平安時代の宅地に関する記述はないが、中世以降は下京の中心地となっている。町内の調査成果では、東隣の五条警察署建て替えに伴う調査(調査1)で、四行八門制に規制された平安時代中期の溝や、鎌倉時代から室町時代の柵列を確認している¹⁾。北隣の共同住宅建設に伴う調査(調査2)では、十一町を東西に二分する場所で平安時代後期の溝を確認している²⁾。上記の成果からは、平安時代の十一町は小規模宅地として利用されていた様相が読み取れ、四行八門が中世に至るまで土

地区画として影響を与えていたことがわかる。烏丸綾小路遺跡に関連するものとしては、調査1で弥生時代末期から庄内期にかけての土坑、調査2で弥生時代の包含層、立会調査(調査3)で須恵器短頸甕が完形で出土している³⁾。したがって今回の調査では、町内における土地利用状況の変遷を確認することを目的とした。

調査は、平成 23 年 11 月 7 日から 9 日まで実施した(京都市内遺跡試掘調査報告平成 23 年度 No.40)。本来ならば、前年度の試掘調査報告書で報告すべきだが、設計変更の協議が 2012 年まで及んだため、今年度報告する。調査区は建物形状に合わせ 2 箇所設定し、面積の合計は 106 m²である。

2 層序と遺構

基本層序(図9)は、表土・近世堆積層以下、GL-1.1mで室町時代後半の遺構面、-1.4mで室町時代前半の遺構面、-1.6～1.8mにていわゆるウグイス色の整地層(ウグイス土)となり、その上面が平安時代中期から鎌倉時代の遺構面、-1.9mで黄色シルトの基盤層となる。

ウグイス土の上面で遺構検出を行い、土坑・柱穴・ピット等多数の遺構を確認した。なお、2 Tr. 南半については近世以降の攪乱が多く、遺構の残存状況は悪い。ウグイス土の整地層上面ま

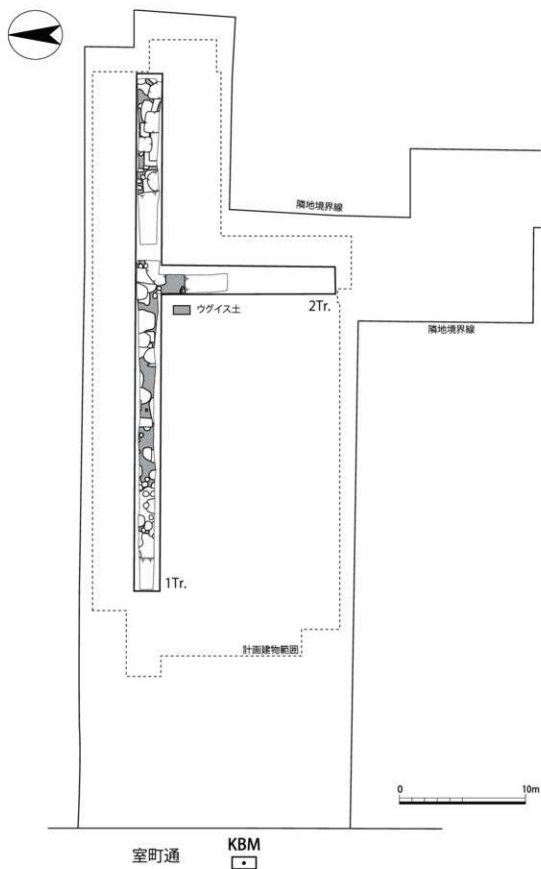


図8 調査区配置図 (1 : 300)

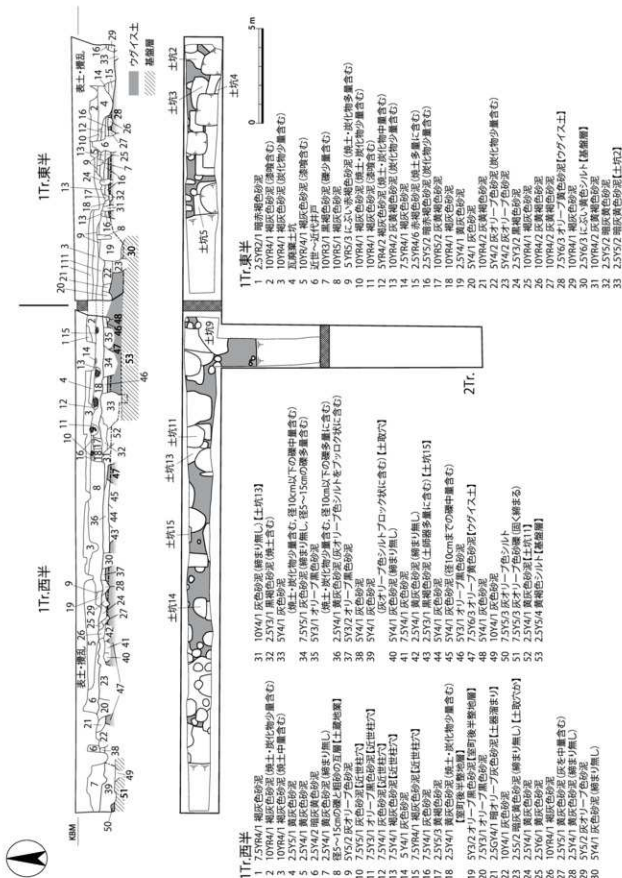


図9 調査区実測図 (1:200)

での検出に止めたために下層の確認を行っていないが、隣接地では平安時代以前の遺構・遺物が確認されているため、当該地にも広がっている可能性は高い。

土坑5 1 Tr. 東半で確認した土坑である。南は調査区外、西は近世土坑に切られ全容は明らかではないが、残存部で0.85m×0.6mを測る。埋土は灰黄褐色砂泥で12世紀中頃～後半(京都V期中～新)¹⁾に属する土師器皿を多量に含む。

土坑15 1 Tr. 西半の北壁際で確認した土坑である。大半が調査区外に広がり、全容は明らかではない。14世紀後半(VIII期古)に属する赤褐色の土師器皿を多量に含む土器溜まりである。

3 遺物

出土した遺物の時期は、平安時代から江戸時代に及ぶが中世以降の遺物が大半を占める。平安時代の遺物はウグイス土の整地層に含まれており、土師器・須恵器・緑釉陶器・灰釉陶器等がある。鎌倉時代の遺物は土坑や後世の包含層から出土しており、土師器・焼締陶器・輸入陶磁器等が出土している。室町時代の遺物は包含層・土坑・土取穴・ピット等から出土しており、土師器・瓦質土器・焼締陶器・輸入陶磁器等が出土している(図10)。

ウグイス土整地層出土土器(1～5) 1・2は土師器杯である。外面ヘラケズリ調整。1は口径13.6cm、2は口縁端部がやや肥厚する。3・4は全面施釉された緑釉陶器碗である。3は削り出し蛇の目高台で、内面見込み部に陰刻が認められるが文様の全容は明らかではない。胎土は灰白色を呈し精良。底径7.6cm。4は貼り付け輪高台。底径7.2cm。5は須恵器杯で、外面底部には回転糸切り痕が残る。底径5.6～5.8cm。9世紀後半(京都I期新)の年代を示す。

土坑5出土土器(6～20) 6～20は土師器皿である。大小2法量に分かれ、6～11は口径10cm弱、12～20は口径14～16cmが中心となる。大法量の中には14のようにやや深手のものも認められる。口縁部外面のナデは2段で、端部断面形状が三角形を呈するものが多い。12世紀中頃～後半(京都V期中～新)に属する。

土坑15出土土器(21～24) 21～24はいわゆる「へそ皿」とよばれる土師器皿である。胎土は赤褐色で、体部から口縁部にかけてやや外反する。口径は8cm前後。14世紀後半(京都VIII期古)に属する。

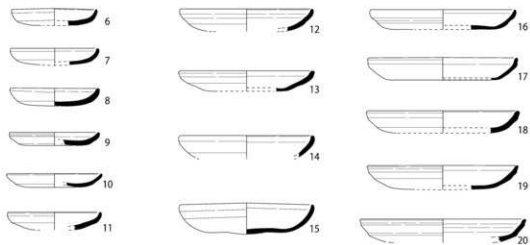
土坑9出土土器(25～27) 25・26は土師器皿であるが、25は「へそ皿」で灯明皿として使用されている。口径5.4cm高さ1.35cm。26は口縁部は外反し、内面端部に面を持つ。口径10.6cm、高さ1.7cm。27は白磁碗である。細片のため全容は明らかではない。16世紀中頃(京都X期中)に属する。

その他出土土器(28～35) 28は全面施釉された緑釉陶器皿である。内面はヘラミガキで高台は削り出し輪高台である。高台内部にヘラ記号が認められる。底径6.8cm。9世紀後半。29は瀬戸の灰釉折縁小皿である。口径6.9cm、底径3.0cm、高さ2.35cmである。30は瀬戸の灰釉丸皿である。外面底部に目跡が一つ残る。口径8.6cm、底径5.4cm、高さ1.6cm。29・30は16世紀代に属するものであろう。31は青磁碗で内面底部に「富貴長命」の銘が認められる。高

ウグイス色整地層



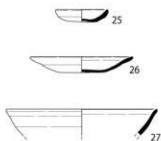
土坑5



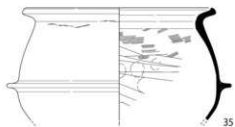
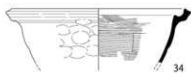
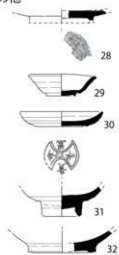
土坑15



土坑9



その他



0 10cm

図10 遺物実測図(1:4)

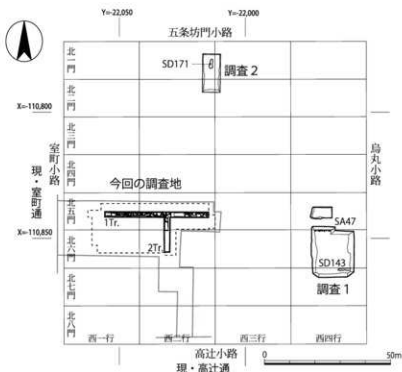


図 11 十一町遺構配置図 (1:1,500)

台径 3.6 ~ 3.8cm。32 は白磁碗である。高台径 7.2cm。33 は奈良火鉢の浅鉢底部で脚が付く。34 は瓦質土器の鍋で、口径 18.4cm である。14 世紀代。35 は大和系の土師器羽釜で、外面の罫以下には煤が付着する。口径は 19.6cm である。16 世紀末 ~ 17 世紀初頭に属する。29・31・32 は 1 Tr. 掘削中に、30 は 1 Tr. 西半の土坑 14, 33 は土坑 11 から、34 は 1 Tr. 東半の土坑 2 から、35 は 2 Tr. 掘削中に出土した。

4 まとめ

今回の調査では、周辺の調査同様に鎌倉時代から室町時代にかけて土地利用が活発になることが明らかとなった。これは、当地周辺が下京の中心として繁栄する時期を示していることを指摘できよう。

なお、確認した遺構については、基礎構造の設計変更を行い、十分な保護層を設けて地中保存されている。(西森 正見)

註

- 1) 「平安京左京五条三坊十一町発掘調査概要」『京都府遺跡調査概報 第 80 冊』(財)京都府埋蔵文化財調査研究センター, 1998 年
- 2) 伊藤 潔『平安京左京五条三坊十一町跡』京都市埋蔵文化財研究所発掘調査報告 2007-7, (財)京都市埋蔵文化財研究所, 2007 年
- 3) 「平安京左京五条三坊」『京都市内遺跡試掘立会調査概報 昭和 63 年度』京都市文化観光局, 1989 年
- 4) 土師器皿の年代観は、小森俊寛・上村憲章「京都の都市遺跡から出土する土器の編年の研究」『研究紀要』第 3 号, (財)京都市埋蔵文化財研究所, 1996 年に依拠する。

IV - 1 平安京右京北辺四坊六・七町跡・ 史跡妙心寺境内 No.12



図 12 調査位置図 (1:5,000)

1 はじめに

調査地は妙心寺の塔頭春光院の境内である。

春光院は妙心寺境内の北西部に位置する塔頭で、後の松江藩主堀尾吉晴(1544-1611)が、若くして没した長子金助の菩提を弔うため、天正十八年(1590)に建立したものである。創立当初は俊巖院と号したが、堀尾家が三代で断絶した後、後に膳所藩主・伊勢亀山藩主・淀藩主となる石川憲之が檀越となったことに伴い、寛永十三年(1636)現号に改称した。

また、平安京の条坊復元によると、当該地には無差小路が南北に走り、これを挟んで境内西半が右京北辺四坊七町、東縁部分が同六町に相当する。六町及び七町の占有状況を示す記録は残っていない。

今回、庫裡の北、墓地の南側にある明治時代の建築かと思われる納屋を解体し、新たに寄宿舎を建てる計画が申請され、文化庁より試掘調査が史跡現状変更の許可条件として付されたため、本市においてこれを実施した。調査は平成24年2月1日に1～3Tr.を設けて行い、これによって無差小路西側溝の可能性のある溝を検出したため、9日に4・5Tr.を設定して再試掘を実施した。調査面積は39㎡である。

2 層序と遺構

層序 基本層序は上から既存納屋建築時のものと思われる近代盛土(1層)、にぶい黄褐色泥砂層(2層)、明黄褐色砂泥の地山(13層)であるが、地山が西へ緩やかに低くなるため、トレンチ西半では2層と地山(西半では礫混黒褐色泥砂=12層)の間に3・4・7の各層が挟まり、4層上面が13層とほぼ水平となる。ほとんどの遺構は、この4層及び13層上面で検出した。

既存納屋礎石 上述のとおり、当該地点には調査直前まで木造の古い納屋が建っていた。調査時には南辺・西辺の礎石と地覆石のほか、若干の礎石が残されていたため、調査に先立って略測した。南辺では自然石を用いているが、西辺では転用材が多く使われている。

土坑1 1Tr.の西端近くで検出した。4層を切り込んで成立している。底に板石が座っている

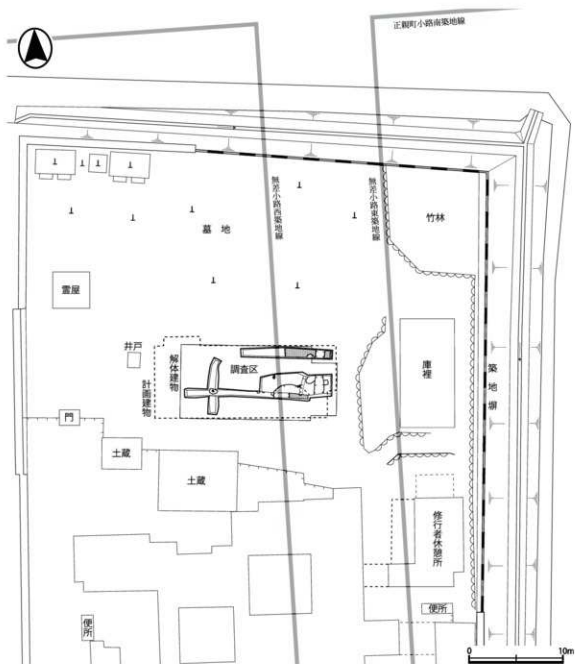


図13 トレンチ位置図 (1:400)

ため柱穴かとも考えたが、東西南北いずれにもこれに続く柱穴がなく、挿鉢状に浅く広い掘方が柱穴としては不自然であるため、土坑に偶然石が入ったものと結論した。遺物は出土しなかったが、4層から13世紀中葉の遺物が出土しているため、中世でもそれ以後のものである。

ビット2・3 直径0.25mほどの小穴で、地山(13層)上面で成立するが年代は不明。

近世土間面 4Tr.において近代盛土層の下で検出した。堅緻に叩き締められていることから土間と考えられる。その上面には礎石2つと抜き取り穴2つが確認された。礎石(抜き取り穴)の中心距離は東西方向が1.3m、南北方向が1.0mである。トレンチ東端では下層面まで掘り下げて溝6の埋土を検出したが、この際、土間の構築土(15層)から染付片が出土したため、近

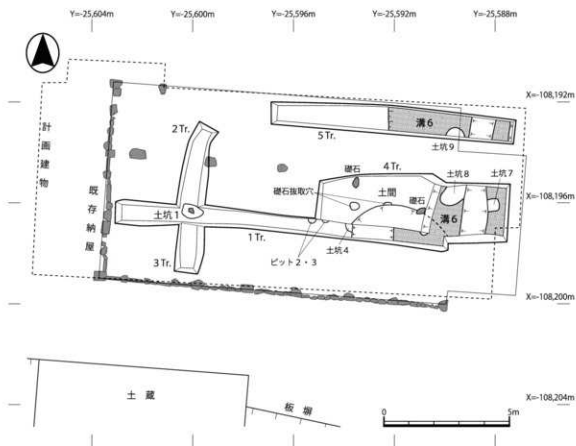


図14 トレンチ平面図 (1:150)

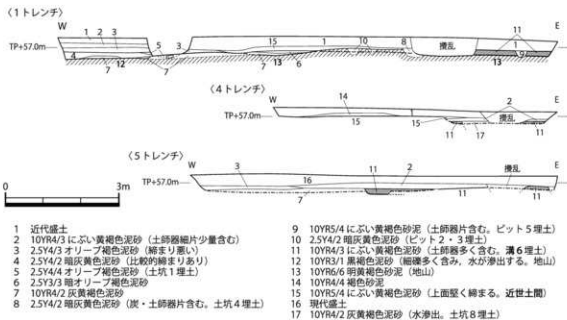


図15 トレンチ北壁断面図 (1:100)

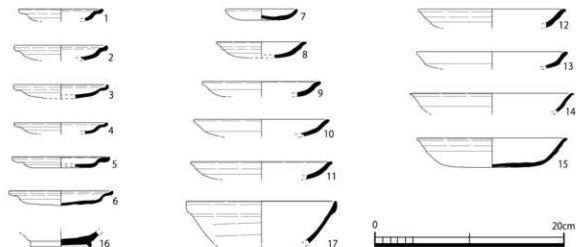


図16 遺物実測図(1:4)

世のものと考えられる。

溝6 1 Tr. で検出した時点では輪郭が攪乱で壊されていたため、遺構か堆積層の一つか判然としなかったが、4・5 Tr. で延長を検出したことにより溝であると判断した。地山(13層)を切り込んで成立しており、検出面からの深さは15cmを測る。東端はトレンチ外なので全幅は分からないが、5mを越える幅広の溝である。11世紀代の土師器皿の、比較的大きな破片を多く含んでおり、位置的に見て平安京無差小路の西側溝である可能性がある。

土坑7～9 溝6の上面で検出した。このうち方形を呈する土坑7について半載してみたが、検出面からはごく浅くしか残っていなかった。

3 遺物

図示した遺物のうち、7は2 Tr. 4層出土で、それ以外は全て溝6からの出土である。後者のうち1・5・6・8・10・12～15は1 Tr.、16・17は4 Tr.、それ以外は5 Tr. で出土した。

1～6はいわゆるての字状口縁の土師器皿で、やや厚手化しており、京都IV期中段階(11世紀中葉)と思われる¹⁾。7の土師器皿は京都VI期新段階頃と思われ、13世紀中葉と推定される。8～15は土師器の皿・杯で、口縁部外面に2段もしくは1段のナデを施し、口縁端部は反外する。京都IV期中段階。16は灰釉陶器の椀で、外面底部には糸切痕が残る。17は白磁椀で、京都IV期中段階ないしV期古段階のものと思われる。

4 まとめ

当該地で調査直前まで建っていた納屋は明治～大正時代の建築と思われるが、GL-0.25mで土間面と礎石を検出したことにより、近世にも建物があったことが判明した。礎石から想定される柱は3寸角程度で、敷地内における位置から見ても雑舎の類であると考えられる。

その下層で検出した溝6は、位置的に平安京無差小路の西側溝に相当する。検出幅は5m以上



写真2 1トレンチ全景（東から）



写真3 4トレンチ全景（南西から）

で、3尺とされる延喜式の規定よりはかなり大きいのが、現地は今でも地下水位が高く湧水が豊富な場所でもあり、豊富な水を処理する必要から、年月を経るうちに幅が広がったものと一応考えておきたい。11世紀中葉の遺物を含んだ土で埋まっており、この頃に機能停止したものと見られる。

なお、今回確認された近世土間而以深の遺構面については、史跡現状変更の許可条件として計画建物の基礎深を変更し、地下保存されている。（堀 大輔）

註

- 1) 小森俊寛『京から出土する土器の編年的研究』、2005年、京都編集工房

IV - 2 平安京右京二条四坊六町跡・安井馬塚古墳群 No.54

1 はじめに

調査地は、右京区太秦安井馬塚町2の一部
他で、京都太秦安井郵便局の北側に位置する。
この場所は平安京右京二条四坊六町の北東部
と安井馬塚古墳群に該当する。北側の七町は
右馬寮の厨町である右馬町であることが『拾
芥抄』にみられるが、六町の利用状況は明ら
かではない。安井馬塚古墳群は、2基の円墳
から成り、今回の調査地の西に所在していた
1号墳は直径約12mあった¹⁾。この円墳は大
正11年の都市計画図に土盛り状にみられる
が、その後削されたものと考えられる。

この場所で診療所の建設が計画されたため、
試掘調査をおこなった。周辺の調査では、安
井馬塚1号墳の北側で平成17年に試掘調査
をおこなっているが、顕著な遺構や遺物はみ



図17 調査位置図 (1:5,000)

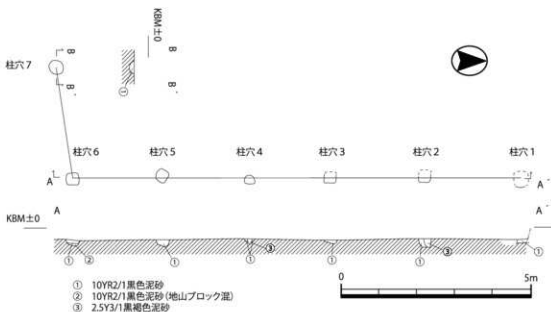


図18 SB1平面・断面図 (1:100)

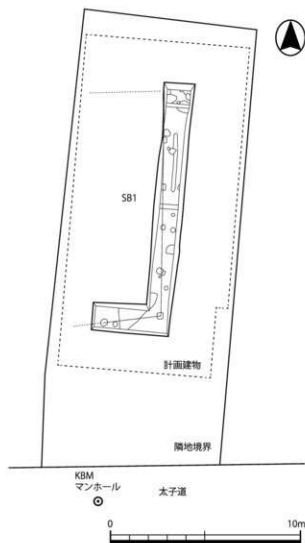


図19 調査区配置図(1:200)

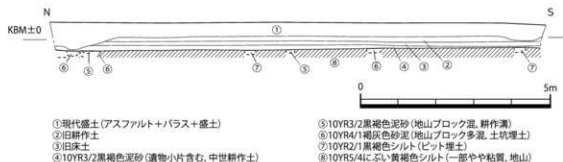
つかっていない¹⁰⁾。

調査は平成24年5月30日に実施した。調査区は、計画建物にあわせ南北方向に設定し、掘立柱列を検出したため西に拡張した。今回検出した遺構群は、保護層を設けたうえで地中保存されている。調査面積は23㎡である。

2 層序と検出遺構

基本層序は、現代盛土、旧耕作土、旧床土、中世耕作土、黄褐色系シルトの地山である。地山はGL-0.6～0.7mで検出した。地山上面で遺構検出をおこなった結果、中世の耕作溝と平安時代の柱穴、ピット、土坑を検出した。

SB1(図18・巻頭カラー図版写真1)桁行5間(総長11.7m)、梁行1間以上(総長3.0m以上)の南北棟建物である。柱穴は一辺0.3mの隅丸方形で、深さは0.1～0.2mである。柱間寸法は桁行が北から2.4+2.4+2.1+2.4+2.4m、梁行は3.0mである。桁行中央間が7尺で、そのほかは8尺、梁行は10尺となる。桁



- ①現代盛土(アスファルト+バラス+盛土)
- ②旧耕作土
- ③旧床土
- ④10YR3/2黒褐色泥砂(遺物小片含む、中世耕作土)

- ⑤10YR3/2黒褐色泥砂(地山ブロック混、耕作溝)
- ⑥10YR4/1褐灰色砂泥(地山ブロック多量、土坑埋土)
- ⑦10YR2/1黒褐色シルト(ピット埋土)
- ⑧10YR5/4にぶい黄褐色シルト(一部やや粘質、地山)

図20 東壁断面図(1:100)

行5間梁行2間の建物であったとすると70.2㎡の建物を復元できる。残存している柱掘方は浅く、上面が大幅に削平されている。柱痕跡がみられるのは柱穴2と4で、直径0.1～0.2mである。柱穴4は柱痕跡が掘方より深く、建物荷重により柱が沈下したものと考えられる。柱を抜き取った痕跡はみられない。柱穴からは土師器が出土したが、小片のため時期を確定できない。

SB 1以外にも平安時代の柱穴や土坑を検出しているが、建物や塀として復元できるものはない。遺構の重複がみられ、平安時代には2時期以上の変遷がみられる。出土遺物は小片のため、時期を確定できない。

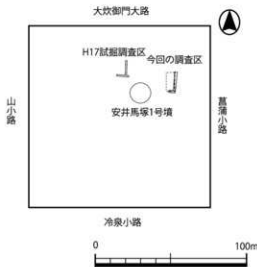


図21 平安京右京二条四坊六町全体図(1:2500)

3 まとめ

今回の調査地では、GL-0.6～0.7 mの地山上面で平安時代の遺構群を検出した。遺構面は、大幅に削平されているものと考えられる。

平安京右京二条四坊六町の調査成果をまとめたのが図21である。六町で平安時代の遺構を検出したのは今回がはじめてである。今回の調査地は六町の北東部に位置するが、すぐ西隣には安井馬塚1号墳がある。今回の調査で掘立柱建物がみつかったことにより、町内に古墳があった場合でも古墳を残したまま宅地利用していたことが明らかになった。平安京内で古墳が残っている例はなく、このような利用が一般的であったのかは不明である。(家原 圭太)

註

- 1) 原木英雄・丸川義広「山背嵯峨野の古墳所在地について その2—太秦地区を中心に—(後編)」『京都考古』第89号 2000年。
- 2) 京都市文化市民局『京都市内遺跡試掘調査報告 平成17年度』2006年。

Ⅳ-3 平安京右京三条二坊十二町跡・西ノ京遺跡 No.55



図22 調査位置図 (1:5,000)

1 はじめに

本件は、中京区西ノ京新建町内における共同住宅建設計画に伴う試掘調査である。調査地は、平安京右京三条二坊十二町跡と、西ノ京遺跡に該当する。周辺の調査では、西京商業高等学校で斎宮邸¹⁾、島津製作所内で大型掘立柱建物跡などを確認し、平安時代前期から中期にかけての宅地内利用状況を明らかにしている²⁾。また、野寺小路は平安時代後期に路面部分が南流する流路になることが明らかにされている³⁾。同町内においても掘立柱建物跡を3棟検出していることから⁴⁾、本調査においても平安時代前期の建物跡などの検出が期待された。調査は平成24年6月25日に実施し、面積は88㎡である。

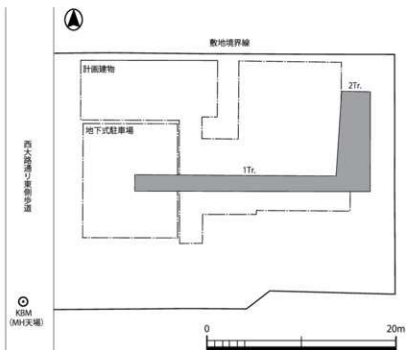


図23 調査区位置図 (1:400)

2 層序と遺構

当該地にはかつて京都府府税事務所があり、敷地の多くは解体による攪乱が予想された。そのため、中央東端から西側へ向けて掘削を開始し（1 Tr.）、攪乱の状況を把握した。想定通り既存建物範囲のほぼ全域に攪乱が及んでいたが、既存建物のない東端で平安時代の遺構面を確認することができ、遺構面の展開を把握するために北側へと調査区（2 Tr.）を拡張し、柱穴と溝を検出した。

1・2 Tr.ともに基本層序はほぼ共通しており、現代盛土及び解体攪乱以下、旧耕作土、GL-0.6～0.78 mで平安時代遺物包含層（2層）、GL-0.7～0.94 mで地山（3・4層）が堆積する。ただし、2 Tr.の北側では洪水堆積を確認した。

1・2 Tr.で検出した遺構は、柱穴4基、溝3条、土坑1基、Pit 1基である。

柱穴1 2 Tr.の南側やや西寄りで検出した方形の柱穴である。検出面での掘形は、東西0.75 m、南北1 m、深さは0.4 mを測る。掘形のやや北寄りで一辺約0.4 mの柱当たりを検出した。掘形の埋土は主に地山ブロックを含む黒褐色砂泥であるが、柱当たりのみ黄灰色砂泥を呈す。出土遺物から9世紀中頃には埋没したものと推測される。なお、柱穴1と柱穴2との距離は約4.5 m（15尺）を測り、柱間が長くなり過ぎるため対応しないものとする。

柱穴2 2 Tr.北側やや西寄りで検出した柱穴である。さらに、掘形の北肩を切り込むように柱の抜き取り穴が認められる。掘形の規模は検出面で一辺0.7 mの方形を呈し、深さは、0.37 mを測る。掘形埋土は、地山ブロックを多量に含む黒褐色砂泥で、柱の抜き取り穴は黒褐色砂泥を呈す。

柱穴3 柱穴1の掘形南東肩を掘り込むように成立する柱穴である。検出面で一辺0.3 mを測る。時期や性格については不明である。

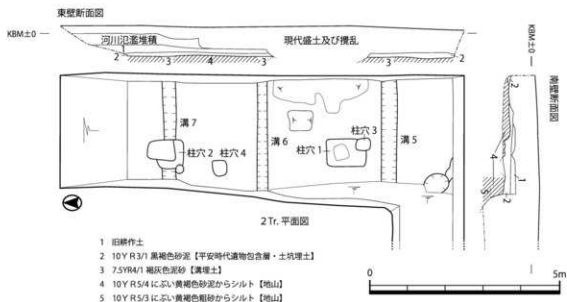


図24 2 Tr.平・断面図（1：100）

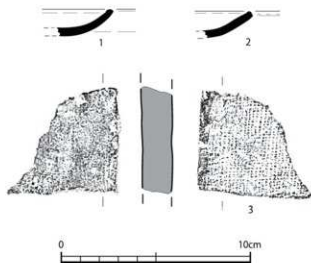


図25 出土遺物実測・拓影(1:2)

柱穴4 2 Tr.中央西側で検出した柱穴である。掘形は隅丸方形で東西0.4 m、南北0.25 mを測る。時期や性格については不明である。

溝5 2 Tr.南側で検出した東西方向の溝である。幅は検出面で0.4 mを測る。埋土は褐灰色泥砂で、遅くとも平安時代前期には成立していたものと推測される。座標での比較ができないため正確ではないが、四行八門にも対応せず、平安時代以前の耕作に伴う溝と考えられる。

溝6 2 Tr.中央で検出した東西方向の溝である。幅は検出面で0.25～0.3 mを測る。埋土は溝5と同じで褐灰色泥砂を呈す。

溝7 2 Tr.北側で検出した東西方向の溝である。幅は検出面で0.3～0.35 mを測る。埋土は溝5・6と同じで灰色泥砂を呈し、西側は柱穴2が溝7を掘り込んでいることから、平安時代以前に成立したと推測することができる。

3 出土遺物

1・2は土師器皿、3は平瓦である。1・2は柱穴1掘形埋土から出土。残存状況が悪く口径は不明。外面はケズリ、口縁はナデを施す。年代は京都Ⅱ期中に属する³⁾。3は、柱穴2から出土。凹面は布目が残り、凸面は縄叩きを施す。

4 まとめ

今回、非常に限られた調査区ではあったが、右京三条二坊十二町内の土地利用の一端を明らかにすることができた。周辺の調査成果を踏まえ、まとめとする。

本調査で検出した柱穴1と柱穴2は、ほぼ同一直線上に位置し、その間隔は、約4.5 m(15尺)を測る。この柱穴が同一建物であったと仮定すると、柱間が約4.5 mとなり、豊楽殿相当規模となる。しかし、柱掘形の一边が1 m前後であることから、豊楽殿規模の建物跡を想定し難い。そこで注目したいのが、同町内で実施された発掘調査成果である。調査地は西大路三条北東隅地で、平安時代前期から中期にかけての掘立柱建物跡を3棟と南北方向の溝跡を確認している。掘立柱建物の全容は明らかにされていないが、おおよそ梁間2.2～2.5 m、桁行2.0～2.5 mを測る。なかでも、梁間2.5 m、桁行2.0 mの東西棟の柱掘形は、約0.4～0.8 mを測り、今回検出した柱穴1・2と類似する。したがって、本調査で検出した柱穴も梁間2.5 m、桁行2間程度の施設を想定することができ、隣接して2棟の掘立柱建物が建てられていた可能性も考えられる。

また、柱穴埋土からは、小片ではあるが京都Ⅱ期中に属する土師器皿片が出土しており、平安

時代前期終わり頃に建てられたと考えられる。

東西溝は出土遺物も少なく検討することが困難ではあるが、上述した調査でも、平安時代以前の南北方向の溝を数条確認しており、今回の溝との関連性が伺える。溝が築かれた方向が違うもののほぼ等間隔に築かれており、耕作に伴う可能性が高い。

以上のように、右京三条二坊十二町は、平安時代以前から平安時代前期にかけて、耕作地として利用されていた可能性があり、平安時代中期に活発な土地利用が行われていたことが明らかとなった。とくに、同町内の中央北側と南側に掘立柱建物が建ち並んでいたと想定できる。そして中期以降は、出土遺物や周辺調査成果が明らかにしている通り、野寺小路の河川化などによって、生活に適さない場所になったものと推定することができる。(鈴木 久史)

註

- 1) (財)京都市埋蔵文化財研究所「平安京右京三条二坊十五・十六町 一「齋宮」の邸宅跡一」『(財)京都市埋蔵文化財研究所報告第21冊』2002
- 2) (財)京都市埋蔵文化財研究所「平安京右京三条三坊」『京都市埋蔵文化財研究所発掘調査報告第10冊』(財)京都市埋蔵文化財研究所1990
- 3) (財)京都市埋蔵文化財研究所「平安京右京三条二坊十四町跡」『京都市埋蔵文化財研究所発掘調査報告2006-1』(財)京都市埋蔵文化財研究所2006
- 4) (財)京都市埋蔵文化財研究所「31 平安京右京三条二坊十二町」『昭和53年度 京都市埋蔵文化財調査概要』(財)京都市埋蔵文化財研究所2011
- 5) 土師器の年代は小森俊寛・上村憲章「京都の都市遺跡から出土する土器の編年的研究」『研究紀要』第3号(財)京都市埋蔵文化財研究所1996に拠る。

IV - 4 平安京右京四条一坊七町跡 No.58



図26 調査位置図 (1:5,000)

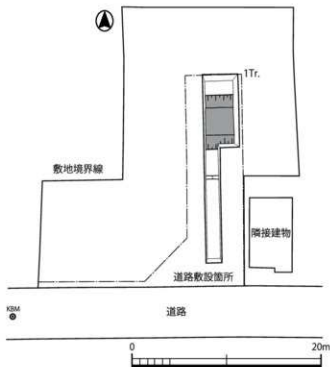


図27 調査区位置図 (1:400)

1 はじめに

本件は、中京区壬生天池町内における宅地造成工事に伴う試掘調査である。調査地は平安京右京四条一坊七町跡に当たり、嵯峨・宇多天皇の後院として知られている朱雀院の推定地である。朱雀院は南北4町・東西2町(右京四条一坊一町～八町)で復元されており、これまでに日本写真印刷¹⁾、ファミリーガーデン二条駅前建設に伴い発掘調査を実施している²⁾。両調査ともに、朱雀院に関連する大型建物跡などを検出しているが、後者の発掘調査地では南側に湿地堆積が広がるようである。また、本調査地の南隣でも試掘調査を実施し、平安時代の整地面を検出してはいるものの、明確な遺構の確認はできていないようである³⁾。このように、過去の調査事例を見る限り、朱雀院は北側と南側に大

型建物が建てられていたが、中央の土地利用は希薄であったことが分かる。ただし、湿地堆積を検出していることから、園池が築かれていた可能性を想定することができる。試掘調査は平成24年7月24日に実施し、調査面積は49㎡を測る。

2 層序と遺構

調査区は、道路敷設箇所にあわせ南北方向(1Tr.)に設定した。基本層序は、現在盛土及び攪乱、近世耕作土(3層)と続き、GL-0.8mで中世耕作土(5層)、-0.75～0.95mで地山(8層)となる。遺構検出は地山直上で実施し、北端で溝状遺

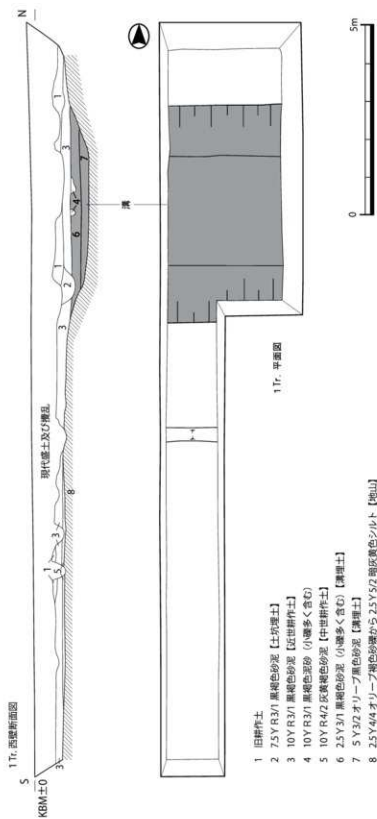


図 28 調査区平・断面図 (1 : 100)

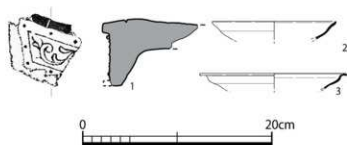


図 29 出土遺物実測・拓影（1：4）

構（東西方向）を検出した。なお、地山は北側がシルト層に対し、南側は砂礫層となる。

溝状遺構は、検出面で南北約 5.7 m、深さ約 0.5 m を測る。埋土は大きく上下 2 層に分層することができ、上層（6 層）は小礫や遺物を含む砂泥層となるが、下層（7 層）は小礫や遺物を含まない。



写真 4 溝状遺構掘削状況（南東から）

3 出土遺物

遺物の種類は、軒平瓦・土師器杯であり、すべて 6 層から出土した。

1 は軒平瓦である。瓦当の残存状況が悪く文様の全体構成を明らかにすることが出来ないが、唐草が複線で表現されていることから、小野瓦窯跡で出土しているものと同文と認識することができる⁶⁾。瓦当部成形は、平瓦凸面に頸部の粘土を付加する。凹面は細かい布目を残し、瓦当部付近は横ナデ、凸面は縦ケズリ、瓦当裏面から平瓦凸面にかけて縦ナデ、側面は縦ナデを施す。胎土は少量の砂粒を含み、焼成は硬質、色調は灰白色を呈す。複線で表現された唐草は、仁和寺円堂院創建緑軸軒平瓦の文様に採用されており、9 世紀後半から 10 世紀初頭に生産さ

れたものと推定することができる⁵⁾。

2・3 は土師器杯である。遺存状況は非常に悪いが、京都Ⅱ期新から京都Ⅲ期古に属する⁶⁾。2 は体部から口縁は緩やかに内湾する。口縁内外部とも横ナデ、体部は押さえを施す。3 は底部から口縁部が緩やかに屈曲して開く。口縁内外部とも横ナデ、体部は押さえを施す。

4 まとめ

今回の調査では敷地北側において、朱雀院に関連する溝状遺構を検出した。溝状遺構の形状は、平安京右京三条一坊六町（藤原良相邸）で検出した圓池に伴う排出溝や遣り水などに類似する⁷⁾。しかし、埋土の堆積状況から流水の痕跡は認めがたく、池の堆積状況に近い。したがって、巨大な圓池の蛇行している一部分を検出している可能性も考えられる。また、埋土から出土する

遺物は、9世紀後半から10世紀初頭に属する土師器や瓦のみであることから、遅くとも10世紀初頭には埋められた可能性が高い。朱雀院は、弘仁十四年(823)頃から承和三年(836)までは、嵯峨天皇の後院として利用され、その後嵯峨天皇の崩御と供に一時衰退するが、寛平八年(896)になると宇多天皇によって再建される。したがって、溝状遺構は、嵯峨天皇の造営時に成立し、宇多天皇による朱雀院再建の際に埋め戻されたと推測することができる。

宇多天皇によって再建された朱雀院は、文献史料によって寝殿や馬場殿などが造営されたことが明らかにされている⁸⁾。しかし、嵯峨天皇の朱雀院の様相については、ほとんど分かっていない。本調査で検出した溝状遺構は、嵯峨天皇時に成立したものである可能性が高く、朱雀院を復元・検討する上で重要な資料と成りうる。今後、当該地周辺の調査でも留意する必要がある。

(鈴木 久史)

註

- 1) 永田信一「朱雀院跡発掘調査概要」『平安京研究』1 平安京調査会 1974
田辺昭三「朱雀院跡発掘調査の成果について」『平安京研究』1 平安京調査会 1974
- 2) 吉川義彦「平成9年12月11日付け埋蔵文化財発掘調査終了届」に拠る。(但し報告書は未刊行)
- 3) 京都市文化市民局文化芸術都市推進室文化財保護課「京都市内遺跡試掘調査報告 平成18年度」京都市文化市民局 2007
- 4) (財)京都市埋蔵文化財研究所「Ⅱ 小野瓦窯跡」『京都市内遺跡発掘調査概報 平成16年度』2005
- 5) (財)京都市埋蔵文化財研究所「仁和寺境内発掘調査報告書—御室会館建設に伴う調査—」『京都市埋蔵文化財研究所報告第9冊』1990
- 6) 土師器の年代は小森俊寛・上村憲章「京都の都市遺跡から出土する土器の編年の研究」『研究紀要』第3号(財)京都市埋蔵文化財研究所 1996に準じる。
- 7) (財)京都市埋蔵文化財研究所「平安京右京三条一坊六町(第3調査区)現地説明会資料」2011
- 8) 太田静六「朱雀院の考察」『寝殿造の研究』吉川弘文館 1987

IV - 5 平安京右京四條四坊四町跡・山ノ内遺跡・西院城跡 No.60

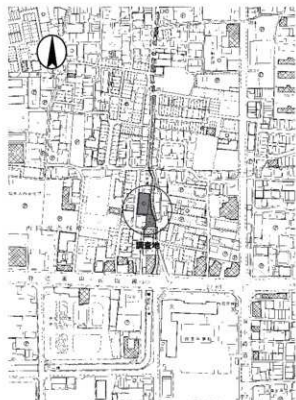


図30 調査位置図 (1:5,000)

1 はじめに

調査地は右京区西院四條畑町2で、西小路四條の北西方にある。平安京右京四條四坊四町東端、山ノ内遺跡南東端、西院城跡西端に該当する。この場所で福祉施設の新築が計画されたため、試掘調査をおこなった。平安京右京四條四坊四町は、『拾芥抄』西京図によると平安時代後期に天台座主良真大僧正の所領であったことがわかる。しかし、周辺の調査はおこなわれておらず、利用状況は明らかではない。

西院城は小泉秀清の居城で、『上杉本洛中洛外図屏風』に描かれている室町時代の環濠式平城である。平成8年度におこなった西院城中央付近での立会調査で室町時代の南北溝や溝状土坑を検出しているが¹⁾、その他に顕著

な調査成果はない。

調査区は、敷地中央付近に木辻大路の築地心が、東端に西院城跡の西隈（西濠）が想定されたため、東西方向に2箇所調査区を設定した（1Tr・2Tr）。その結果、平安時代の南北溝を検出したため、1Trをを広げ南北溝と柱穴の広がりを確認した（3Tr）。調査は平成24年8月9日に実施した。調査面積は約59㎡である。

2 層序と検出遺構

基本層序は現代盛土、旧耕作土、地山である。地山はGL-1.3m（標高26.5m）で検出した。地山上面で遺構検出をおこなった結果、平安時代の南北溝1条（SD1）、掘立柱列（SB2）、掘立柱穴を検出した。

SD1（図32・巻頭カラー図版写真2） 総長11.5m分検出した平安時代の南北溝である。3Tr北端では幅1.0m、深さ0.2mであるが、SB2の南側から広くなり、3Tr南端では幅2.8mとなる。溝底のレベルは南が低く、地形に合わせて南流する溝であったとみられるが、2Trでは北に一段下る。溝心は木辻大路築地心推定ラインから西3.0mの位置にあり、SB2の雨落ち溝を兼ねた平安京右京四條四坊四町の内溝と推定される。ただし、SD1より東では築地や外溝の痕跡は検

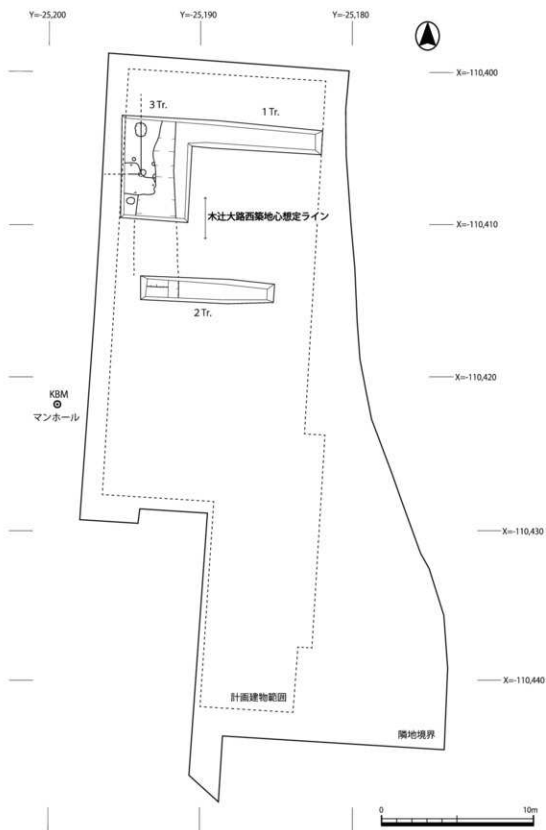


図 31 調査区配置図 (1:250)

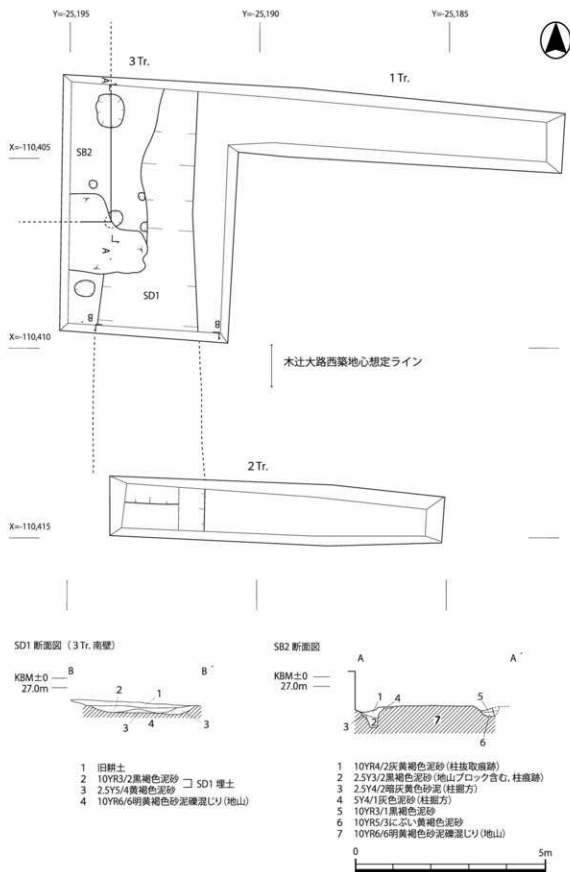


図 32 調査区平面・断面図 (1:100)

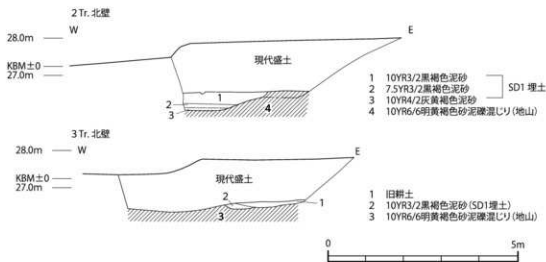


図33 2Tr.北壁・3Tr.北壁断面図(1:100)

出できなかった。

SB2 SD1の西1.0mで、南北1間分(柱穴2基)の掘立柱列を検出した。北側の柱穴は径0.8mの不整形形で深さは0.5mである。柱穴の断面観察によると、柱掘方は浅く0.1～0.2m程度しか残存していない(3・4層)。柱痕跡は直径0.2～0.3mで、深さが検出面から0.5mとなる(2層)。柱抜取穴は柱痕跡の上部までしか及んでいない(1層)。したがって、建物廃絶後、柱を抜き取るために途中まで掘削し、その後、柱を切り取ったものと考えられる。

南側の柱穴は攪乱により南西部が明らかではないが、直径0.5mで深さ0.3mの不整形形とみられる。埋土は2層に分かれるが、柱痕跡などは確認できない。2つの柱の柱間寸法は3.0m(10尺)である。柱の規模や深さが異なることから、北側の柱が身舎で、南側の柱が廂の南廂付東西棟建物の南東隅である可能性が高い。

その他に、小規模な柱穴を検出したが組み合わせる柱穴はなく、調査区外にあるものとみられる。また、出土遺物は土師器皿、須恵器環などが出土したが、小片のため図化できなかった。

3 まとめ

今回の調査地は、西院城の西濠を検出することが期待されたが、西院城にかかわる遺構は検出しなかった。しかし、敷地の西半では平安時代の遺構が残存していることが明らかになった。

SD1は木辻大路築地心推定ラインから西3.0mの位置にあり、平安京右京四条四坊四町の内溝とみられる。このSD1は北端で幅1.0mであるが、南端では幅2.8mと広くなる。内溝は宅地内の排水が主目的であることから、排水機能の拡充のため幅を広げられたものと考えられる。

内溝がみついている一方で、木辻大路西側溝がみつからないことは興味深い。『延喜式』によれば、大路は広さ(築地心間距離)8丈あり、築地基底部の半分が3尺、犬行5尺、側溝幅4尺、側溝間5丈6尺とされている。この規定によれば、築地幅と犬行をとったとしても木辻

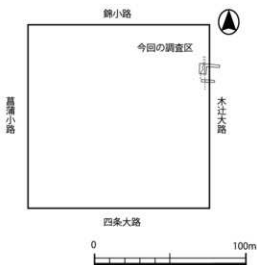


図 34 平安京右京四条四坊四町全体図 (1:2500)

大路築地心想定ラインから2～3m前後で側溝の西肩が検出されるはずである。平成9年度に平安京右京一条四坊四町の調査で木辻大路の西築地と側溝、内溝を検出しているが、築地中心線は推定ラインより約1.8m東によっていることが明らかになっている²⁾。いずれにしても、今回その想定位置にあたる1Tr.では遺構は検出されなかった。

検出されなかった原因の1つとして、遺構面が削平された可能性が想定できる。SD1は北端で深さが15cmであること、SB2の柱掘方の深さが10～20cmであることから、遺構面は少なくとも1m以上は削平されているものとみられる。内溝を検出していること

から、内溝が側溝よりも深いことになるが、内溝が南半で幅2.8mと規模が大ききことをふまえると側溝が削平され内溝が残存している可能性も考える必要があるだろう。

条坊側溝は左右京職によって保全されており、宅地内にある内溝は諸家(宅地居住者)により管理されていた³⁾。条坊側溝は先述したように規模が規定されていたが、内溝には規定はない。今回の調査では、内溝が検出されたにもかかわらず、側溝を検出することができなかった。側溝と内溝の維持・管理のされかたにより溝の深さが異なり、そのことによって内溝のみが削平されず残存したものと考えるのが、最も整合性のある解釈であろう。律令国家による条坊や築地の管理を知るうえで重要な成果であり、今後も側溝と内溝の関係に注意した調査が必要である。

(家原 圭太)

註

- 1) 京都市文化市民局『京都市内遺跡立会調査概報 平成8年度』1997年。
- 2) 財団法人 京都市埋蔵文化財研究所『平成9年度 京都市埋蔵文化財調査概要』1999年。
- 3) 斉衡2年(855)には、側溝の管理も街路に面した諸家に責任を負わせることとなる(『類聚三代格』巻16、斉衡2年9月19日太政官符)。北村優季『平安京—その歴史と構造—』吉川弘文館、1995年。

IV-6 平安京右京八条一坊二・三・四町跡・御土居跡 NO.17

1 はじめに

調査地は、京都市下京区歓喜寺町内で現在の梅小路公園内の西側（ふれあい広場・駐車場）に位置し、平安京右京八条一坊二・三・四町跡・御土居跡に当たる。『拾芥抄』京程図右京によると、右京八条一坊三・四町は、五・六町を含め本康親王の「八条宮」が造営され、中期になると藤原保忠に伝領され「大将町第」となる¹⁾。

調査地の現状は、山陰連絡線高架の側道より約1m高く、公園の中央には遊具などが設置されている。それを取り囲むようにアスファルト敷きの駐車場があり、南西側に向かって緩やかに高くなる。調査期間中も公園・駐車場として利用するため、安全を考慮した上で11箇所の調査区を設定した。調査は2月6日から2月20日にかけて実施した。調査面積は474㎡である。

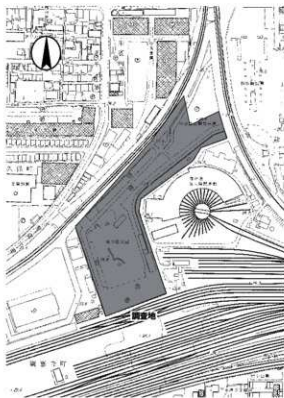


図35 調査位置図 (1:5,000)

2 層序と遺構

調査地は古くから国鉄の線路が敷設され、現在の梅小路公園が造成される直前の地図を見ると、線路の他にも大型の車庫や倉庫が建ち並んでいる。このような状況は、3・4・6・7・8・11Tr.で地山直上まで攪乱が認められたことから明らかである。一方、既存建物の影響が及んでいない調査区(2・5・9・10Tr.)では、平安時代遺物包含層や平安時代遺構面を検出することができた。ここでは、遺構などを確認することができた調査区(2・5・9・10Tr.)を中心に報告する。

2・5・9・10Tr.の基本層序はほぼ共通しており、近・現代盛土及び攪乱以下、旧耕作土、平安時代遺物包含層、地山となる。遺構検出面の標高は、2Tr.で23.01m、5Tr.で22.61m、9Tr.で22.59m、10Tr.で22.25mとなり、北から南へと緩やかに傾斜していることが分かる。また、地山も北から南へと緩やかに傾斜する。

(1) 2Tr. (図38) 調査区は右京八条一坊二町・朱雀大路西側築地・側溝推定地に設定した。調査区の南側は、近世の耕作に伴う水路や井戸などによって削平を受けていたが、北側では平安時代の整地層(11層)・朱雀大路西側溝(12層)・朱雀大路西側築地基底部(13層)を検出す

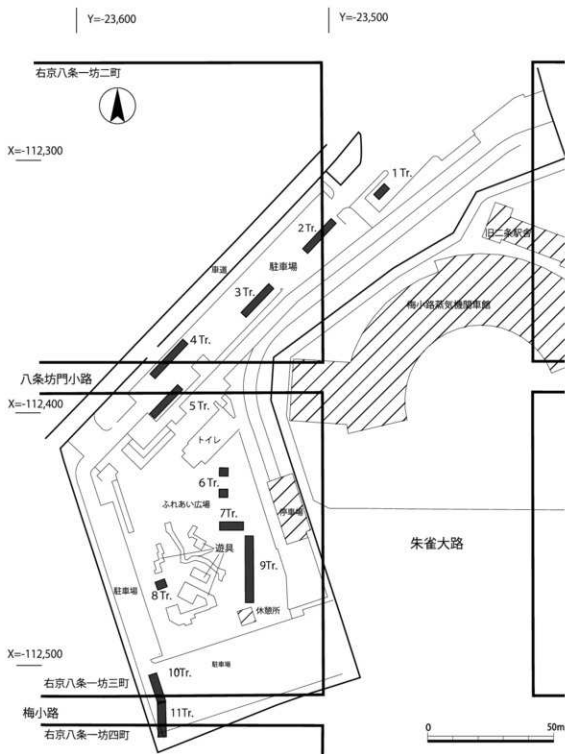


図 36 調査区配置図 (1 : 1,500)

ることができた。

朱雀大路西側溝 調査区北端で僅かに検出した溝である。溝の規模は、検出面で幅 0.25 m を測り、調査区外へと広がり、平安時代の整地層直上で成立する。埋土は黄灰色泥砂で、後述する朱雀大路西側築地基底部に平行するように築かれている。

朱雀大路西側築地基底 調査区中央部で検出した築地基底部である。地山直上に黄灰色砂泥層を突き固め、検出面で1.5 mを測る。版築などは認められない。

(2) **5 Tr. (図 38)** 調査区を右京八条一坊三町・八条坊門小路南側溝推定地に設定した。調査区の北側半分は、地山直上まで国鉄期建物の解体攪乱によって近・現代盛土となるが、南側半分では近現代盛土以下、旧耕作土、平安時代遺物包含層(3層)が堆積する。遺物包含層は暗灰色砂泥を呈し、土師器小片が出土した。

土坑 2 調査区南端で検出した土坑である。調査区外へと展開するが検出面で幅0.35 mを測る。埋土は黄灰色砂泥で、土師器小片が出土した。

(3) **9 Tr. (図 39)** 調査区を右京八条一坊三町内に設定した。調査区全域で、近代盛土直下で平安時代の遺物包含層(1~4層)を確認した。遺物包含層は厚い箇所ので約0.75 mを測り、シルトから砂礫層へと変化する。なかでも1層からは、多量の遺物が出土した。遺物包含層は、堆積状況から湿地もしくは池の埋土と推測することができる。なお、調査区中央の一部は湧水が著

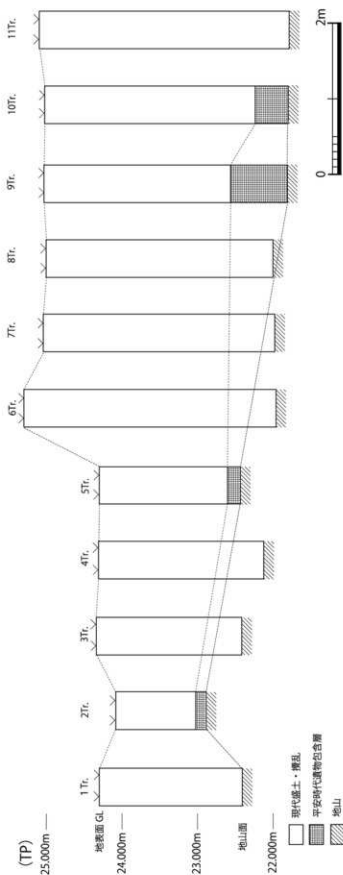


図 37 各調査区土層断面柱状図 (1 : 50)

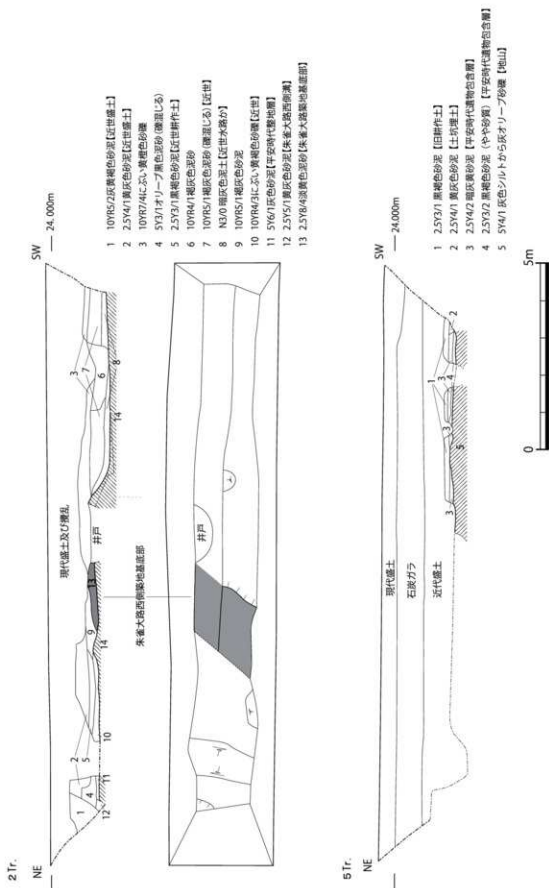


図 38 2・5Tr. 平・断面図 (1:100)

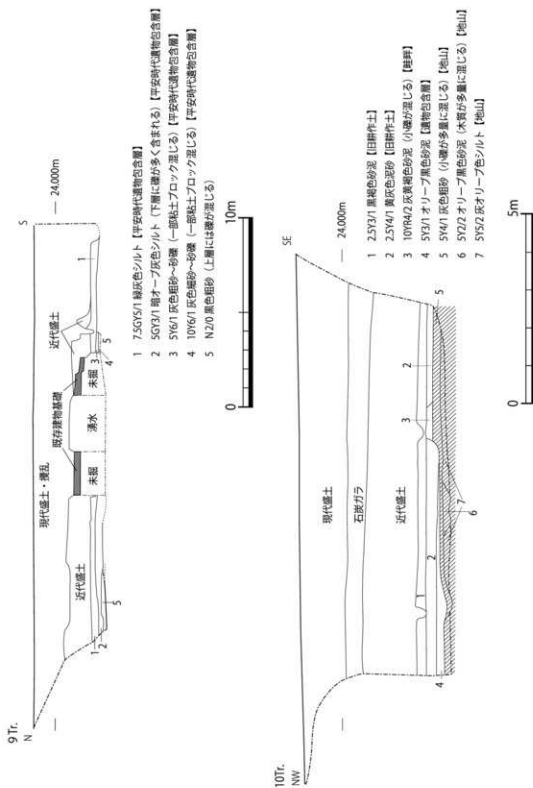


図 39 9Tr. 断面図 (1:200)・10Tr. 断面図 (1:100)

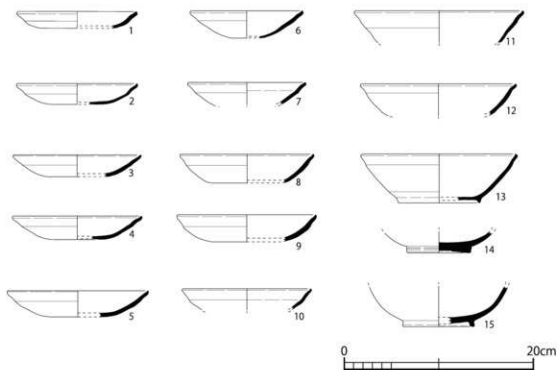


図40 9Tr. 出土遺物 (1:4)

しく断面観察を実施することができなかった。

(4) 10Tr. (図39) 調査区を右京八条一坊三町内、梅小路北側溝推定地に設定した。調査区南側半部分は、地山直上に近世耕作土が堆積しているが、北側半部分で遺物包含層(4層)を検出することができた。遺物包含層は、オリブ黒色砂泥を呈しており、土師器小片が出土した。遺構検出を地山直上で実施したが、梅小路北側溝を確認することはできなかった。

3 遺物

出土した遺物は土師器、国産施軸陶器、瓦類などで、コンテナで1箱分である。出土遺物のほとんどは9Tr. から出土した。

1～6、12～15は9Tr. 1層、7～11は9Tr. 4層から出土した。1は、土師器皿である。内外面ともにナデを施す。2～13は、土師器杯である。2～10の口径は12.4～14.6cmを測るが、11～13は口径16.2～17.8cmでやや大型である。平坦な底からやや丸味をもって立ち上がり、口縁はつまみ上げる。内外面ともにナデを施す。1～13は京都Ⅱ期に属す²⁾。13は、底部に高台を貼り付けた輪高台である。14は緑釉陶器椀で内外面ともにヘラミガキ調整し、底部は貼り付けの輪高台である。胎土は硬質で、釉薬は土壌の影響によって変色しているが淡緑色を呈す。京都Ⅱ期中に属し、尾張産と推測される。15は底部が残存し、内外面ともヘラミガキ調整し、底部はケズリ出しの蛇ノ目高台である。高台の周辺はナデ調整を実施している。胎土は軟質で、釉薬は土壌の影響によって変色しているが、淡緑色を呈す。京都Ⅱ期中に属し、山城産と推測される。

4 まとめ

本調査では、朱雀大路西側築地基底部・西側溝、右京八条一坊三町内で平安時代の遺物包含層を確認した。最後にこれらの遺構と遺物について考察を加えまとめとする。

右京八条一坊三町 右京八条一坊三町内に設定した9Tr.では、平安時代遺物包含層を検出した。平安時代遺物包含層は3層に大別することができ、シルト層から砂礫層へと変化し、下層が礫層ではあるが、粘土を貼り付けた痕跡は認められない。とくに1層から、国産緑釉陶器や土師器皿片が多量に出土した。このような堆積状況から、池の一部を検出したものと推測することが出来るが、調査区内で汀などの肩口を確認することもできなかったため、圃池として意識されていたのかを明らかにすることができなかった。ただし、出土した土師器が、ほぼ京都Ⅱ期中（870～890年）内におさまり、一括で廃棄されたことは留意される。9世紀後半頃の三・四町は、本康親王の八条宮から藤原保忠の大将町第へと移り変わる時期である。両邸宅内の建物配置などは明らかにされていないが、両宅地とも2町四方と平安京内でも大規模な敷地を誇る。したがって、八条宮の段階で圃池として管理されていたものが、大将町第となり宅地内の利用方法が変わり、池を埋める際に遺物を大量に破壊した可能性を想定することができる。いずれにせよ、9世紀後半頃の調査地周辺では、活発な土地利用が行われていたことが分かる。また、部分的な調査であることから慎重を要するが、平安時代中期以降の遺物がほとんど出土しないことから、中期以降の土地利用はあまり行われておらず、水田地として利用されていた可能性が高い。

朱雀大路・朱雀大路西側溝 朱雀大路は『延喜式』左右京職の規定によると、道路幅が左右の築地の心々から28丈（約84m）、両側に幅5尺（約1.5m）の溝、さらに幅1丈5尺（約4.4m）の犬行が通り、築地の基底幅は6尺（約1.8m）となる。本調査で確認した築地基底部は、約1.5mを測り非常に残存状況は良好である。また、調査区北端で平安時代の整地面を掘込む溝を検出した。溝は断面確認に留まったため全長を明らかにすることが出来なかったが、検出面で幅0.25mを測る。築地基底部との間は、約4.75mを測り、ほぼ『延喜式』の内容と一致する。検出面での幅が0.25mと狭いが、検出位置から朱雀大路西側溝と推定することができる。

以上のように、国鉄期の擾乱が認められるものの、平安時代前期後半から中期にかけての宅地内外の様相の一端を明らかにすることができた。（鈴木 久史）

註

- 1) (財) 古代学協会・古代学研究所『平安京提要』角川書店 1994年
- 2) 土師器の年代は小森俊寛・上村憲章「京都の都市遺跡から出土する土器の編年の研究」『研究紀要』第3号(財)京都市埋蔵文化財研究所 1996に拠る。

V - 1 郡城跡・東衣手町遺跡 No.76

1 はじめに

調査地は、右京区西京極東衣手町68-1で、葛野西通と万寿寺通（府道梅津東山七条線）の交差点の南西方向にあり、三宮神社の南、浄土宗西山派念仏寺の北側に位置する。当該地を含む周辺地は、中路氏の居城「郡城跡」に推定されている¹⁾。また、昭和60年に家屋工事に伴い7世紀代の須恵器合わせ口甕棺墓が北側隣接地で見つかったことから、「東衣手町遺跡」にも含ま



図41 調査位置図 (1:5,000)



写真5 東西調査区全景 (西から)

れている。

この場所で木造2階建て（建築面積291.84㎡）の集合住宅が計画されたことから、郡城跡等の遺構残存状況を確認する目的で試掘調査を平成24年10月9日に実施した。

調査は、母屋等が解体途中であったことから、母屋前面の通路にL字形の調査区を設定して行った。

調査では、遺構成立面である硬化した整地層を3面確認し、中世整地層の可能性のある下層の硬化面を保存することとなった。調査面積は24㎡である。

2 層序と検出遺構

基本層序 (図43) 表土直下のKBM（敷地南側道路マンホール天溝）±0mでぶい黄橙色泥砂層（上層硬化面：③、④）があり、灰黄褐色泥砂層が続く。次いで、KBM -0.3mでぶい黄橙色泥砂層（中層硬化面：⑥）になり、その下層に締まりのないぶい黄橙色泥砂層が続く。さらにKBM -0.7mで暗灰黄色泥砂層（下層硬化面：⑪、⑫、⑬）に達する。この下層硬化面の下層を調査区の東端及び南西隅で確認したところ、東端では⑪層の下層に厚さ10cm前後の整地層（⑫、⑬）が続き、その下層でぶい黄橙色泥砂層からな

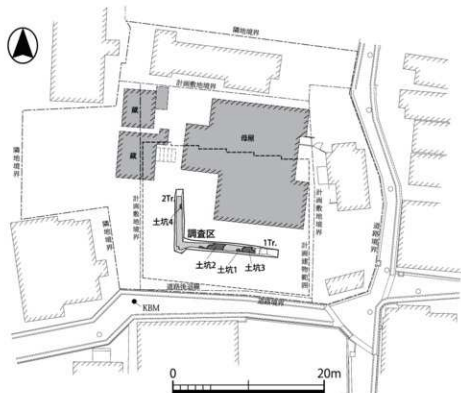
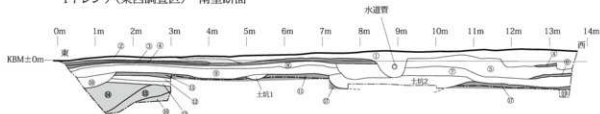
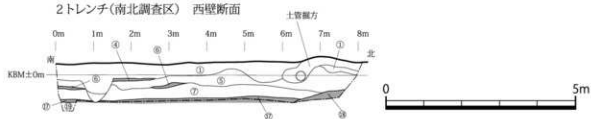


図42 調査区配置図 (1:500)

1 トレンチ(東西調査区) 南壁断面



2 トレンチ(南北調査区) 西壁断面



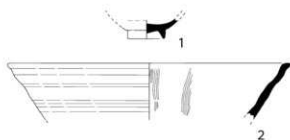
- | | |
|--|--|
| ① 10YR3/1 黒褐色泥砂(炭化物・小石含む):近現代整地土 | ⑥ 10YR5/4 にごい・黄褐色泥砂:整地層 |
| ② 10YR5/1 褐色泥砂(粘土):近現代整地土 | ⑦ 10YR5/4 にごい・黄褐色泥砂:整地層 |
| ③ 10YR7/4 にごい・黄褐色泥砂(強く締まる):硬化面(第1遺構面) | ⑧ 10YR4/3 にごい・黄褐色泥砂(膨大な砂礫を多量に含む) |
| ④ 10YR7/4 にごい・黄褐色泥砂(強く締まる):硬化面(第1遺構面) | ⑨ 10YR4/4 にごい・黄褐色泥砂(凝りなし) |
| ⑤ 10YR4/2 灰黄褐色泥砂(土器小片,小砂含む) | ⑩ 10YR6/4 にごい・黄褐色泥砂(膨大な砂礫を多く含む) |
| ⑥ 10YR6/3 にごい・黄褐色泥砂(強く締まる):硬化面(第2遺構面) | ⑪ 10YR6/2 灰黄褐色泥砂(粘りあり):硬化面(第3遺構面) |
| ⑦ 10YR6/3 にごい・黄褐色泥砂(小砂含む,凝り) | ⑫ 10YR5/2 灰黄褐色泥砂(小石少ない):⑩層と同様の遺構面(第3遺構面) |
| ⑧ 10YR4/2 灰黄褐色泥砂(小石・土器片少し含む) | ⑬ 10YR4/2 灰黄褐色泥砂(凝りなし):古代の土器片出土 |
| ⑨ 10YR3/1 黒褐色泥砂(黄褐色泥砂ブロックが点在・小石・炭化物も) | ⑭ 土坑1埋土 10YR3/2 黒褐色泥砂(粘土少し含む),石が配されており,何か? |
| ⑩ 10YR4/2 灰黄褐色泥砂(膨大な砂礫多く含む) | ⑮ 土坑2埋土 10YR4/2 灰黄褐色泥砂(膨大な砂礫多く含む) |
| ⑪ 2.5Y4/2 暗灰黄色泥砂(小石少し入る):締まりは弱い,が,層厚と同様の遺構面(第3遺構面) | |

図43 調査区断面図 (1:100)

る流れ堆積を確認した。また、調査区南西隅では㊸層の下層に土器小片を含む締まりのない灰黄褐色泥砂層(㊸)を確認した。

上層硬化面は、下層から陶磁器片や椀瓦片が出土することから、江戸時代後半以降とみられる。中層硬化面も下層遺構の出土遺物に陶磁器片や椀瓦片が含まれるため、これも江戸時代後半と考えられる。下層硬化面は、下層から須恵器及び土師器小片が出土しており、戦国時代の遺構面の可能性があるものの、この層を掘り込んだ遺構はいずれも近世であった。

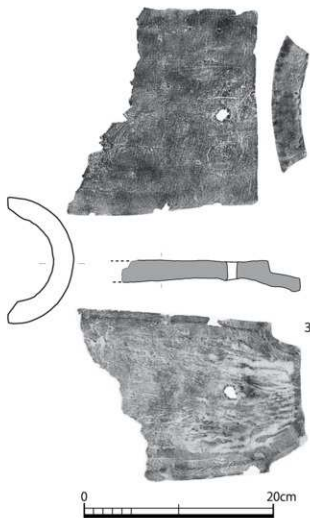
土坑 1 東西 0.5m、南北 0.35m 以上、深さ 0.15m の円形土坑で、焼土を含む黒褐色泥砂を埋土にもち、内部に石が配されており、炉の可能性はある。



土坑 2 東西 3.2m、南北 0.8m 以上、深さ 0.4m の不定形土坑で、複数の土坑が切り合っている可能性がある。灰黄褐色泥砂を埋土にもつ。

3 遺物

1は土坑2出土の陶器碗で、体部内面及び外面上半に施釉され、高台径 4.0 cm を測る。2は土坑1出土の焼締陶器播鉢で、4条1単位のすり目をもつ。口径 30 cm を測り、信楽産である。3も土坑1から出土し、配石の間で見つかった丸瓦である。直径 1.0 cm の釘穴を一つもつ。中世であろうか。



4 まとめ

当該地は、城主中路氏の子孫が継承してきた土地であり、郡城関連の遺構の検出が想定できたが、基礎掘削深度の浅い計画建物であることから、明確な中世遺構面まで掘削することができなかった。

当該地の周辺では、試掘調査1回(図45の1)、詳細分布調査2回(図45の2・3)が行われ、今回が4回目の調査となる。過去の調査では明確な遺構は検出されていない。

当該地を含む東衣出町は、明治22年(1889)の町村制施行後、昭和6年(1931)

図44 出土遺物実測図(1:4)

に京都市に編入されるまで、葛野郡京極村大字郡であった。京都地方事務局嵯峨出張所所有の「葛野郡京極村大字郡全圖」によると、当該地の小字名は「宅地」であり、北を「宮ノ後」「北裏」「北堂ノ後」、東を「南堂ノ後」「構」、南を「濱ノ木」、西を「佃」に囲まれている。さらに小字「宅地」の中でも当該地を含む周辺は、中世の濠を踏襲した可能性のある幅の広い水路が、西、北、東そして南東端を巡っており、大字郡の中心であった可能性が高い。

また郡城は、落城時期と城主が明確にわかる例としても重要である。山科言継の日記『言継御記』天文二十一年（1552）十一月二十八日条によると、「去夜西院之小泉、郡之中路修理等城自焼、靈山へ参、云々」とあり、西院城とともに城主自らが焼いて、将軍足利義輝の城であった東山靈山城に退いている。落城時の城主は中路修理である。当時、三好長慶が細川氏綱を管領にして権力を掌握していたものの、前管領の細川晴元の抵抗は熾烈であり、郡城落城の前日には、細川晴元勢が乙訓郡の西岡地域に侵攻し、嵯峨に陣取っている。当日も晴元勢は洛西を放火した後、東山靈山城に攻め入っている状況下での落城であった。

（馬瀬 智光）

註

- 1) 山下正男 『京都市内およびその近郊の中世城郭一復原図と関連資料—』（京都大学人文科学研究所調査報告）第35号、京都大学人文科学研究所）1986年。
- 2) 国書刊行會編纂『言継御記』巻3（株式会社続群書類従完成会）1998年の230頁。

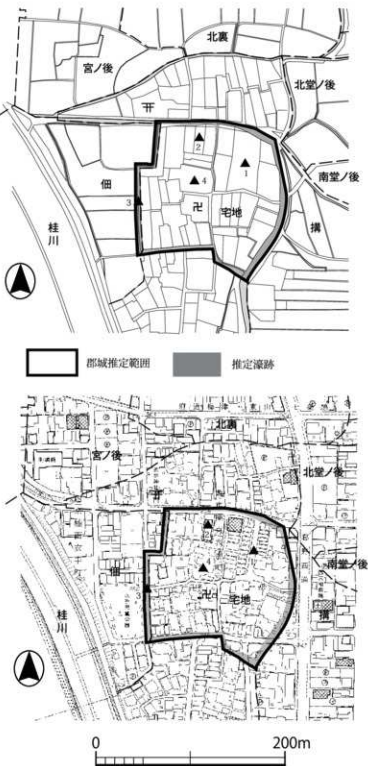


図45 郡城復原図（上段：旧公園を合成、下段：都市計画図に旧小字界を示した図、1:4,000）

V - 2 植物園北遺跡 No.80

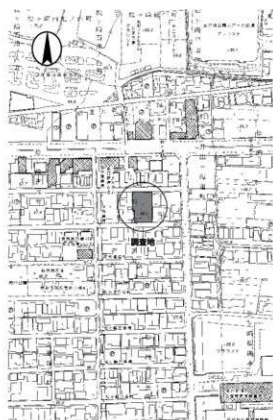


図46 調査位置図 (1:5,000)

1 はじめに

本件は、左京区松ヶ崎今海道町内における共同住宅建設に伴う試掘調査である。調査地は、ノートルダム教育修道女会の東側に位置し、植物園北遺跡に該当する。当該地周辺は植物園北遺跡の東端とされているが、地下鉄松ヶ崎駅出口設置に伴う発掘調査で、弥生時代に属する竪穴住居、室町時代の柱穴などを確認している¹⁾。また、松ヶ崎井出ヶ海道町地内でも、奈良時代から平安時代前期とみられる掘立柱建物を検出していることから²⁾、本調査地においても、集落に関連する遺構の検出が期待された。試掘調査は平成24年10月3日に実施し、遺構密度や遺物出土量が希薄ではあったが、竪穴住居を1棟と土坑3基を確認した。そこで、施工時に補足調査として詳細分布調査を11月20～22日・12月11日に行い、遺構の精査に努めた。

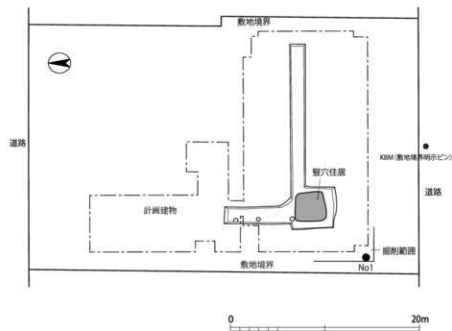


図47 調査区位置図 (1:400)

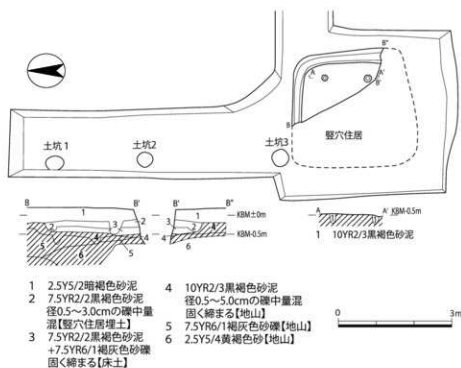


図 48 調査区平・断面図 (1:100)

2 層序と遺構

調査区は、計画建物に沿ってL字に設定した。検出した遺構は、竪穴住居1棟、土坑3基である。基本層序は、耕作土以下、遺物包含層、地山となる。地山は東側へ向かうほど礫が主体となる。

竪穴住居 竪穴住居は、隅丸方形でほぼ正方位を向き、東西約2.8m、南北約3.3m、検出面から床面までの深さは、約0.2mを測る。全体に貼り床が認められ、壁際には、壁溝が巡る。壁溝の幅は約0.3m、深さ約0.3mである。また、住居内の東側で主柱穴2基を確認した。柱穴の幅は約1.6m、深さ約0.2～0.26mを測る。

土坑1～3 土坑は調査区北側で南北に並ぶように検出した。土坑は検出面で幅約0.4～0.5mである。

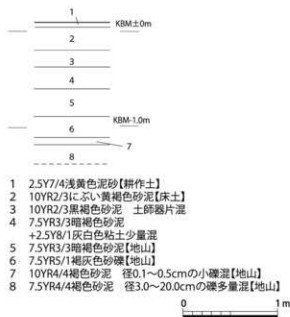


図 49 No.1 断面図 (1:40)

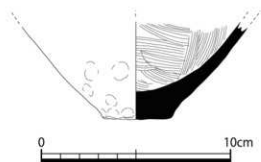


図50 遺物発掘図(1:2)

3 遺物

出土した遺物は極めてわずかで、図化することができるのは土器1点のみである。1は甕もしくは壺の底部である。体部は押さえ、底部には植物の圧痕が認められる。内面は底部から体部にかけてハケ目が残る。胎土は砂粒を含み、焼成は良好である。時期は庄内併行期に属す。

4 まとめ

本調査で検出した主な遺構は竪穴住居1棟のみであるが、集落の東端においても住居域が展開していたことが明らかとなった。竪穴住居は、出土土器から庄内併行期に属するものと推測でき、東西約2.8m、南北3.3mと、同遺跡で確認されている竪穴住居と比べ小規模である。本調査区の西側では、庄内式併行期から布留式段階の竪穴住居9棟を検出しており、住居の建て替えを行いながら集落を継続していた様相を明らかにしている。本調査で検出した竪穴住居も一連の集落と推測することができるが、住居の建て替えなどは認められず、継続的な利用は認められない。したがって、古墳時代の中心地は当該地の西側に展開していたことが想起される。

また、竪穴住居の方位が正方位を向くことは留意される。植物園北遺跡内で確認されている弥生時代から古墳時代の多くの竪穴住居の方位は、北に対し西へ振る。一方、飛鳥時代から奈良時代にかけて成立する建物遺構の方位は、おおよそ正方位を向き建物の方位が変化する。このような方位の相違については、近隣での調査事例を待ち検討する必要がある。

以上のとおり、今回の調査では、植物園北遺跡東端部の状況を把握することができた。今後も緻密な調査を継続し、詳細な集落の消長を明らかにする必要がある。(鈴木 久史)

註

- 1) (財)京都市埋蔵文化財研究所「20 植物園北遺跡」『平成4年度京都市埋蔵文化財調査概要』京都市文化市民局1995年
- 2) (財)京都市埋蔵文化財研究所「植物園北遺跡」『平成18年度京都市内遺跡立会調査報告』京都市文化市民局2007年

V - 3 北野廃寺・北野遺跡 No.81

1 はじめに

北野廃寺では市電敷設時におこなわれた戦前の調査以降、北山背最古の寺院跡として、これまで20次近い発掘調査が実施されるとともに、試掘調査や立会調査によっても調査成果が蓄積されている。ただし、北野廃寺周知範囲が市街地と重複していることもあって、発掘調査は点的な調査にならざるを得ず、伽藍配置や寺域に関して未だ不明な点が多い。

調査地は西大路一条の交差点を少し上がった東側の駐車場、北野廃寺南端付近に位置するところで、北野廃寺南辺さらには平安京北辺に関連する遺構の検出が期待されるエリアである。

調査原因は事務所ビル建設に伴うもので、平成24年4月20日及び5月14日に実施した。調査面積は24㎡である。



図51 調査位置図(1:5,000)

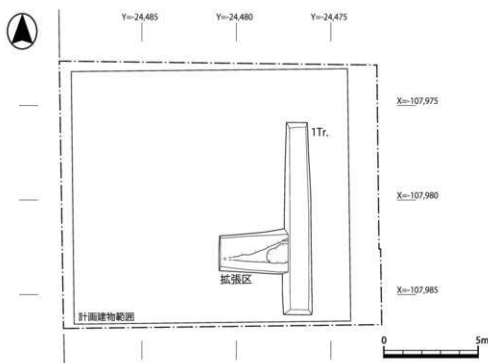


図52 調査区位置図(1:200)

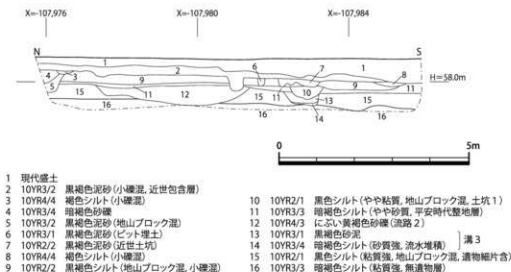


図 53 1Tr. 東壁断面図 (1 : 100)

2 層序と遺構

1Tr. を断ち割った結果、複数回にわたる整地が行われ、その上面で各時期の遺構群が成立していることが明らかになった。各整地層とも遺物をほとんど含まず、時期の絞り込みが困難であるが、周辺の調査成果も参考にすれば、9層上面が中世～近世初頭の遺構面、11層上面が平安時代の遺構面、15層上面が飛鳥白鳳時代の遺構面とそれぞれ推定される。特に15層は厚さ約40cmを測る黒色シルト(地山ブロック混)で、北野廃寺造営に伴う整地層とみられ、調査地周辺の広範囲に分布する。15層には弥生時代の土器片が少量含まれ、北野遺跡に伴う遺物とみられる。なお、各遺構より少量ながら遺物が出土したが、いずれも小片で図化できなかった。

当初、9層上面で遺構検出を行ったが、ビット数基の検出にとどまったため、順次掘り下げを実施した。結果として、15層上面で飛鳥白鳳期に推定される遺構群が検出され、その展開状況を確認するため、一部を拡張した。ここでは、拡張区にて平面検出された遺構を中心に言及する。

土坑1 (10層) 11層の上面で成立する土坑である。1Tr. の東断面にも10層として展開しており、南北約1.0m、東西2.4m以上の規模に推定される。埋土から平安時代前期の土師器と須恵器が出土した。

流路2 (12層) 北東～南西方向に検出される溝でやや蛇行する。拡張区の平面形と1Tr. 東断面の12層との関係から幅3.5～4.0mに復元される。深さは検出面から約0.5mを測り、埋土は砂礫で流水の堆積を示す。埋土から磨耗した土師器や瓦の小片が少量出土した。調査地の100m程東を南流する紙屋川の氾濫堆積と考えられる。このような氾濫堆積は西大路通の向かいで実施された発掘調査でも、時期は中世まで下るが土石流の痕跡として報告されている¹⁾。

溝3 (13・14層) 流路2に切られる形で検出された東西方向の溝で、幅約1.1m、深さは検出面から0.3mを測る。断面形は逆台形を呈し、埋土は上下2層に分けられる。下層の14層には流水の痕跡が認められる。昭和62年度に実施された調査地南東の発掘調査で検出された東西溝(SD77)に対応すると考えられる²⁾。

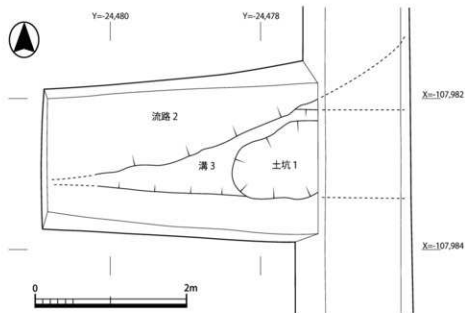


図 54 拡張区平面図 (1:50)

3 まとめ

調査の結果、古代から近世までの複数時期にわたる整地層が確認され、当地における継続的な土地利用が明らかになった。検出された遺構のなかでは、調査地南寄りで見出された東西溝（溝3）が特筆される。この溝は層的に平安京造営より遡り、また南東隣地の調査成果から一定の広がりが見られることから（図 55）、北野麿寺が造営された飛鳥時代の遺構と想定されるとともに、寺域南限を示す遺構として位置づけられる可能性がある。

市街地における個別の調査で得られる情報は常に断片的であり、遺構の性格づけには非常に困難を伴う。今回の調査では、以前に実施された隣地の調査で見出された点的な情報を線として結びつけることができたが、北野麿寺の全体像を復元するには今後も調査成果の十分な蓄積を待たなければならない。（宇野 隆志）



写真6 拡張区全景（西から）

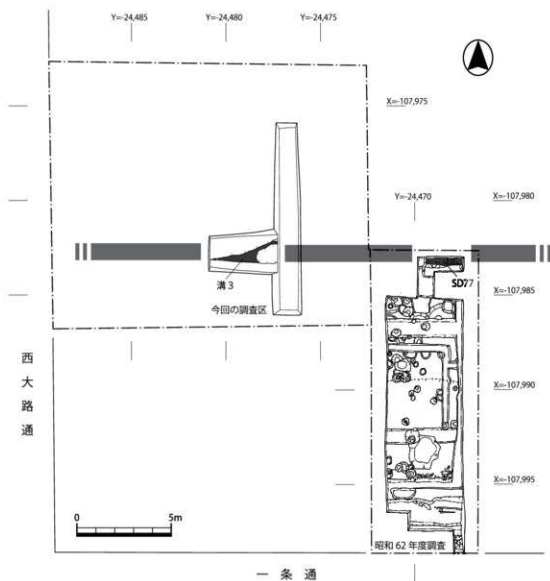


図 55 溝3 遺構復元図 (1:200)

註

- 1) 吉川義彦 2011『北野庵寺発掘調査報告書』関西文化財調査会
- 2) 堀内明博 1988『平安京右京北辺二坊』『平安京跡発掘調査概報 昭和62年度』京都市文化観光局

V - 4 雲林院跡 No.83

1 はじめに

調査地は、北大路通大宮の交差点北東方向にある南北に長い敷地で、敷地南側は北大路通に、敷地東側は猪熊通に面している。当該地を含む周知の埋蔵文化財包蔵地「雲林院跡」は、天長九年(832)に淳和天皇の行幸した「雲林亭」と呼ばれる「柴野院」内の施設にはじまる。平安時代前期に遡る寺院跡であるが、過去の調査は発掘調査1件、試掘調査2件、立会(詳細分布)調査3件のみである。特に北大路通よりも北側については、平成12年に水道工事に伴う立会調査(図60の4)が行われたのみであり、遺構に関する情報は極めて少ない状況であった。

今回、京都信用金庫支店の建替え計画が届出されたことから、雲林院跡の遺構の残存状況を確認する目的で試掘調査を平成24年8月31日に実施した。当該地は2筆からなり、東の筆は京都信用金庫の支店、西の筆は町家がそれぞれ建っていたことから、既存建物の影響を見るために筆ごとに南北方向の調査区を設定して行った。調査面積は64㎡である。

調査の結果、町家部分で中世から近世にかけての遺構が一部残存しており、それらの遺構の分布状況を探るために、基礎工事時に詳細分布調査も併せて実施した。

2 層序と遺構

基本層序(図58) 東の筆に設定した1Tr.は旧信用金庫の基礎による攪乱が著しく、層序は乱れている。一方、西の筆に設定した2Tr.は北大路通歩道上の杭(KBM)-0.15m程度で褐色砂泥の近世整地層、同-0.35mでふい黄色砂泥の基盤層に達する。遺構は基盤層上面で検出した。

土坑1 2Tr.北半西端に位置する断面形状が2段掘りの土坑である。外周は東西2.0m以上、南北2.5m、内周は東西0.8m以上、南北1.5mであり、深さは検出面から約0.4mである。黒褐色泥砂の埋土をもつ。

柱穴 2Tr.の北半を中心に8基の柱穴状の遺構を検出した。柱穴状遺構の直径は24～45cmで、半截した5基の内、柱当りを確認できたのは柱穴7だけであった。



図56 調査位置図(1:5,000)



図 57 調査区配置図 (1:500)

3 遺物

図化できた出土遺物は、1点を除き土坑1から出土したものである。

1層出土遺物 2Tr.の1層から出土した土師器皿S(1)の小片で、口径14.1cmを測る。15世紀代と考えられる¹⁾。

土坑1出土遺物 天目茶碗(2)は、口径11.2cm、器高6.4cm、高台径5.0cmを測る。黒褐色に発色した軸葉が内面から外面上半にかけて掛けられており、高台部はしっかりとした台形を呈する。17世紀前半。陶器皿(3)は口径26.0cmを測り、内面から外面上半に灰オリーブ色に発色した軸葉が掛けられている。上方に鋭く屈曲した断面L字形の口縁部をもち、唐津産と考えられる。17世紀前半。陶器鉢(4)



写真7 2Tr.調査区南半部(北東から)

は口径10.8cmを測り、内面は口縁部だけ、外面は全体に灰色に発色した軸葉が掛けられている。染付(5)は、高台径4.2cmを測り、外面は編み目の地文に大型の菊文を配し、内面見込み部は5葉の付いた花文をあしらう。また、高台内銘款は判読不能であるが、「福」の草書体が崩れてしまったものと考えられる。肥前V期(1780～1860年)

のものに類似する個体がある²⁾。上層からの混入品の可能性がある。焼締陶器の播鉢(6・7)は信楽産と考えられる個体で、5条1単位のすり目をもち、16世紀代と考えられる³⁾。土坑1出土遺物は、16世紀代から17世紀前半の遺物を多く含んでいるが、染付(5)だけが新しい様相を示す。

4 まとめ

先述のとおり、雲林院は天長九年に淳和天皇の行幸した雲林亭に始まる。この雲林亭を含む紫野院は淳和天皇から仁明天皇に伝えられ、さらに仁明天皇第七皇子の常康親王の居第となった。この頃には雲林亭を含む紫野院そのものが雲林院と呼称されていたとされる。常康親王は、貞観十一年(869)二月十六日に権僧正遍昭に附属させて寺としている。元慶八年(884)九月十日には、天台試学の道場として、遍昭の本寺である元慶寺の別院とすることを奏請している。その後、鎌倉時代になると、衰退をはじめ、応仁文明の乱で伽藍が焼失してしまう。現在は大徳寺の塔頭となっている⁴⁾。

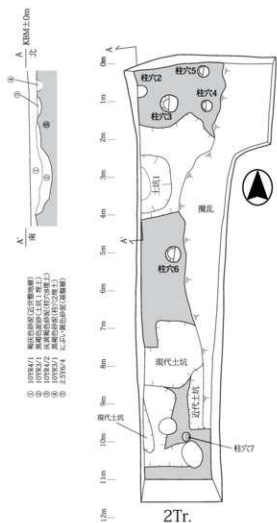


図58 2Tr. 平面図・断面図(1:100)

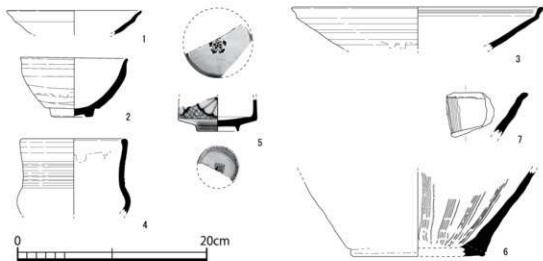
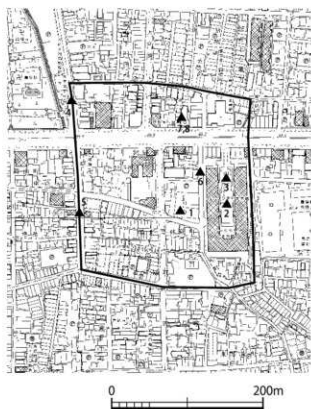


図59 出土遺物実測図(1:4)

木造建築のように基礎の浅い既存建物の下位には、基礎層上面で中世から近世の遺構が良好に残存することがわかった。雲林院については不明な点が多く、平安時代に遡る遺構は、発掘調査(図60の3)で確認された大型掘立柱建物2棟と園池であり、今回の試掘調査においても平安時代の遺構を確認することができなかった。しかし中世から近世の遺構が一部とはいえ残っており、平安時代の遺構が周辺に存在する可能性が高まったと考えられる。(馬瀬 智光)



註

- 1) 小森俊寛 『京から出土する土器の編年の研究—日本律令的土器様式の成立と展開, 7～19世紀—』(京都編集工房) 2005年。
- 2) 大橋康二 『肥前陶磁』(『考古学ライブラリー』55 ニューサイエンス社) 1993年。
- 3) 木戸雅寿 「信楽」『概説中世の土器・陶磁器』(中世土器研究会編 真陽社) 1995年。
- 4) 鈴木忠司他 『雲林院跡 京都市北区紫野雲林院町』(京都文化博物館調査研究報告) 第15集, 京都府京都文化博物館) 2002年。

発掘	発掘日	発掘番号	調査内容	調査期間	調査面積	調査結果	調査団体
1	1997/3/4	905740	試掘調査	1997/3/4	79.4	2.0~4.0mで近世遺構の存在を確認。発掘された掘立柱建物による。遺構は多量。	京都府歴史センター
2	2000/2/21	905990	試掘調査	2000/2/21~24	222.8	平安時代前期の遺構確認。中世遺構も確認。	古代文化調査会
3	2000/2/21	905990	発掘調査	2000/5/15~9/29	1495.0	掘立柱建物2棟の遺構と大型掘立柱建物2棟検出。	京都文化博物館
4	2000/7/18	005380	立会調査	2000/9/27~11/8		2.0~3.25m~4.5mで平安時代の台倉壁	(財)京都市埋蔵文化財研究所
5	2000/7/18	005381	立会調査	2000/11/27~2001/03/09		2.0~3.2m~4.5mで江戸時代末の台倉壁	(財)京都市埋蔵文化財研究所
6	2010/10/13	105302	詳細分布調査	2010/10/22・25~29, 11/1・3・4・7・8・9・13		2.0~4.5mで遺構の断片の検出を初め、時期不明の土壌	(財)京都市埋蔵文化財研究所
7	2012/6/22	120187	試掘調査	2012/6/31	64.0	2.0~3.15mで近世遺構確認。2.0~3.25mで中世遺構。基礎層上面で中世~近世の遺構検出。工事時の詳細分布調査実施。	京都府文化財保護課
8	2012/6/22	120187	詳細分布調査	2012/10/15			(財)京都市埋蔵文化財研究所

図60 雲林院跡調査一覧(1:5,000)

V - 5 法勝寺跡・岡崎遺跡1 No.89

1 はじめに

本件は、左京区岡崎法勝寺町地先における個人住宅建設に伴う試掘調査である。調査地は、弥生時代から古墳時代の集落跡である岡崎遺跡と平安時代後期の寺院跡である法勝寺跡北東部に該当している。法勝寺は白河天皇の御願寺として、承保二年（1075）に造営が始まり、承暦元年（1077）に金堂・五大堂・阿弥陀堂・法華堂などが、永保三年（1083）には八角九重塔・薬師堂などが供養され主要伽藍が整っている。近年、京都市動物園再整備に伴う一連の調査において八角九重塔や阿弥陀堂の地業及び池跡等を確認し、大きな成果を挙げている¹⁾。

法勝寺の寺域については東西、南北ともに二町以上とされ、東限が白河、西限が法勝寺車道（現在の岡崎道）でほぼ確定しているが、南限については押小路末付近、北限については冷泉小路末付近とされるものの確定されていない。北限付近での発掘調査（図61）では6回に及ぶ発掘調査が実施されているものの²⁾、北限を示す明確な遺構は確認されていない。一方、法勝寺北側には東光寺があったとされ、調査4・5で確認された石敷き方形池などは同寺に関連する施設と捉えられている。今回の調査地は、冷泉小路末（現在の冷泉通）に面しており、北限を示す手がかりが得られることが期待された。

調査は平成24年9月19日に実施、面積は16㎡である。

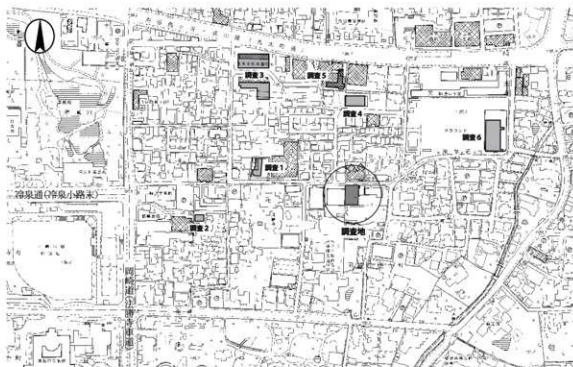


図61 調査位置図(1:5,000)

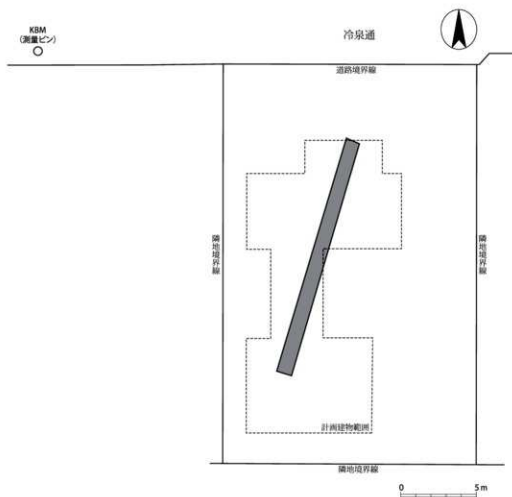


図 62 調査区配置図 (1:250)

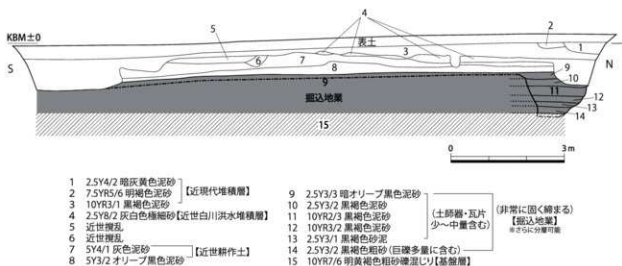


図 63 調査区西壁断面図 (1:100)

2 層序と遺構

調査区は東西区画施設の把握を目的に南北方向に設定した(図62)。基本層序は表土・近現代盛土、白川砂由来の灰白色極細砂層(4層)、近世耕作土と続き、GL-1.0m(KBM-0.77m)以下にて黒褐色砂泥を中心とした版築層(9~14層)、-1.9mにて締まりのある明黄褐色粗砂礫混じり層の白川砂が基盤層である。

掘込地業(図63・写真9) 全体の規模は不明であるが、南北15m以上、東西5.5m以上で調査区外に広がりを持ち、厚さは約1.1mを測る。断面観察の結果、締まりのある砂礫混じりの白川砂まで掘り込み、最初に径15cmを越える大型の礫を多く含んだ粗砂層(14層)を積み、固く締まった砂泥層(13層)で覆い、砂泥層より上には種類の異なる土を交互に約5~10cmの厚みで版築状に積み上げている。周辺の調査では、基盤層の白川砂は概ねGL-1.0mで確認されていることから掘込地業として評価できる。地業内には11世紀後半の土師器皿や平安時代の瓦を含んでいる。

3 遺物

出土した遺物は土師器・瓦・凝灰岩等で、全て掘込地業から出土したものである(図64)。1~5は土師器皿である。いずれも細片であるが1~4は口縁部外面に2段ナデが施され、端部はやや外反するタイプで、5はいわゆる「コースター型」の土師器皿である。いずれも11世紀後半(京都V期古³⁾)の年代が与えられる。6・7は丸瓦で、ともに凹面は布目痕を残すが、凸面は6が板ナデ、7が横ナデ



写真8 掘込地業出土凝灰岩

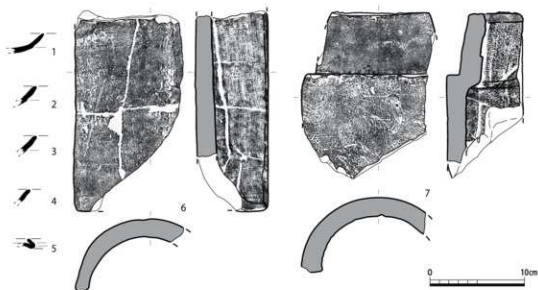


図64 遺物実測図(1:4)



写真9 掘込地業断面（北東から）

が施される。8（写真8）は凝灰岩片で、長辺33cm、短辺25cm、厚さ17cm。3面に加工された面を残す。8は14層から出土したもので、地業に含まれる大型の礫として転用されたものである。

4 まとめ

今回の調査では前述したように法勝寺北限の手がかりを得ることを目的として、東西区画施設の有無を確認することであったが、掘込地業を確認した。推定北限である冷泉通沿いにおいて地業が存在することは、寺域を確定する上で極めて重要な成果といえる。ここでは、当地で建物に伴う地業を確認した意義を述べてまとめたい。

法勝寺北限について 推定法勝寺北限とされる冷泉通沿いでは、調査地の西約200mの地点（調査1）、西約130mの地点（調査2）で発掘調査を実施している。調査1で中世末～近世にいたる南北方向の溝、調査2で冷泉通に沿った室町時代以降の東西溝が存在し、法勝寺廃絶後の中世後半以降については冷泉通が区画を形成するが、寺域の北限を示す明確な遺構は確認されていない。

一方で、調査地北西約180m地点での調査3、真北約110mに位置する調査4では平安時代後期の南北溝が存在し、白河街区の区画を示す遺構として捉えられる。

調査4で確認された南北溝が調査地まで及んでいないこと、地業が建物に伴うものであることから、調査地は法勝寺の寺域内であることが裏付けられ、北限は冷泉小路末よりも北側に広がるものが指摘できよう。ただ、地業が北限に設けられた門に伴う可能性も考えられることから、冷泉通に面した場所での調査に今後も十分留意する必要がある。

地業について 六勝寺域では、これまで数多くの地業を確認している。中でも近年調査が行われた法勝寺八角九重塔跡の掘込地業は、場所によって異なるものの、基盤層を白川砂下の安定したAT火山灰層まで掘り込み、巨礫を含んだ粘土層と純粋な粘土層を互層に積み上げた深さ約1.4～1.6mの土坑を連続させて構築している⁴⁾。また、白河街区跡や最勝寺跡では川原石と粘土を交互に積み上げる技法が確認されている。今回確認した地業は、最下層こそ大型の礫を含む粗砂層であるが、上層には礫や粘土層も使用されており、前述した地業と比較すると地耐力としては低いものと評価でき、大型の堂舎に伴うものではないと考えられよう。

法勝寺には多数の堂舎が建立されるなかで、寺域北東部に存在することが明らかな建物は、法華堂、法華堂僧坊⁵⁾、愛染堂⁶⁾等が挙げられる。北斗曼荼羅堂についても、北門脇に位置することあることから⁷⁾、北東部に所在する可能性は残る。今回の調査成果は限定的であり堂舎の比定は困難であるが、地業中には法勝寺造営期の遺物が含まれており、創建がいやずれる愛染堂（永保

三年（1083）建立），北斗曼荼羅堂（天仁二年（1109）建立），又は先述したように北限に設けられた門遺構等を想定したい。

なお、今回の調査成果を踏まえて施主側と協議を重ねて基礎形状の変更を行い、十分な保護層を設けた上で地中保存されることとなった。（西森 正晃）

註

- 1) 「法勝寺跡」『京都市内遺跡発掘調査報告』平成22年度、京都市文化市民局、2011年
「法勝寺跡・岡崎遺跡」『京都市内遺跡発掘調査報告』平成23年度、京都市文化市民局、2012年
- 2) 辻 裕司「法勝寺跡」京都市埋蔵文化財研究所発掘調査報告2007-9、(財)京都市埋蔵文化財研究所、2007年（調査1）
「法勝寺跡・岡崎遺跡」『京都市内遺跡発掘調査報告』平成19年度、京都市文化市民局、2008年（調査2）
近藤奈央ほか『白河街区跡・岡崎遺跡』京都市埋蔵文化財研究所発掘調査概報2005-4、(財)京都市埋蔵文化財研究所、2005年（調査3）
「白河街区跡・岡崎遺跡2」『昭和63年度 京都市埋蔵文化財調査概要』(財)京都市埋蔵文化財研究所、1993年（調査4）
吉村正親『白河街区跡・岡崎遺跡』京都市埋蔵文化財研究所発掘調査概報2001-14、(財)京都市埋蔵文化財研究所、2003年（調査5）
「岡崎遺跡・法勝寺隣接地」『昭和62年度 京都市埋蔵文化財調査概要』(財)京都市埋蔵文化財研究所、1991年（調査6）
- 3) 土師器皿の年代観は、小森俊寛・上村憲章「京都の都市遺跡から出土する土器の編年的研究」『研究紀要』第3号、(財)京都市埋蔵文化財研究所、1996年に準ずる。
- 4) 註1に同じ
- 5) 「諸寺供養記（とノ三）」『校刊美術史料』中巻
承暦元年（1077）12月18日に行われた金堂等の供養時に、主殿寮が講堂北で東西方向に幕を張るにあたり、東の端が法華堂の西側に五、六丈及ばないとの記載がある。
- 6) 「法勝寺御塔供養呪願文」『朝野群載』
位置を講堂の良角（北東）と記す。
- 7) 『江都督願文集』に「北門乃傍」とある。

V - 6 法勝寺跡・岡崎遺跡2 No.90・91

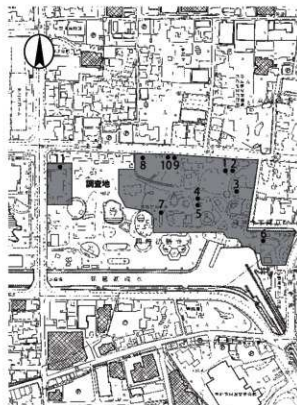


図 65 調査位置図 (1:5,000)

1 はじめに

調査地は左京区岡崎にある京都市動物園内である。当該地は六勝寺の筆頭寺院である法勝寺跡の南半と岡崎遺跡の南東部に位置する。この場所でゾウ舎・ゴリラ舎・新は虫類館・ツシマヤマメコ繁殖センターの建設 (No. 91)、京都の森・教育管理施設の建設 (No. 90) が計画されたため試掘調査をおこなった。

京都市動物園内では、これまで多くの調査をおこなっており、法勝寺中心伽藍である八角九重塔の地業跡や池の汀を検出している¹⁾。

調査は、2012年4月16・17・18日の3日間 (No. 91) と9月24・25日の2日間 (No. 90) おこなった。計画建物と遺構の状況などから合計11Tr.の調査区を設定した。調査面積はNo. 91 (1～7Tr.) が46㎡、No. 90 (8～11Tr.) が20㎡である。試掘調査の結果、遺

跡の有無と深さが明らかになったため、掘削可能深度を提示し、設計変更により遺跡を地中保存することとなった。

2 各調査区の概要

1 Tr. 動物園北東部に計画されたゾウ舎新築予定地に設定した調査区である。この場所は、東軒廊・経蔵の東方に想定できる。この調査区の西方でおこなった平成22年度の試掘調査 (11Tr.) では、平安時代後期の瓦を多量に含む土坑を検出しており陸部とみられる²⁾。また、昭和47年度の現は虫類館建設にともなう発掘調査では池の東肩を検出している³⁾。したがって、1 Tr. では池の西肩を検出することが想定された。調査区は、池の西肩を検出することを目的とし、東西方向に約5.7m設定した。

現代盛土、近世耕作土の下で平安時代の池を検出した。地山の白川砂が西から東にだらかに下がる状況がみてとれる。池の埋土は0.1～0.2m程度残っており、調査区西端から2m付近で礫を含む層 (7層) がある。7層から西と東では層の堆積状況が異なることや、9層が池の汀部分の護岸のために張られた土とみられることなどから、この場所が池の汀と考えられる。池の埋

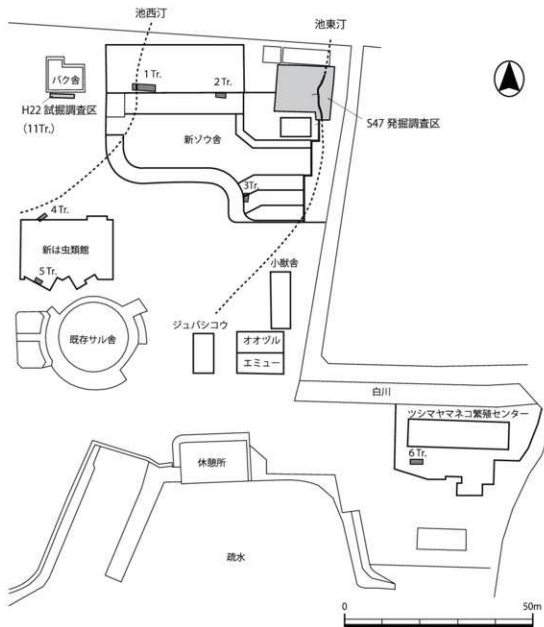


図 66 1～6 Tr. 調査区配置図 (1:1,000)

土は2層に大別できる(4・5層)。4層は池の汀に堆積する浅黄褐色粗砂層で、5層は粗砂の混じる黒褐色泥砂である。陸部と考えられる調査区西端では標高49.7m、池底の調査区東半では標高49.3mで白川砂の地山を検出した。池埋土下層の地山上面でピットを検出した(6・8層)。遺物が出土せず時期は不明であるが、法勝寺以前の遺構の可能性がある。

2Tr. ソウ舎新築予定地で、1Tr.東方に設定した調査区である。1Tr.の成果から池内と予想された。現代盛土、灰白色細砂の下GL-1.5mで池の埋土を検出した(2・3層)。この埋土は上下2層に分けることができ、各0.2～0.3mある。その下、標高48.9mで白川砂の地山を検出した。礫を敷いた州浜などはみられない。

3Tr. ソウ舎新築予定地に設定した調査区である。周辺の調査成果から池内もしくは池の東

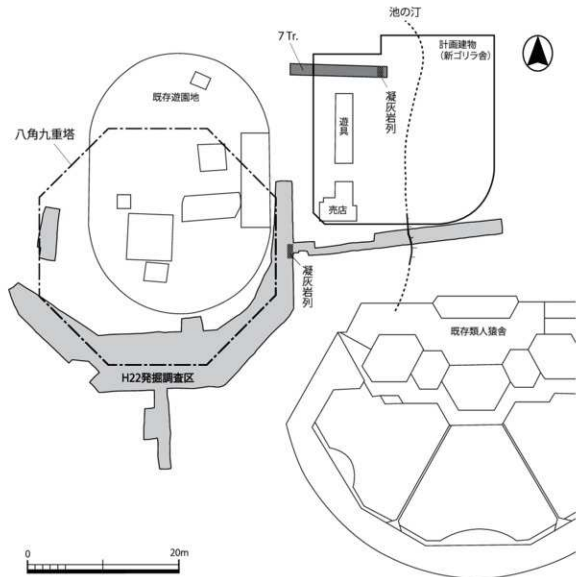


図 67 7 Tr. 調査区配置図 (1:500)

肩に想定された。西壁には、GL-2.0 m以上の攪乱があり、それが東壁にも及ぶ。したがって、3 Tr. から西は大きな攪乱があることが明らかになった。この攪乱により遺構が削平されているものと考えられるが、その範囲については明らかではない。

4 Tr. 現サル舎の北側に計画された新は虫類館新築予定地に設定した調査区である。周辺の調査成果から池内もしくは池の西肩が想定できた。現代盛土、旧耕作土の下GL-0.6 m (標高50.0 m)で池の埋土を検出した(2層)。埋土には多量の瓦が含まれる。これまでの調査で、池の肩近くに瓦が堆積する状況が多くみられることを勘案すると、4 Tr. が池の西肩近くになる可能性がある。ただし、水道管破損による湧水のため、それ以上の掘削と詳細な検討はできなかった。

5 Tr. 4 Tr. 同様、新は虫類館新築予定地に設定した調査区であり、池内に想定できた。現代盛土の下GL-1.1m (標高49.2 m)で池の埋土を検出した。この埋土は厚さ0.4～0.5mあり、その下、標高48.8 mで白川砂の地山を検出した。

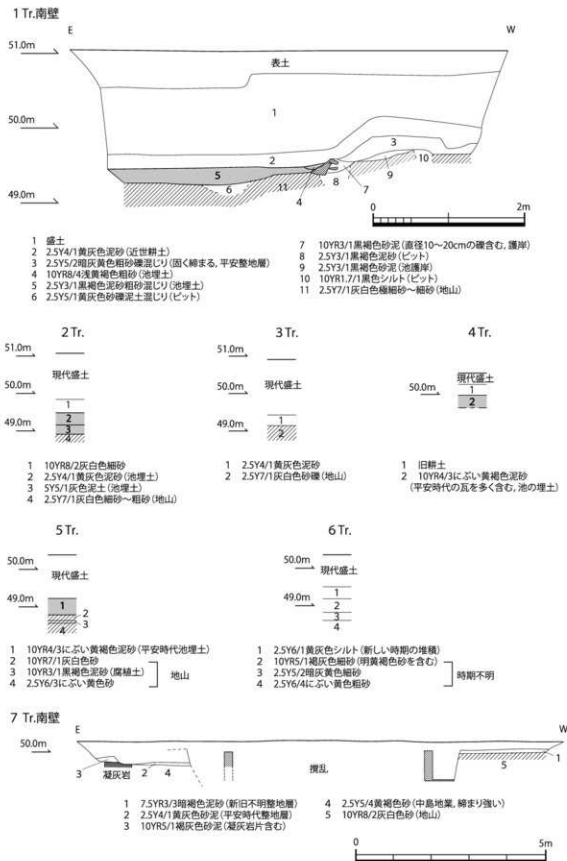


図 68 1 Tr. 断面図 (1:50), 2 ~ 7 Tr. 断面図 (1:100)



写真 10 7Tr. 全景 (西から)

6Tr. 動物園南東部に計画されたツシマヤマメコ繁殖センター新築予定地に設定した調査区である。動物園内の南東部に位置し、白川や疏水と法勝寺の遺構との関係を確認した。現代盛土の下 (GL-0.8 m) で黄灰色シルト、明黄褐色細砂、暗灰黄色細砂、にぶい黄色粗砂が堆積する。どの層にも遺物を含まない。GL-1.7m まで掘削したが、白川砂の地山がみられず、明治以降の大規模な工事により遺構面は削平されたものと考えられる。

7Tr. 動物園中央付近に計画されたゴリラ舎新築予定地に設定した調査区である。八角九重塔北東部に該当し、中島から池の肩想定位置にあたる。7Tr. 西端では現代盛土、時期不明整地層の下で白川砂の地山を GL-0.3m (標高 50.0 m) で検出した。西より 3~10m まで

では攪乱により削平を受けている。調査区東端ではその攪乱がなく、GL-0.5 m (標高 49.7 m) で平安時代の整地層、その下層で中島の地業を検出した。また、7Tr. の東端では、幅約 0.7 m の凝灰岩列を検出した。凝灰岩を南北に並べていた可能性がある。平成 22 年度の発掘調査では、塔地業の外側で凝灰岩列を検出していることから同様の機能を有していたのかもしれない。ただし、今回検出した凝灰岩列は塔地業からは離れており、一連のものではない。調査区内で池の落ちはみられなかったことから、汀はさらに東方にあったと考えられる。

8Tr. 動物園北端中央付近に計画された「京都の森」建設予定地に設定した調査区で、法勝寺金堂の南側に想定できる。この場所は、現在丘状に高くなっており、旧地形を踏襲しているか否かが注目された。層序は、現代盛土の下に固く締まった粗砂層が厚く堆積する。標高 50.5 m まで掘削したが、地山は検出できなかった。この粗砂層からは、レンガや染付が出土しており、近代以降の盛土であることが明らかになった。

9・10Tr. 動物園北端中央付近に計画された「京都の森」建設予定地に設定した調査区で、法勝寺金堂から経蔵へのびる軒廊に想定できる。層序は、現代盛土の下で 8Tr. と同様に近代以降の盛土層がみられた。9Tr. では標高 51.1 m で地山とみられるにぶい黄橙色粗砂を検出した。

8~10Tr. の成果から、京都市動物園北端中央付近にある丘状の高まりは、全面的な盛土であり、旧地形を踏襲しているものではないことが明らかになった。これまで、動物園内北半の調査では、標高 50.0~50.7 m で陸部を検出している。したがって、盛土の下層に軒廊や経蔵の遺構が残存している可能性もあるが、今回の調査では明らかにできなかった。

11Tr. 動物園北西部に計画された教育管理施設建設予定地に設定した調査区で、周辺の調

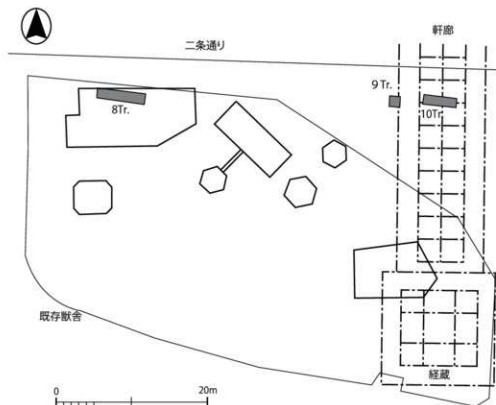


図 69 8～10Tr. 調査区配置図 (1:500)

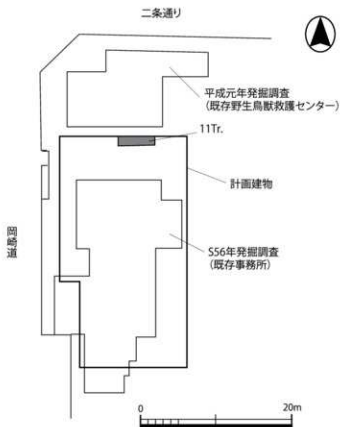


図 70 11Tr. 調査区配置図 (1:500)

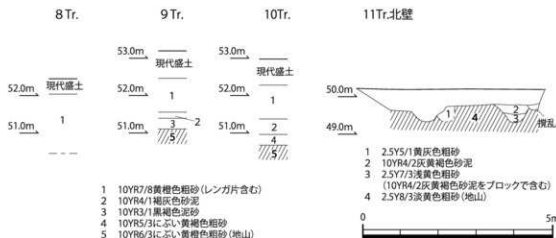


図71 8～11Tr.断面図(1:100)

査成果から、陸部に想定できる。層序は、現代盛土直下で白川砂の地山である。地山は標高49.8mで検出し、その上面で遺構検出をおこなった。検出した遺構は土坑1基で、直径1.0m、深さ0.5mの円形である。遺物は出土せず、時期は不明である。標高49.8mで白川砂の地山を検出したことから池内ではなく、陸部であったと考えられる。

3 遺物

1は、2Tr. 2層(池埋土)出土の土師器皿である。口径9.9cmでナデ調整をおこなう。京都Ⅷ期とみられる⁴⁾。2は、1Tr. 3・5層から出土した土師器壺である。口径12.6cmであり外面はハケメ、内面はケズリを施す。3は、4Tr. 2層(池埋土)から出土した軒丸瓦である。右巻きの巴文で、外周に殊文はめぐらない。瓦当裏面はナデ調整を施す。4は、7Tr. 3層から出土した土製紡錘車である。およそ半分が残存しており、直径は4.6cmである。中央部に直径4mmの穴を穿ち、周縁部に切り込みをいれる。切り込みは16箇所に戻元できる。

4 まとめ

今回の調査では、各所で池の汀や池の埋土を検出し、法勝寺の伽藍を復元する重要な成果をあげることができた。特に1Tr.では池の西肩を検出し、既往の調査成果とあわせて池の西汀を推定することができる。また、4Tr.では汀を検出したわけではないが、狭小な調査区でありながら平安時代の瓦が多数出土し、池の西汀に近いものと推定できる。

以上の調査成果をふまえ、法勝寺南半の復元を試みたのが図73である。伽藍中核の建物は、金堂と塔、阿弥陀堂を検出している。金堂中心から塔地業中間距離は約126m(420尺)、金堂基壇南端から塔地業北端間距離は約96m(320尺)と復元されている。阿弥陀堂は地業の版築を部分的に検出したのみで、その位置を明確にすることはできないが、伽藍南西部に所在したことが明らかになったことは重要な成果といえる。池の西汀の位置をみると、阿弥陀堂想定位置のところ東に屈曲していることがみてとれる。阿弥陀堂に近接するように池を造営したものと

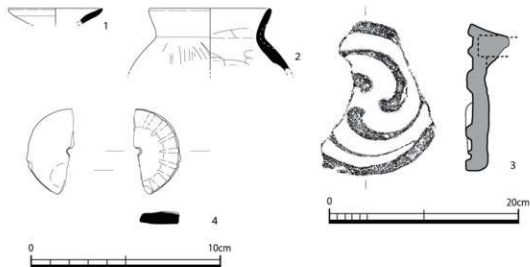


図72 遺物実測図 1～3 (1:4), 4 (1:2)

みられる。また、この池の西汀は、金堂から南西にのびる軒廊と鐘樓の西にまで広がることが明らかになった。これまで、このような復元はされておらず、重要な成果である。塔の建つ中島では3箇所の汀を検出している。北と南の汀はみつかっていないが、池の埋土や陸部を各所で検出しており、図73で示した汀想定ラインがおおよその位置を示しているものとみて問題ないだろう。中島は若干東西に長く四隅が張り出すような形となる。塔と阿彌陀堂間の池幅は、約40mとなる。

『経俊御記』建長5年(1253)12月22日条には、阿彌陀堂基壇東面から東1丈5尺に高座・礼盤を置き、その東は南北15丈余の仮板敷となり舞台などの舗設がされたことが記載されている。舞台は高座から東2丈程の位置にあったので、仮板敷(池西汀)は阿彌陀堂基壇東端から高座などの寸法を除いて、1丈5尺から3丈5尺の位置までせまっていたと解釈される。つまり、池西汀から西へ5～11mの位置に阿彌陀堂基壇の東端が位置していたという。発掘調査によって阿彌陀堂の東西位置を確定できないが、上記の文献史料や池汀の位置から図73のような位置関係が想定できる。

法勝寺中樞伽藍と池の関係のみをみると、建物のすぐ近くまで池の汀がせまれていることがわかる。鳥羽離宮の金剛心院や勝光明院でも、建物のすぐ近くまで池がせまっており、その池も非常に入りくんだつくりとなっている。平安時代後期の離宮や寺院では、このような建物と池を一体とした造営がおこなわれたことが改めて明確となった。

これまでの調査成果から池と陸の標高をみると、全体的に北東が高く、南西が低い旧地形に法勝寺が造営された。陸部の標高は、北西部で標高50.0～50.7m、南西部は48.7～49.3mで、八角九重塔の建つ中島は49.7mとなる。池底は、北東部で48.9m、南西部で48.1～49.1mとなる。おおよそ、池の水深が1mあったと推定できる。また、北東と南西で約1mの高低差があり、池自体は北東から取水し、南西に排水していた。

以上、これまでの調査成果をもとに、法勝寺の復元および、池の標高についてまとめた。当該

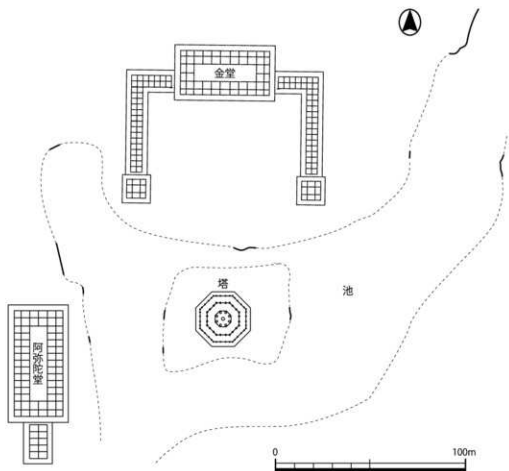


図73 法勝寺南半中樞部復元図 (1: 2,000)

地が動物園内であることから、面的な発掘調査ができず、試掘調査や詳細分布調査の成果によるところが大きいが、一定の成果を挙げたといえる。今後、このような成果をもとに、より詳細な調査・研究が進められることになるだろう。(家原 圭太)

註

- 1) これまでの京都市動物園内における調査は、京都市文化市民局『京都市内遺跡発掘調査報告 平成23年度』2012年。にまとめられている。
- 2) 京都市文化市民局『京都市内遺跡発掘調査報告 平成22年度』2011年。
- 3) 六勝寺研究会「京都市動物園爬虫類館建設工事に伴う法勝寺跡発掘調査」京都市文化観光局文化財保護課『法勝寺跡 京都市埋蔵文化財年次報告1974-II』1975年。
- 4) 小森俊寛・上村憲章「京都の都市遺跡から出土する土器の編年の研究」『研究紀要 第3号』(財)京都市埋蔵文化財研究所, 1996年。

V - 7 伏見城跡 No.106

1 はじめに

調査地は、豊臣秀吉最後の居城であり、徳川幕府に受け継がれた伏見城跡に含まれる。住所は伏見区桃山町本多上野9-1で、当該地を含む周辺は、中央に南北道路（桃山経25号線）の通る幅70～80mの南北に長い方形街区を形成している。この街区は周辺部より15～20m低い濠状の窪地となっており、伏見城跡の濠と想定されている。

今回、当該地で宅地造成が計画されたことから、濠跡の有無と石垣等の濠跡関連遺構を確認する目的で試掘調査を実施した。計画道路部分に調査区(1Tr.)を、斜面部分に調査区(2Tr.・3Tr.)を設定した。調査は平成24年8月6日、9月20日・28日に実施した。調査面積は107㎡である。調査の結果、濠状遺構及び斜面の造成過程、並びに郭を3箇所確認した。

2 層序と遺構

濠部造成過程 (図76) 1Tr.の断面観察から造成過程を復原する。調査区東端から西6m、KBM-2.0mで西面する石垣状の構築物があり、南北方向に並ぶ。この後方⑬層はこの裏込め土と考えられる。この遺構の西側は湧水する濠状遺構が広がる。この濠状遺構は多量の砂④層でKBM-1.45mまで埋め立てられ平坦地が形成された後、にぶい黄褐色系砂質土(⑪・⑬層)でKBM-1.3mまで整地される。しかし、この造成時においても石垣状構築物との間に幅約5mの溝状の落ち込みが残る。⑪層上面に成立する柱穴の埋土から17世紀中頃の肥前陶磁器が出土している。この整地層と柱穴群は伏見城期の屋敷に伴う遺構と考えられる。

次いで、KBM-1.0mまで灰黄褐色細砂の④層で整地され、この段階でも柱穴が複数掘られていた。その後、幅5mの落ち込みが⑥～⑩層の土砂で埋没していく。⑩層からは江戸時代前期の木製品や火鉢、⑧層からは唐津焼が出土した。最後に江戸時代中期以降の遺物を含むにぶい黄褐色砂で造成されるが、これは伏見城廃絶後の造成となる。

斜面造成過程 (図76) 2Tr.部分は、灰白色細砂の基盤層を切岸状に掘った後、①～④



図74 調査位置図 (1:5,000)

層の土砂を斜めに積み上げている。一方、3Tr.は緩やかに斜面を造り出した後、土を順々に積上げ、最上層の礫を多く含む褐色泥砂層①により、平端部を構築している。この工程において、①層上面で等高線と平行に石を並べ、上部の積み土が流出するのを防ぐための土留め壁が造られている（⑨層）。3Tr.部分は高台北部に連なる郭群の一角である。

郭1（図75） 東側の高台よりも当該地は約17m低く、両平坦地間には急峻な斜面がある。高台は当該地東側だけ凹んでおり、開口部状になっている。この斜面高所に位置する南北約15m、最大幅約3.5mの平坦地である。

郭2（図75） 郭1よりも3m低い位置にある南北約25m、最大幅約5mの平坦地である。

郭3（図75） 3Tr.の造成過程の最上層である①層上面には幅約5mの平坦地が形成されている。この痕跡と周囲の表面観察から、南北幅約10.5m、最大幅約6mの平坦地を復元できる。郭2よりも3m低い位置にある。

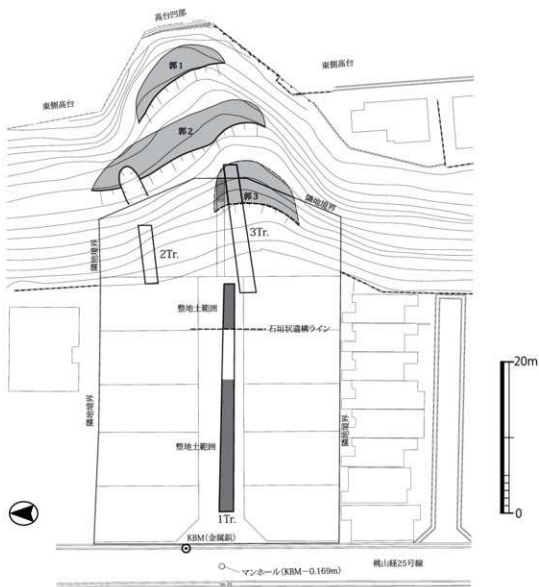


図75 調査区配置図(1:500)

3 1Tr. 遺物 (図 77)

土師器 1は②層から出土し、口径5.0cm、器高1.4cmを測る。2は落ち込み埋土の⑩層から出土した。江戸時代前期と考えられ、口径8.4cm、器高1.9cmを測る。3・4は石垣状遺構の裏込め土である⑮層から出土した。京都X期新(1590年代)頃のものと考えられる¹⁾。口径約9.7cm、器高約1.9cmである。

陶磁器 5は②層出土の京焼碗で、淡黄色釉に文様が描かれる。17世紀後半。6は⑧層出土の唐津焼向付で、高台部を除き施釉され、内面見込みに上下二重線の枠線と草文が描かれる。7は⑮層から出土した肥前陶磁碗で口径11.8cm、器高6.2cmを測る。外面は蓮弁様の地文に草花文をあしらう。高台外面、口唇部内面及び見込み部に二重圏線をもち、見込み部中央に花文、高台内部は一重圏線を施す。銘款は口に青であろうか。17世紀後半の肥前III期と考えられる²⁾。

瓦質土器 ⑩層出土の火鉢。類例に京都XI期中(1620～1650)に含まれる一括資料³⁾があり、元和廃絶期と一致する遺物と考えられる。

木製品 全て⑩層から出土した。9は篋で、全長22.8cm、厚さ0.5cmである。柄部の幅は2.0cm、片歯の刃部は長さ約9.0cm、幅3.1cmである。箸は、細く割り裂いた柾目材に面取りを施し、先端部を細く仕上げる。10は長さ23.3cm、11は長さ23.9cm、12は長さ25.4cm、13は長さ29.5cmとなる。14は一木作りの連歯下駄で、台は方形、長さ15.1cm、幅8.4cm、厚さ1.2cmである。鼻緒を通す目は歯の前に穿たれている。15の下駄は別材の前の歯を5本の釘で固定し



写真11 2Tr. 全景と後方斜面 (西から)



写真12 斜面中の郭 (矢印地点が郭:西から)

ている。釘は台の表側から打ち込んでいる。台は小判形であり、長さ20.4cm、幅9.2cm、厚さ1.7cmである。

4 まとめ

調査の結果、3Tr.で郭状の平坦地を確認した。地表面観察で認められる2段の郭と合わせ雛壇状に郭が配されていたこととなる。一方、平地部分は斜面裾の西側で整地の途切れる部分があり、その東側に西面する石垣状構築物がある。寛政12年(1800)本図作成、天保8年(1837)写しの「伏見御城柳井屋敷取之絵図」では、当該地は泰長老東側に描かれる濠の一画を占める。「大久保石見守」屋敷(以下「石見屋敷」という)の西側、濠中央を通る南北道(以下「濠内道」という)に接している。大久保石見守は、徳川家康の家臣で、従五位下石見守の官位をもつ大久保

長安と考えられる。整地土が途切れる部分は、石見屋敷西方の藪地と濠内道の間に描かれる南北方向の道（あるいは溝）に相当すると考えられる。また、斜面部分の郭は、石見屋敷と濠内道を結ぶ通路とも考えられる。

さらに、今回の調査成果は、文禄元年（1592）の秀吉隠居所築城から元和九年（1623）の廃城までの変遷に加え、廃城後も含めた造成過程を示す良好な資料と考えられる。（馬瀬 智光）

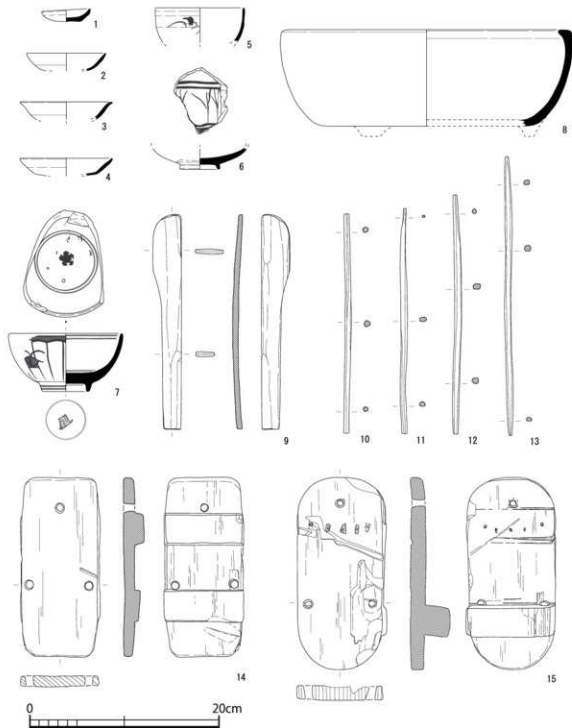


図77 遺物実測図(1:4)

註

- 1) 小森俊寛 『京から出土する土器の編年の研究—日本律令の土器様式の成立と展開, 7～19世紀—』(京都編集工房) 2005年。
- 2) 大橋康二 『肥前陶磁』(『考古学ライブラリー』55 ニューサイエンス社) 1993年。
- 3) 平尾政幸・山口 真 『平安京左京四條二坊十四町跡』(『京都市埋蔵文化財研究所発掘調査概観 2003-5』) 財団法人京都市埋蔵文化財研究所 2003年の土坑 SK0257一括資料。

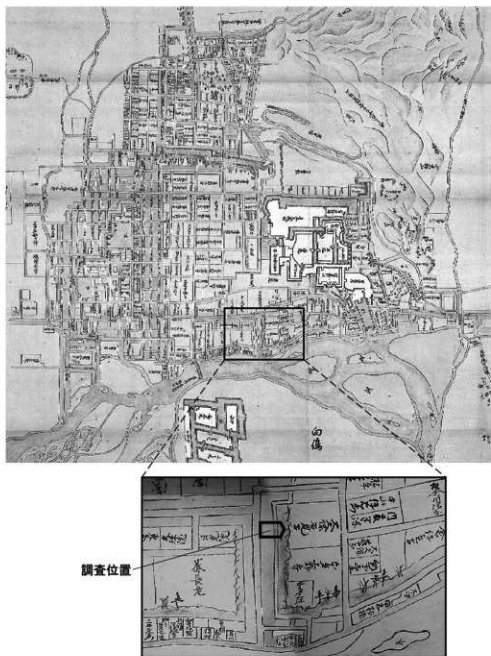


図78 「伏見御城榎井屋敷取之絵図」(京都市市民スポーツ振興室管理)から見た調査位置

V - 8 鳥羽離宮跡・鳥羽遺跡 No.118

1 はじめに

調査地は、新油小路通と新城南宮道の交差点の北西隅地であり、北隣には白河天皇陵（成菩提院陵）が位置する。白河天皇陵は、成菩提院内に建てられた三重塔であり、天承元年（1131）に香隆寺から白河天皇の遺骨を三重塔へ移し御陵となる¹⁾。三重塔の造営は、播磨守藤原基隆が中心となり進められ、天仁二年（1109）八月十八日に落慶法要が行われた²⁾。これまでに白河天皇陵付近では、5箇次（91・96・121・122・140次）の発掘調査を実施し、三重塔の周囲に堀が巡らされていたことを明らかにしている³⁾。堀は南北55m、東西54mで、幅2m、深さ1.5mを測り、内側のみ石による護岸が施行されていた。護岸の石材は安土・桃山時代に抜き取られており、底部から3段部分のみ残されている。さらに堀の埋土からは、三重塔に葺かれていた瓦や祭祀に使用したと推測される木製品などが出土した。



図79 調査位置図 (1:5,000)

今回、このような場所に、共同住宅建設の計画がされたため、試掘調査を実施した。計画敷地は、堀が西側へと方向を変える南東隅地に該当するが、計画建物が敷地北端であることから、本調査では堀の東辺の検出が予想された。調査は平成24年8月20日に実施し、調査面積は28㎡である。なお、遺構については協議の上、基礎構造の設計を変更し地中保存が図られている。

2 層序と遺構

調査地は最近まで耕作地として利用されていたため、新油小路通と新城南宮道通りより30cmほど低くなっている。基本層序は、現代耕作土以下、旧耕作土、基盤層となる。遺構検出は基盤層上面で実施し、調査区西側で堀跡、東側で土坑や耕作溝などを検出した。本調査は遺跡の地中保存が前提となっていたことから、遺構の掘削は行わず検出に留めた。堀の東肩口は、 $Y = -22.686.9$ mに位置しており、第91次調査で検出した東肩（ $Y = -22.687.1$ m）よりやや東側に位置する。堀の肩口の確認のため一部断割り調査を実施した。埋土は灰黄色泥砂を呈しており基盤層と類似する。従前の調査成果でも肩口付近は基盤層が崩れるように堆積しており、同様の成果を得たものと判断することができる。

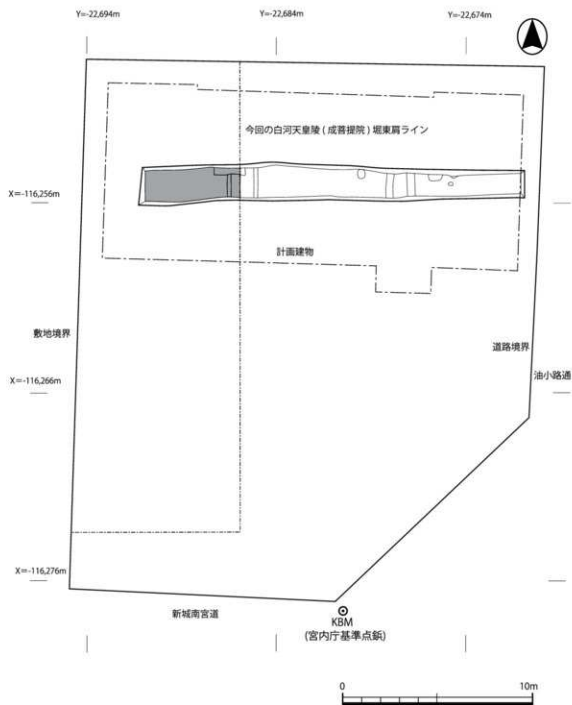


図 80 調査区配置図 (1:200)

3 遺物

遺構の掘削を実施しておらず、旧耕作土内から出土した小片の土師器皿片のみである。図化できるときはないが、平安時代後期に属するものと推察される。

4 まとめ

本調査では白河天皇陵の周囲に巡る堀の東辺の一部を検出した。検出した東肩口は、これまでの推定ラインよりやや東へと振る。堀の石垣が、安土・桃山時代に抜き取られていることから、江戸時代以前まで堀は巡っていたと判断することができる。その後、基盤層の崩落などによって、徐々に埋まっていく。その過程の中で、肩口が崩落し、東肩口が推定位置よりもやや東へとずれているものと推測することができる。以上のように、堀埋土の掘削は実施していないが、東肩口を確認した意義は大きい。(鈴木 久史)

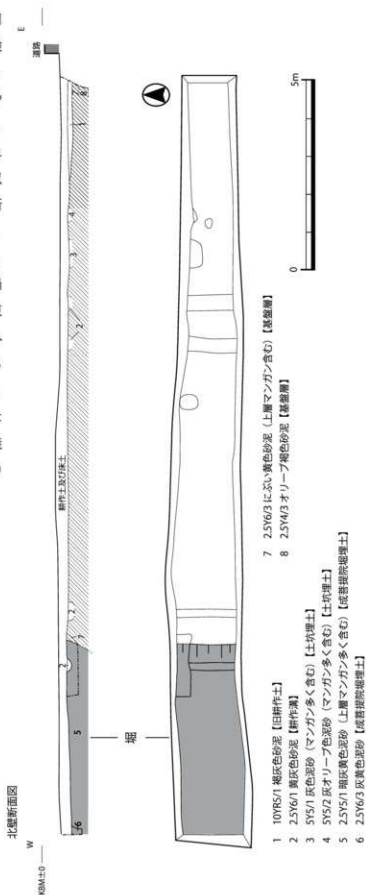


図 81 1 Tr.北壁平・断面図 (1 : 100)

註

- 1) 「中右記」大治四年七月十六日條
山稜事，辰刻，仁和寺宮二人以下奉拾御骨，藤宰相長実奉懸御骨，奉送香隆寺，旧臣扈從，治部卿留御墓所，沙汰山稜云々，院御使出雲守経隆參入，鳥羽御塔中可奉取也。是御遺言也，而及明年大將在南，仍如往生堀川院御時例，暫可御香隆寺也，及明年御骨可御件寺也。
- 2) 『殿曆』天仁二年八月十八日條 天晴雨甚降，寅時許院有御幸鳥羽殿，(中略) 今日鳥羽御塔供養也，(中略) 「今日雨」甚降，雖然必可遂供養也，仍午刻許渡御塔所(略)
- 3) 第 91 次調査 『京都市埋蔵文化財調査概要 昭和 58 年度』(財)京都市埋蔵文化財研究所 1985 年
『鳥羽離宮跡発掘調査概要 昭和 59 年度』京都市文化観光局 1985 年
第 96 次調査 『京都市埋蔵文化財調査概要 昭和 58 年度』(財)京都市埋蔵文化財研究所 1984 年
『鳥羽離宮跡発掘調査概要 昭和 58 年度』京都市文化観光局 1984 年
第 121 次調査 『京都市埋蔵文化財調査概要 昭和 61 年度』(財)京都市埋蔵文化財研究所 1987 年
『鳥羽離宮跡発掘調査概要 昭和 61 年度』京都市文化観光局 1987 年
第 122 次調査 『京都市埋蔵文化財調査概要 昭和 62 年度』(財)京都市埋蔵文化財研究所 1988 年
『鳥羽離宮跡発掘調査概要 昭和 62 年度』京都市文化観光局 1988 年
第 140 次調査 『京都市内遺跡発掘調査概報 平成 8 年度』京都市文化市民局 1997 年

V-9 長岡京左京一条四坊五町跡・東土川遺跡 No.121

1 はじめに

調査地は南区久世東土川町の京都南工業団地の一画で、長岡京左京一坊四坊五町跡及び東土川遺跡にあたる。周辺の調査では、東土川遺跡に関連する遺構が工業団地や桂川パーキングエリアの調査で数多く確認されており、集落の詳細が明らかになっている¹⁾。調査地は東土川遺跡推定範囲の北東部に位置し、さらに調査地の東は条里の乱れや調査成果から旧河川に推定されている。実際、調査地は東隣地と比べて約1m高く、旧地形においても西から東に向かって傾斜していたと思われる。

今回の試掘調査は工場の建て替えに伴うもので、平成24年6月21日に実施した。調査面積は55㎡である。



図82 調査位置図(1:5,000)

2 層序と遺構

調査時には既存建物が使用中であったため、調査区は既存建物の西端ラインに沿ってその外側に設定することとなった。車の出入りや埋設管などを考慮して、南北方向に計4箇所の調査区を設けた(北から1~4Tr.)。

各調査区とも現代盛土、旧耕作土、中世耕作土がGL-1.3~1.6mまで堆積し、1~3Tr.ではその下層で弥生土器を多量に含んだ泥土を基調とする堆積がみられる(5層)。この堆積は厚さ40cm程度の湿地状堆積で、弥生土器の小片を多く含むが、完形に近い土器も出土する。1Tr.の北端ではさらに下層に20cm程の有機物を含んだ堆積があり(6層)、基盤層である灰色シルト~褐色砂礫(9・10層)が南から北に向かって緩やかに傾斜

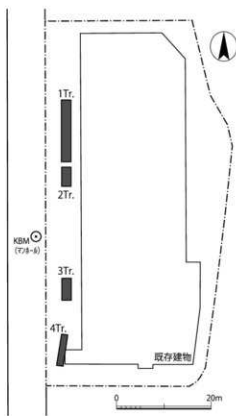


図83 調査区位置図(1:800)

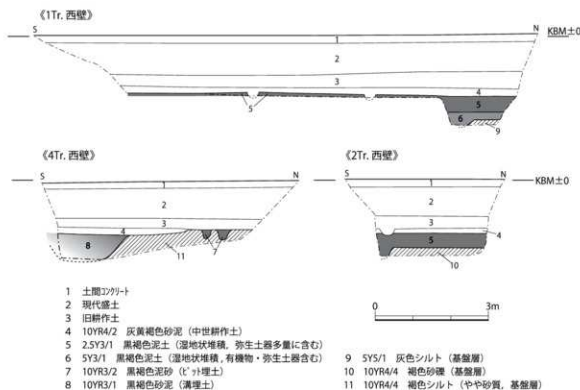


図 84 調査区断面図 (1 : 100)

していたことによるものと考えられる。

一方、4Tr. では中世耕作土直下で比較的安定した褐色シルトの基盤層が検出され、ピットや東西溝が検出された (7・8層)。4Tr. の南端で確認された溝は東に対してわずかに北に振る東西溝で、幅約 2m、深さ 1m 弱の規模が推定される。溝の底からは、ほぼ完形に復元できる土器が土圧で潰れた状態でまともに出ており、溝の性格は不明ながら、すぐ西側に広がる集落居住域に関連する重要な遺構と位置づけられる。

調査当日は大雨による悪天候であったため、3Tr. は掘削直後に水没し、断面図を記録できなかった。ただし、層序は 1・2Tr. に類似する。各調査区の堆積状況からみて、1～3Tr. より北は湿地状堆積、4Tr. 以南は陸地が広がっていたと推定される。

なお、狭小な調査区の範囲内ではあるが、長岡京に関する遺構及び遺物は認められなかった。

3 遺物

1～3Tr. の湿地状堆積層 (5・6層) からは粘板岩製の石器小片 2 点と弥生土器、4Tr. 南端で確認した東西溝 (8層) からは弥生土器が出土した。出土量は遺物コンテナ 2 箱程度である。

5・6層から出土した弥生土器は中期後葉～後期後葉に、8層出土の土器は後期中葉～後葉に位置づけられる。これら土器群には甗、壺、高杯、鉢、器台などの器種がみられるが、焼成不良のものも含まれ、器面が摩滅して調整の不明瞭な個体も多い。焼成や色調には個体差が認められる一方で、いずれの土器にも石英、長石、チャート、クサリ礫が含まれ、均質な胎土を持つ土器

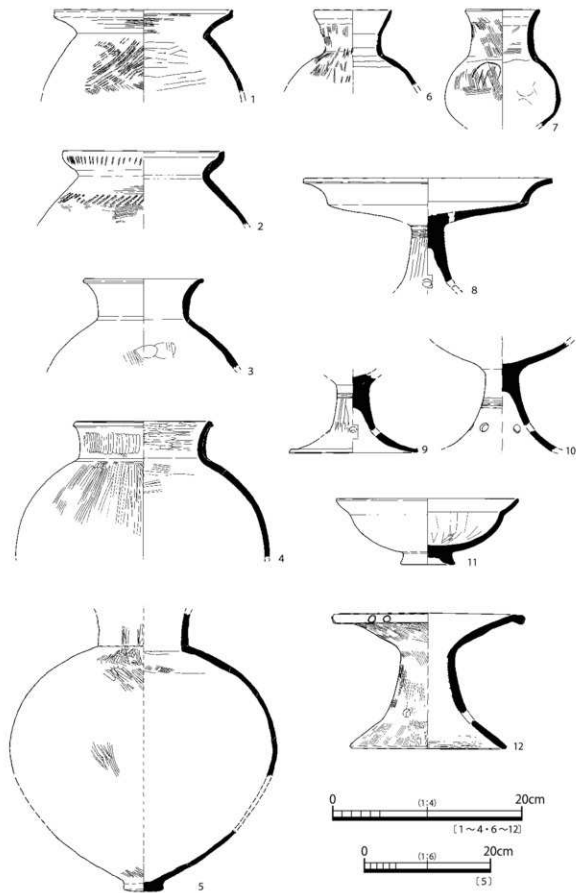


図 85 遺物実測図 (1 : 4, 5のみ 1 : 6)

表1 遺物観察表

No.	器種	出土層位	法量 (cm)			器面調整 (外面・内面)	色調 (外面・内面・断面)	備考
			口径	底径	器高			
1	甕	3Tr. 5層 (18.8)				外: ハケ (一部粗い) 内: ケズリ・ハケ・ナデ	外: 10YR5/3にぶい黄褐色 内: 10YR5/4にぶい黄褐色 断: 10YR5/4にぶい黄褐色	
2	甕	4Tr. 8層 (17.0)				外: ハケ・ナデ 内: ナデ	外: 10YR8/3浅黄褐色 内: 10YR7/3にぶい黄褐色 断: 2. 5YR/1灰白色	口縁部: 列点文 胴部: 列点文・直線文
3	甕	4Tr. 8層 (12.4)				外: ハケ 内: ハケのちナデ	外: 2. 5Y7/1灰白色 内: 2. 5Y7/1灰白色 断: 2. 5YR/1灰白色	
4	壺	4Tr. 8層 (14.0)				外: ミガキ 内: ミガキのちナデ	外: 2. 5YR/1灰白色 内: 2. 5YR/1灰白色 断: 2. 5YR/1灰白色	
5	壺	4Tr. 8層	6.4			外: ハケ後ヘラミガキ 内: 一部ハケ	外: 5YR5/6明赤褐色 内: N3/0暗灰色 断: 7. 5YR6/4にぶい褐色	
6	壺	3Tr. 5層	8.2			外: ハケのちナデ 内: ナデ	外: 10YR8/4浅黄褐色 内: 10YR8/2灰白色 断: 10YR8/4浅黄褐色	
7	壺	3Tr. 5層 (8.0)				外: ハケ 内: ハケ, ナデ	外: 10YR5/1暗灰色 内: 10YR7/1灰白色 断: 10YR7/1灰白色	胴~底部: 炭化顕著 胴部: 線刻あり
8	高杯	4Tr. 8層 (26.4)				外: ナデ, ミガキ 内: ナデ	外: 10YR8/2灰白色 内: 10YR8/2灰白色 断: 10YR8/2灰白色	脚部: 円形透かし4孔
9	高杯	4Tr. 8層	(13.6)			外: ミガキ (脚部) 内: 不明	外: 10YR8/1灰白色 内: 7. 5YR8/3浅黄褐色 断: 7. 5YR8/2灰白色	脚部: 円形透かし4孔
10	高杯	4Tr. 8層				外: 不明 内: 不明	外: 7. 5YR8/3浅黄褐色 内: 7. 5YR8/3浅黄褐色 断: 2. 5YR/1灰白色	脚部: 円形透かし6孔
11	台付鉢	4Tr. 8層	19.2	7.0	5.5	外: ナデ 内: ハケのちナデ	外: 2. 5YR/3淡黄色 内: 2. 5YR/2灰白色 断: 2. 5YR/2灰白色	台部: 貼り付けによる
12	器台	4Tr. 8層	10.8 (16.6)	14.4		外: ハケ 内: ナデ	外: 2. 5Y7/1灰白色 内: 2. 5Y6/1黄灰色 断: 2. 5YR/1灰白色	口縁部: 円形浮文2対6方 脚部: 円形透かし3孔

※ () は復元値

群といえる。

1の甕は胴部から口縁部にかけて「く」の字状に屈曲する。口縁端部は上方につまみ上げられ、端部外側に面を持つ。胴部には意識的に方向を違えるハケが施され、上位のハケが5本/cm、下位が9本/cmと粗密の差がみられる。内面は胴部にケズリ、口縁部にハケが施される。2は内湾する口縁部をもつ甕で、わずかに受け口状を呈す。口縁部にはハケ工具による列点文、胴部には直線文と列点文が交互に配される。3は外反口縁の甕である。器面は摩滅するがわずかにハケが認められる。4は直口縁の甕で、内外面ともにミガキが丁寧に施される。5は大型の甕で、口縁部は直立気味に立ち上がる。器面の摩滅が著しいが、外面にはミガキおよびハケ、内面にはハケの痕跡がわずかに残る。胴部最大径は42.4cm、残存高は44.1cmを測る。6は小型の甕で、口縁端部はやや内湾する。外面ハケ、内面ナデ調整が明瞭に残る。7は小型の甕で、胴部から口縁部にかけて滑らかに成形される。ハケ調整を基調とし、胴部内面には指オサエが残る。胴部外面には円弧と直線で構成される文様が線刻で施される。

8~10は高杯で、うち8の杯部には稜がめぐる。脚上部には2~4条の凹線がめぐり、円形透かしが配される。11の台付鉢は鉢部中央やや上寄りに稜がつく。台部は貼り付けられ、内面にはハケ調整による放射状の静止痕が残る。12は八字状の脚部から緩やかに口縁部が開く器台である。外面はハケ、内面はナデ調整。口縁端部には2対の円形浮文を6方向に貼り付ける。

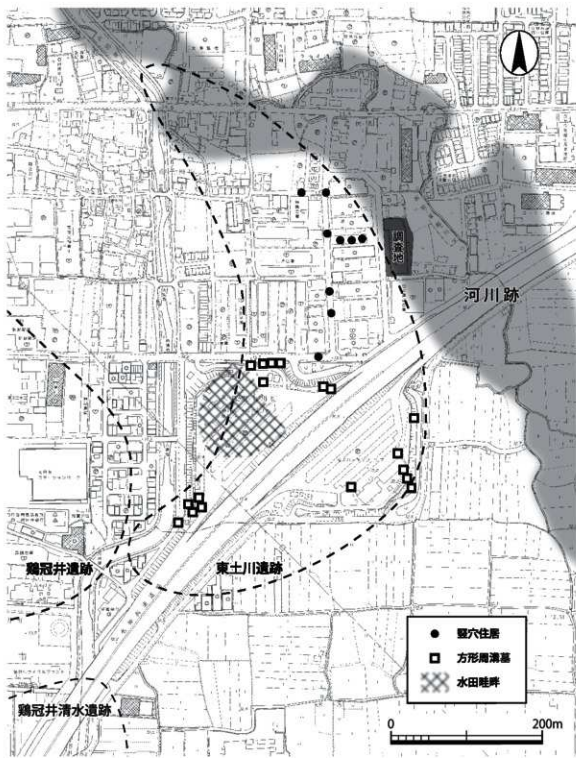


図86 東土川遺跡遺構分布図(1:5,000)

4 まとめ

調査の結果、弥生時代の湿地状堆積、溝、ピットを検出した。前二者からは比較的多量に遺物が得られ、遺構の時期を知ることができた。

東土川遺跡では、これまでの調査で弥生時代中～後期の遺構が広範囲に確認されている。蓄積された調査成果からみて、周知されている集落範囲の北西から南東に向かって桂川の支流にあた

る河川が流れており、集落範囲の北半には中～後期を中心とする居住域、南半に中期を中心とする墓域および生産域が広がっていたことが明らかになっている(図 86)。北半の竪穴住居が確認されている居住域では広範囲な発掘調査事例がなく、遺構に関する具体的な状況について不明な点が多いため、今後の調査に期待されるところが大きい。今回の調査で確認した湿地状堆積は、集落の東を流れる河川に付随する低地、あるいは隣接する後背地に滞水したものと理解され、完形に近い状態の土器の出土は、居住域が河川のすぐ西の微高地に隣接して営まれていることによるのだろう。

さらに、東土川遺跡の西から西南にかけて弥生時代の鶏冠井遺跡と鶏冠井清水遺跡が向日市域を中心に展開しており、当該期の集落規模や集落内の土地利用状況などを検討する上で、今後、これらの集落遺跡との関連も考慮しておく必要がある。

なお、今回の調査で確認した遺構及び遺物包含層の大部分について、設計内容が変更されたことにより地中保存が図られている。(宇野 隆志)

註

- 1) 長宗繁一 1994「長岡京跡左京一条四坊・東土川遺跡」『平成2年度 京都市埋蔵文化財調査概要』(財)京都市埋蔵文化財研究所
野島 永(編)2000「長岡京跡左京二条三・四坊・東土川遺跡」京都市遺跡調査報告書第28冊 (財)京都市埋蔵文化財調査研究センター
吉本健吾・菅田薫 2002「長岡京跡」『京都市内遺跡立会調査概報 平成13年度』京都市文化市民局
宇野隆志 2007「長岡京左京一条四坊四・五町跡・東土川遺跡」『京都市内遺跡試掘調査報告 平成18年度』京都市文化市民局

VI 試掘調査一覧表

平成23年度 1～3月

平安宮地区						
番号	遺跡名	所在地	調査日	調査概要	調査面積	受付番号
1	中和院跡	上京区稲葉町442他	1/30・31	GL-2.2mで基盤層、中和院西限に関連する南北溝を確認。他は近世土取穴、本文3頁。	98㎡	11K409
2	造酒司跡・鳳鳴遺跡	中京区聚楽廻松下町9-7	2/13・14	GL-0.7～1.15mにて基盤層を確認。上面で平安時代の遺構を確認。発掘調査を指導。	108㎡	11K433
平安京左京地区						
番号	遺跡名	所在地	調査日	調査概要	調査面積	受付番号
3	三条三坊七町跡・妙覚寺城跡・烏丸御池遺跡	中京区新町通押小路下中之町46	3/15	妙覚寺城跡西堀、室町・平安時代の土坑やピットを検出。発掘調査を指導。	122㎡	11H471
4	三条四坊七町跡・等持寺跡	中京区堀町通押小路下る鳳凰町650	1/18	GL-1.0～1.2mにて桃山時代の遺構面。以下、古墳時代から室町時代の遺構面あり。発掘調査を指導。	48㎡	11H404
5	四条二坊十五町跡・本能寺城跡	中京区西洞院六角下る池須町397他	2/2	中世整地層、六角小路南側溝、土坑、西洞院川の河道を確認。発掘調査を指導。	37㎡	11H466
6	四条三坊七町跡・提柳町遺跡	中京区六角町361, 364他	3/12・13	GL-2.2mで平安後期の整地層が良好に残る。発掘調査を指導。	158㎡	11H392
7	四条四坊一町跡・烏丸御池遺跡	中京区東洞院通三条下る三文字町217他	2/24	GL-2.0mで暗褐色シルトの基盤層を確認。直上まで近世遺物包含層が堆積。	53㎡	11H105
8	六条二坊十二町跡	下京区佐女牛井町151-1他	1/16	GL-0.8m以下で、中世の土坑群と縄文～弥生時代の流路を検出。	17㎡	11H323
9	八条四坊九町跡	下京区七条通問之町東入材木町463, 463-4, 463-5	3/27	GL-1.1mにて自然堆積の砂礫層。顕著な遺構、遺物なし。	20㎡	11H482
10	九条二坊十一町跡・烏丸町遺跡	南区西九条藤王町56	1/23・24	GL-1.16mで整地層を確認。遺構希薄。	64㎡	11H401
11	九条三坊四町跡・烏丸町遺跡	南区東九条下殿田町3, 6	3/22	GL-0.8～1.0mで地山。左京九条三坊四町の内溝を検出。	64㎡	11H469
平安京右京地区						
番号	遺跡名	所在地	調査日	調査概要	調査面積	受付番号
12	北辺四坊六・七町跡・史跡妙心寺境内	右京区花園妙心寺町42, 11	2/1・9	GL-0.15mで近世土間面、-0.25mで無差小路西側溝に推定される溝を検出。本文14頁。	39㎡	23N024
13	三条三坊十町跡・西ノ京遺跡	中京区西ノ京徳大寺町1	1/10・11	GL-1.3に際にて基盤層。遺構面が良好に遺存する。発掘調査を指導。	112㎡	11H441
14	三条三坊四町跡・西ノ京遺跡	中京区西ノ京桑原町1	1/10～13	各調査区で遺構面を確認。南半は既存建物の解体後。発掘調査を指導。	250㎡	11H426
15	六条二坊十五・十六町跡・西院遺跡	右京区西院寿町33他3筆	2/8, 3/8	解体後乱顕著。GL-0.6～0.75mで地山を検出。	104㎡	11H381
16	六条四坊五町跡	右京区西京極畔町56	1/5	GL-1.5mにてオリープ黒色極細砂層の基盤層。遺構希薄。	51㎡	11H406
17	八条一坊二・三・四町跡・御土居跡	下京区歡喜寺町3-14他	2/6～20	GL-1.0mで朱雀大路の西築地と西側溝、GL-3.0mで平安時代遺物包含層を確認。設計変更を前に協賛中。本文35頁。	474㎡	11H346
18	九条四坊十三町跡	南区吉祥院流作町53	3/28	GL-1.2m以下、明黄褐色泥砂の自然堆積層。顕著な遺構、遺物はなし。	11㎡	11H395
太秦地区						
番号	遺跡名	所在地	調査日	調査概要	調査面積	受付番号
19	史跡名勝嵐山・臨川寺境内	右京区嵯峨天龍寺造路町31-1	1/19	GL-35cmで褐色シルトの基盤層を確認。上面で中世～近世の柱穴、ピットなどを検出。	9㎡	23N043
20	嵯峨遺跡	右京区嵯峨五島町33-1他、嵯峨明星町31-2他	2/16	GL-1.6～2.0mで湿地状堆積。	29㎡	10S527
21	草木町遺跡	右京区鳴滝西嵯峨園町5他	3/6	GL-0.6mで柱穴・溝・ピット等を検出。遺構希薄。	47㎡	11S488
22	常盤東ノ町古墳群・村ノ内町遺跡	右京区常盤東ノ町10-5他	2/20	GL-0.3～0.5mで中世包含層を検出。中世の土坑、溝を検出。	35㎡	11S420

VI 試掘調査一覧表

洛北地区

番号	遺跡名	所在地	調査日	調査概要	調査面積	受付番号
23	上京遺跡	上京区武者小路通室町東入梅屋町466他	1/18	GL-0.6mで室町時代の土坑を検出。擾乱顕著。	102㎡	11S153

洛東地区

番号	遺跡名	所在地	調査日	調査概要	調査面積	受付番号
24	六波羅行政跡	東山区本町1丁目44他	2/28	GL-1.9mまで近世堆積層。以下、鴨川の氾濫に由来する灰黄色砂礫層。	18㎡	11S380
25	法住寺殿跡・妙法院境内	東山区馬町通妙法院北門前妙法院前側町447-1他	1/26・27	GL-0.5～1.5mで桃山期の整地を検出。一部で擾乱。発掘調査を指導。	297㎡	11S344
26	中臣遺跡	山科区西野山中臣町20	3/21	GL-0.7～1.0mで地山。	50㎡	11N453

島羽地区

番号	遺跡名	所在地	調査日	調査概要	調査面積	受付番号
27	羽東師志水町遺跡	伏見区羽東師志水町104-1, 105-1	1/23	顕著な遺構・遺物なし。	11㎡	11S335

平成24年度4～12月

平安宮地区

番号	遺跡名	所在地	調査日	調査概要	調査面積	受付番号
28	大藏省跡・一条大路跡	上京区千本通一条下る北伊勢殿構町688	4/18・19	GL-0.75mで遺物包含層を確認。一条大路に関連する遺構はなし。	80㎡	11K483
29	大藏省跡・聚楽第跡	上京区浄福寺通中立売下る菱丸町180-3他	8/28, 9/10	敷地南端から約9mの地点で北傾斜の遺物包含層。同地点のGL-1.5cmで無遺物層。	11㎡	12K155
30	大炊寮跡・二条城北遺跡	上京区日暮通丸太町下る南伊勢屋町771-1	4/25	GL-75～100cmに複数の平安時代整地層を確認。詳細分布調査報告平成24年度参照。	44㎡	11K576
31	内匠寮跡・鳳鳴遺跡	中京区西ノ京馬寮町28	11/22	GL-0.3mにて基盤層。確認した遺構は近世のみ。	13㎡	12K250
32	左馬寮跡	中京区左馬寮町9-9他	10/31	GL-0.1～0.3mで黄灰色砂礫の基盤層。時期不明の土坑や溝状遺構を複数検出。	20㎡	12K371
33	朝堂院跡・聚楽遺跡	上京区聚楽町851ほか	11/13	GL-0.9～1.2mで基盤層。平安期の顕著な遺構はなし。	71㎡	12K299

平安京京東地区

番号	遺跡名	所在地	調査日	調査概要	調査面積	受付番号
34	北辺二坊八町跡	上京区小川通一条下る小川町206-1, 206-2	10/15	GL-1.0m以下で複数面の中世遺構面が成立。発掘調査を指導。	45㎡	12H222
35	一条二坊四町跡	上京区黒門通下立売下る森中町608	11/19	GL-1.0mで、黒褐色シルトの基盤層。後世の擾乱が顕著。	28㎡	12H393
36	一条三坊十町跡・田二条城跡	上京区室町通水上出る近衛町40-1他	6/18	GL-1.3mにて安土桃山時代。以下平安時代に至るまでの遺構面を確認。発掘調査を指導。	114㎡	11H411
37	二条二坊十二町跡	中京区薬屋町587他	7/30・31, 9/11	室町時代前期、平安時代中～後期を中心とする遺構群を確認。発掘調査を指導。	70㎡	12H063
38	四条一坊十四町跡	中京区壬生坊城町60-1	12/5	GL-0.5mで黄褐色シルトの基盤層。近世の土取穴を多数検出。	46㎡	12H163
39	四条二坊十二町跡・烏丸綾小路遺跡	中京区堀川通四条上る錦堀川町637他	7/9	GL-1.7～4.0mで砂礫の地山。2Tr.ではGL-2.3mで中世の包含層を検出。	44㎡	12H053
40	四条三坊十五町跡・烏丸御池遺跡	中京区六角通烏丸東入堂之前町240	7/18	GL-2.0mにて中世包含層、-2.2mにて平安時代後期の包含層を確認。発掘調査を指導。	74㎡	12H187
41	五条一坊四町跡	中京区壬生辻町36-2他	6/27	GL-0.9mで朱雀大路東側溝。GL-0.7mで平安時代遺構面を検出。詳細分布調査報告平成24年度参照。	43㎡	12H035
42	五条一坊十一町跡	中京区壬生相合町30-8	6/7	GL-1.3mで中世の土坑を1基検出。その他に顕著な遺構なし。	44㎡	12H100
43	五条三坊五町跡・烏丸綾小路遺跡	下京区新町通高辻下る御影町455他	12/14	各時代の遺構面を確認。発掘調査を指導。	27㎡	12H336

44	五条三坊十六町跡・ 烏丸綾小路遺跡	下京区四条通烏丸東入長 刀鉾町7他	9/5~7	敷地全面で中世から平安時代にかけての整地面を 確認。発掘調査を指導。	84㎡	11H513
45	五条四坊十六町跡	下京区四条通寺町西入奈 良物町363他	11/15	GL-0.9mで安土桃山時代、-1.2mで室町時代後半、 -1.5~-1.7mにて平安時代後期の遺構面。	45㎡	12H224
46	六条二坊十二町跡・ 烏丸綾小路遺跡	下京区醒ヶ井通六条上る 佐女牛井町151-1	7/23	調査区西端でGL-0.5mで地山を検出。攪乱顕著。	32㎡	12H059
47	六条三坊八町跡・ 烏丸綾小路遺跡	下京区元両替町255	5/28	既存建物の影響を受けるなか、室町通との道路境 界から4m西で室町小路西側溝を検出。	27㎡	12H006
48	七条三坊四町跡	下京区西洞院通七条上る 福本町406	5/14	GL-2.0mまで攪乱。	28㎡	12H065
49	八条二坊三町跡	下京区南夷町170	10/11	GL-1.0mで平安時代後期以降の土坑、ピットなど多 数確認。発掘調査を指導。	33㎡	12H034
50	八条四坊一町跡・ 御土居跡	下京区七条通間之町東入 材木町491他	11/5・ 6	GL-0.5m以下、安土桃山時代から平安時代後期に至 る遺構面が残存。発掘調査を指導。	217㎡	12H405

平安京右京地区

番号	遺跡名	所在地	調査日	調査概要	調査面積	受付番号
51	北辺二坊六町跡・ 御土居跡	北区大将軍川端町65, 67, 68	10/5	KBm-0.25m以下、紙屋川の氾濫堆積及び後背窪地状 堆積を確認した。	44㎡	12H123
52	北辺二坊七・八町 跡	北区大将軍西町177, 181	9/10	GL-0.4~0.6mで飛鳥~平安時代の遺構面を確認。 発掘調査を指導。	68㎡	12H182
53	二条三坊八町跡・ 西ノ京遺跡	中京区西ノ京春日町8	10/22	調査区東端で表土直下で包層を検出。既存建物 範囲はGL-1.3mまで攪乱。	62㎡	10H507
54	二条四坊六町跡・ 安井馬塚古墳群	右京区太秦安井馬塚町2の 一部他	5/30	GL-0.6mで黄褐色シルトの基盤層。上面にて平安時 代の掘立柱列等を検出。設計変更を指導。本文19 頁。	23㎡	12H009
55	三条二坊十二町跡・ 西ノ京遺跡	中京区西ノ京新建町8	6/25	調査区東端GL-0.64mで平安時代遺物包層、-0.78m で地山を確認した。	88㎡	12H084
56	三条三坊三町跡・ 西ノ京遺跡	中京区西ノ京桑原町1	10/29・ 30	GL-0.4~0.8mで黄褐色シルトの基盤層。上面で平 安時代の柱穴列等を確認。発掘調査を指導。	108㎡	12H375
57	三条三坊十六町跡	中京区西ノ京月輪町3-1, 5-5	9/3・4	基盤層直上まで近世耕作土が堆積。	93㎡	12H074
58	四条一坊七町跡	中京区壬生天池町29-3, 15	7/24	GL-1.0mで平安時代の溝状遺構を検出。本文26頁。	49㎡	12H151
59	四条一坊九町跡・ 壬生遺跡	中京区壬生神明町1-18他	5/22	GL-1.5~-1.7mにてオリーブ灰色砂礫の基盤層。基 盤層上面で平安時代前期の遺構を検出。発掘調査 を指導。	136㎡	11H454
60	四条四坊四町跡・ 山ノ内遺跡・西院 城跡	右京区西院四条畑町2	8/9	GL-1.3mで平安時代の遺構群を検出。本文30頁。	59㎡	12H156
61	四条四坊十二町跡	右京区山ノ内池尻町8-2	12/17	各Tr.ともに湿地状堆積や流れ堆積。	70㎡	12H403
62	五条二坊十六町跡	右京区西院西三蔵町14	7/13	GL-1.0mで平安時代の柱穴などを検出。設計変更を 指導。	34㎡	12H011
63	六条二坊一町跡	中京区壬生東高田町1-9	10/24・ 25	大半が攪乱。GL-0.2~0.25mで遺構面。	173㎡	12H227
64	六条四坊三・四町跡	右京区西院六反田町19- 2, 20-3	7/25	GL-1.15mで湿地堆積を確認。	31㎡	12H193
65	六条四坊十一町跡	右京区西京極東大丸町17- 1, 17-2	10/10	GL-2.4mで、灰黄色粘土の基盤層。遺構なし。	35㎡	12H185
66	七条一坊八町跡	下京区朱雀方木町45-2	11/27	GL-0.3mにて基盤層を確認したが、調査地の大半は 解体攪乱により閉平を受けている。	41㎡	12H296
67	七条三坊四町跡	下京区西七条北月談町68- 1, 68-2, 69, 70	11/12	GL-1.0mでにぶい黄褐色細砂層。顕著な遺構・遺物 なし。	34㎡	12H280
68	八条四坊十二町跡	南区吉祥院向西町1, 3, 4	10/19	GL-1.1m以下には耕土が続き、-1.6~-2.0mで粗砂~ 砂礫の河川氾濫堆積。	18㎡	12H261
69	九条一坊九町跡 (西寺跡)・唐橋 遺跡	南区唐橋門脇町23	4/12	GL-0.4mで西寺の建物跡を検出。発掘調査を指導。	33㎡	11H532

VI 試掘調査一覧表

太秦地区

番号	遺跡名	所在地	調査日	調査概要	調査面積	受付番号
70	史跡名勝嵐山	右京区嵯峨島居本仙童町2-16の一部	5/16	GL-60cmで地山を検出。	18㎡	23N076
71	仁和寺院家跡	右京区花園天授ヶ岡町8-1他	11/28	GL-0.1~0.4mにて基盤層。遺構、遺物ともになし。	40㎡	12S445
72	太秦馬塚町遺跡	右京区太秦北路町3	10/1	GL-0.4m基盤層を検出。	139㎡	12S086
73	広隆寺旧境内・常盤仲之町遺跡	右京区太秦西條岡町9-1他	5/7	GL-0.8mで黄褐色シルトの基盤層。上面にて中近世の土坑や溝等を検出。	20㎡	11S509
74	広隆寺旧境内・常盤仲之町遺跡	右京区太秦西條岡町9-1他	7/4	既存建物による擾乱が顕著。	15㎡	12S036
75	御所ノ内町遺跡	右京区太秦堀ヶ内町7-6	9/12	GL-0.5mで地山を検出。平安時代と考えられる土坑を3基検出。	20㎡	12S117
76	郡城跡・東衣手町遺跡	右京区西京極東衣手町68-1	10/9	KBM±0m, -0.3m, -0.7mで遺構成立面とみられる硬化面を確認。本文42頁。	24㎡	12S270
77	嵯峨野高田町遺跡	右京区嵯峨野東田町10他	4/26・27	GL-0.5mにて黄褐色泥砂の基盤層。竪穴住居、溝、落ち込み等が良好に遺存。発掘調査を指導。	103㎡	11S200

洛北地区

番号	遺跡名	所在地	調査日	調査概要	調査面積	受付番号
78	本山古墳群	左京区岩倉榊枝町333-3	4/10	GL-0.3~0.7mで黄褐色砂礫の基盤層。調査区範囲には古墳関連遺構なし。現存古墳に対し、発掘調査を指導。	15㎡	11S478
79	植物園北遺跡	左京区下鴨南野々神町1	8/1	旧耕作土直下で竪穴住居を検出。大半は既存建物による擾乱。発掘調査を指導。	61㎡	10S134
80	植物園北遺跡	左京区松ヶ崎今海道町9他	10/3	GL-0.47mで基盤層を確認。竪穴住居を検出。本文46頁。	61㎡	12S173
81	北野廃寺・北野遺跡	北区北野下白梅町44-1	4/20, 5/14	GL-0.7mの整地層上面で、流路と東西溝を確認。東西溝は寺城南限を示す可能性あり。本文49頁。	24㎡	11S579
82	北野廃寺・北野遺跡	北区北野下白梅町84	7/27	GL-0.75mで近世遺物包含層、-0.8mで地山を検出。	33㎡	12S113
83	雲林院跡	北区紫野雲林院町40	8/31	擾乱が多いものの、北大路通歩道上のKBm-15cm程度で近世整地層、同35cmで基盤層。本文53頁。	64㎡	12S157
84	寺町旧域	上京区樹形通出町西入二神町167他	9/11	GL-0.4mで宝暦の大火に推定される機土層、以下複数の整地面を検出。発掘調査を指導。	26㎡	12S127
85	室町殿跡	上京区室町通今出川上る築山南半町224-1他	6/11・12	表土直下GL-1.0mで室町～安土桃山時代の遺構を検出。設計変更を指導。	53㎡	12S058
86	上京遺跡	上京区黒門通一条上る界正町731	6/12	GL-0.5mで中世遺物包含層、-0.72mで地山を検出。	40㎡	12S020

北白川地区

番号	遺跡名	所在地	調査日	調査概要	調査面積	受付番号
87	白河街区跡・岡崎遺跡	左京区聖護院内頼美町44-5他	5/24	平安時代後期の版築土壇と溝、土坑、柱穴等を確認。発掘調査を指導。	108㎡	12S003
88	白河南殿跡	左京区聖護院蓮華藤町8-5の一部	5/24	GL-1.9mで平安時代の池を検出した。設計変更を指導。	17㎡	12R054
89	法勝寺跡・岡崎遺跡	左京区岡崎法勝寺町4-1-3	9/19	GL-1.0mで院政期の掘り込み地梁を確認。南北15m以上、厚さ約1.1mで版築状に積み土を行う。設計変更を指導。本文57頁。	16㎡	12R143
90	法勝寺跡・岡崎遺跡	左京区岡崎法勝寺町(京都市動物園内)	9/24・25	各調査区で遺構面を確認。設計変更を指導。本文62頁。	20㎡	12R305
91	法勝寺跡・岡崎遺跡	左京区岡崎法勝寺町(京都市動物園内)	4/16~18	各調査区で遺構面を確認。設計変更を指導。本文62頁。	46㎡	12R010

洛東地区

番号	遺跡名	所在地	調査日	調査概要	調査面積	受付番号
92	御土居跡・寺町旧城	中京区河原町通二条上る清水町358-3他	8/22	GL-1.0~1.5mで御土居基底部を確認。大半が攪乱により、遺構面は大幅に削平。	43㎡	12S142
93	将軍塚古墳群	東山区粟田口粟田山南町1他	12/12	古墳に関連する遺構はなし。GL-0.6mで中世の土坑墓を1基確認。	58㎡	12S260
94	珍皇寺旧境内	東山区大和路通四条下る四丁目小松町11-5の一部	8/27	大半が攪乱。部分的にGL-1.0mで地山を検出するも、顕著な遺構・遺物なし。	17㎡	12S140
95	安朱遺跡	山科区安朱中小路町2-8他	12/6	GL-0.75mで地山を検出。	57㎡	12S276
96	山科本願寺跡	山科区西野山階町30-6	12/18・19	過去の調査における遺構保存範囲を正確に確認。一部を除いて遺構面が良好に遺存していることを確認。取扱い協議中。	82㎡	12S342
97	中臣遺跡	山科区勧修寺西栗栖野町197他	5/9	GL-0.3mで方形周溝墓の周溝を確認。	38㎡	11N542
98	中臣遺跡	山科区勧修寺西栗栖野町252	12/4	旧安祥寺川が形成した河岸段丘崖を確認。	7㎡	12N417
99	勧修寺旧境内	山科区勧修寺福岡町311	12/3・4	耕作土直下で近世造成土を検出。	69㎡	12S240

伏見・醍醐地区

番号	遺跡名	所在地	調査日	調査概要	調査面積	受付番号
100	深草坊町遺跡・貞観寺跡・安楽行院跡	伏見区深草僧坊町40-1他	8/8	GL-1.0mで中世、GL-1.9m平安時代の遺構面があるが、遺構は希薄。	21㎡	12S102
101	伏見城跡	伏見区桃山町正宗17-2他	10/4・5	各調査区において伏見城期の遺構面を確認。1Tr.では惣構土塁を確認。発掘調査を指導。	66㎡	12F291
102	伏見城跡	伏見区深草大亀谷万帖敷町5他	8/30	伏見城期の造成土を検出。	72㎡	12F146
103	伏見城跡	伏見区肥後町369	11/5	GL-2.05mで地山を検出。	30㎡	12F279
104	伏見城跡	伏見区桃山筑前台町25-1	7/5・6, 8/6	GL-0.8~1.4mで、南北方向の路面状遺構(近代以降か)を検出。	121㎡	12F017
105	伏見城跡	伏見区桃山町鍋島20-1他	9/27	GL-0.25mで伏見城期の造成土を検出。	53㎡	12F183
106	伏見城跡	伏見区桃山町本多上野9-1	8/6, 9/20, 9/28	大規模な造成或跡と大名屋敷にかかわる遺構を検出。本文71頁。	107㎡	12F162
107	伏見城跡	伏見区新町三丁目492他	5/17, 9/13	GL-1.5mで伏見城期の整地層を確認するも攪乱顕著。	82㎡	11F529
108	太閤堀	伏見区向島橋詰町790他	4/11	GL-0.7mで太閤堀の積土の一部を検出。	10㎡	11S527
109	太閤堀	伏見区向島中島町26, 119	7/17	厚い川砂の盛土。GL-1.0mで近世の整地層があるが、薬堤当初のものとは考えにくい。	55㎡	12S161
110	向島城跡	伏見区向島庚申町124他	7/17	GL-0.93m以下、砂層と泥土の互層。一部で時期不明の整地層を確認。	20㎡	12S092

南・桂地区

番号	遺跡名	所在地	調査日	調査概要	調査面積	受付番号
111	嵐山谷々辻子町遺跡	西京区嵐山内田町39-1	6/14	GL-0.5m以下泥堆積層。	40㎡	12S097
112	福西古墳群	西京区大枝東長町1-74他	8/10~15	GL-50~90cmで基盤層。顕著な遺構、遺物なし。	149㎡	12S205
113	中久世遺跡	南区久世中久世3丁目102-1他	12/7	KBM-0.66m以下で中世の遺構面。-0.8mで弥生時代の遺構面。設計変更を前提に協議中。	47㎡	12S338
114	大蔵遺跡	南区久世殿城町534-1	9/18	KBM-1.3mにて基盤層。顕著な遺構、遺物なし。	23㎡	12S158
115	大蔵遺跡	南区久世殿城町547-1, 553	4/23	南半ではGL-30cmで基盤層。北半では自然流路の堆積層。顕著な遺構なし。	48㎡	11S538

VI 試掘調査一覧表

鳥羽地区

番号	遺跡名	所在地	調査日	調査概要	調査面積	受付番号
116	鳥羽離宮跡	伏見区竹田西内畑町4	12/27	GL-2.25mで弥生時代の流路を確認。	24㎡	12T309
117	鳥羽離宮跡・鳥羽遺跡	伏見区竹田西内畑町163、164	4/13	GL-1.05mで中世耕作土、-1.8mで地山を検出。	31㎡	11T523
118	鳥羽離宮跡・鳥羽遺跡	伏見区竹田浄菩提院町52他	8/20	白河天皇陵（成菩提院陵）の堀を検出。設計変更を指導。本文77頁。	28㎡	12T215
119	下鳥羽遺跡	伏見区東岸川町5他	10/17	GL-1.0m以下、現代～中世の耕土が続き、-2.0mにて河川堆積に由来する地積層。	76㎡	12S200

長岡地区

番号	遺跡名	所在地	調査日	調査概要	調査面積	受付番号
120	長岡京左京一条四坊十五・十六町跡	伏見区久我石原町7-16他	6/21	GL-1.2mにて明黄褐色シルトの基盤層。顕著な遺構はなし。	43㎡	12NG027
121	長岡京左京一条四坊五町跡・東土川遺跡	南区久世東土川町346-3他	6/21	北半ではGL-1.6mで弥生土器を多く含んだ湿地状堆積、南端ではGL-1.3mでピット、溝を検出。設計変更を指導。本文81頁。	55㎡	12NG095
122	長岡京左京三条三坊九・十町跡・鶏冠井清水遺跡	伏見区久我西出町3-15他	11/1	GL-1.6mで黄褐色砂泥の基盤層。上面で長岡京条坊側溝を検出。発掘調査を指導。	63㎡	12NG265
123	長岡京左京四条三坊十四町跡・羽東師菱川城跡	伏見区羽東師菱川町43他	11/1・2、12/19～21	羽東師菱川城の北堀、東堀を検出。取扱い協議中。	226㎡	12NG289
124	長岡京左京五条三坊十三町跡	伏見区羽東師古川町410他	8/29	GL-0.5～0.7mで地山を検出。顕著な遺構や遺物なし。	101㎡	12NG225
125	長岡京左京八条三坊四・五町、九条二坊十三町・三坊一～四町跡	伏見区淀大下津地先～淀水垂地先	6/4～8	宮前橋の北側で土坑1基と溝状遺構を確認。取扱い協議中。	191㎡	11NG438
126	長岡京左京八条三坊四・五町、九条二坊十三町・三坊一～四町跡	伏見区淀大下津地先～淀水垂地先	11/12～21	宮前橋の北側で與籽神社及び周辺集落関連遺構を検出。このほか、中世の湿地状堆積を確認。取扱い協議中。	640㎡	11NG438

表2 遺物概要表

	Aランク点数 (箱数)	内 訳	Bランク 箱数	Cランク 箱数	出土箱数 合計
点数及び箱数	133点 (9箱)	弥生土器13点、土師器72点、須恵器2点、黒色土器1点、緑釉陶器6点、灰釉陶器3点、瓦器2点、輸入陶磁器4点、その他陶磁器類11点、瓦類10点、木製品7点、石製品1点、土製品1点	3箱	34箱	46箱

報告書抄録

ふりがな	きょうとしないうせきしくつちょうきほうこく							
書名	京都市内遺跡試掘調査報告 平成24年度							
副書名								
巻次								
シリーズ名								
シリーズ番号								
編著者名	馬瀬智光・堀大輔・宇野隆志・家原圭太・西森正晃・鈴木久史・奥井智子							
編集機関	京都市文化市民局 文化芸術都市推進室 文化財保護課							
所在地	〒 604- 8006 京都市中京区河原町通御池下る下丸屋町394 Y・J・Kビル2F							
発行機関	京都市文化市民局							
所在地	〒 604- 8571 京都市中京区寺町通御池上る上本能寺前町488							
発行年月日	西暦2013年3月31日							
所収遺跡名	所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積 ㎡	調査原因
		市 町 村	遺跡番号					
平安宮中和院跡	京都府京都市上京区 いざばちよう ほか 稲葉町442他	26100	1	35度 1分 14秒	135度 44分 30秒	2012/1/30・31	98	共同住宅
平安京左京五条三坊十一町跡・烏丸小路遺跡	京都府京都市下京区 山王町557-1, 2	26100	1 712	35度 0分 2秒	135度 45分 30秒	2011/11/7~9	106	店舗
平安京右京北辺四坊六・七町跡・史跡妙心寺境内	京都府京都市右京区 花園妙心寺町42, 11	26100	1 A806	35度 1分 28秒	135度 43分 10秒	2012/2/1・9	39	福祉関係施設
平安京右京二条四坊六町跡・安井馬塚古墳群	京都府京都市右京区 太秦安井馬塚町2の一部 他	26100	1 890	35度 0分 56秒	135度 43分 20秒	2012/5/30	23	診療所
所収遺跡名	種 別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項			
平安宮中和院跡	宮殿跡	江戸時代・平安時代	中和院西廡の溝	土師器・須恵器・緑釉陶器				
平安京左京五条三坊十一町跡・烏丸小路遺跡	都城跡、集落跡	平安~室町時代	溝・土坑・ビット	土師器・須恵器・緑釉陶器・瓦質土器・輸入陶磁器など	地中保存			
平安京右京北辺四坊六・七町跡・史跡妙心寺境内	都城跡、史跡	平安時代・江戸時代	溝・近世の土間	土師器・中世須恵器・白磁碗	地中保存			
平安京右京二条四坊六町跡・安井馬塚古墳群	都城跡、古墳	平安時代	掘立柱列	土師器	地中保存			

報告書抄録

ふりがな	きょうとしないせきしくつちょうさほうこく							
書名	京都市内遺跡試掘調査報告 平成24年度							
副書名								
巻次								
シリーズ名								
シリーズ番号								
編著者名	馬淵智光・堀大輔・宇野隆志・家原圭太・西森正晃・鈴木久史・奥井智子							
編集機関	京都市文化市民局 文化芸術都市推進室 文化財保護課							
所在地	〒 604- 8006 京都市中京区河原町通御池下る下丸屋町394 Y・J・Kビル2F							
発行機関	京都市文化市民局							
所在地	〒 604- 8571 京都市中京区寺町通御池上る上本能寺前町488							
発行年月日	西暦2013年3月31日							
所収遺跡名	所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積 ㎡	調査原因
		市	町 村					
平安京右京三条二坊十二町跡・西ノ京遺跡	京都府京都市中京区西ノ京新羅町8	26100	1	35度 01分 34秒	135度 43分 56秒	2012/6/25	88	共同住宅
平安京右京四条一坊七町跡	京都府京都市中京区土生天沼町29-3・15	26100	1	35度 0分 25秒	135度 44分 25秒	2012/7/24	49	宅地造成
平安京右京四条四坊四町跡・山ノ内遺跡・西院城跡	京都府京都市右京区西院四条畑町2	26100	1	35度 09分 29秒	135度 43分 27秒	2012/8/9	59	共同住宅
平安京右京八条一坊二・三・四町跡・御土居跡	京都府京都市下京区観音寺町3-14世	26100	1	34度 14分 10秒	135度 59分 30秒	2012/2/6~20	474	博物館
所収遺跡名	種 別	主な時代		主な遺構		主な遺物		特記事項
平安京右京三条二坊十二町・西ノ京遺跡	都城跡・散布地	平安時代前期		溝・柱穴		土師器・緑釉陶器・平瓦		
平安京右京四条一坊七町	都城跡	平安時代		溝		土師器・軒丸瓦		
平安京右京四条四坊四町跡・山ノ内遺跡・西院遺跡	都城跡・集落跡	平安時代		木辻大路内溝		土師器・須恵器		
平安京右京八条一坊二・三・四町・御土居跡	都城跡・土塁跡	平安時代後期		朱雀大路西側溝・築地基礎部		土師器・緑釉陶器・平瓦		

報告書抄録

ふりがな	きょうとしなにいせきくつちようさほうこく								
書名	京都市内遺跡試掘調査報告 平成24年度								
副書名									
巻次									
シリーズ名									
シリーズ番号									
編著者名	馬瀬智光・堀大輔・宇野隆志・家原主太・西森正晃・鈴木久史・奥井智子								
編集機関	京都市文化市民局 文化芸術都市推進室 文化財保護課								
所在地	〒 604- 8006 京都市中京区河原町通御池下る下丸屋町394 Y・J・Kビル 2F								
発行機関	京都市文化市民局								
所在地	〒 604- 8571 京都市中京区寺町通御池上る上本能寺町488								
発行年月日	西暦2013年3月31日								
所収遺跡名	所在地	コード			北緯	東経	調査期間	調査面積 ㎡	調査原因
		市	町	村					
郡城跡・東衣手町遺跡	京都市京都市右京区 西京極東衣手町68-1	26100	926	927	34度 59分 50秒	135度 42分 39秒	2012/10/9	24	共同住宅
植物園北遺跡	京都市京都市左京区 松ヶ崎寺海道町9地	26100	146		35度 3分 3秒	135度 46分 32秒	2012/10/3	61	共同住宅
北野庚寺・北野遺跡	京都市京都市北区 北野下白梅町44-1	26100	160	161	35度 1分 35秒	135度 43分 54秒	2011/4/20 5/14	24	事務所
雲林院跡	京都市京都市北区 紫野雲林院町40	26100	163		35度 2分 27秒	135度 44分 57秒	2012/8/31	64	店舗
法勝寺跡 岡崎遺跡	京都市京都市左京区 岡崎法勝寺町4-1-3	26100	417	418	35度 1分 54秒	135度 47分 17秒	2012/9/19	16	個人住宅
所収遺跡名	種別	主な時代		主な遺構	主な遺物		特記事項		
郡城跡・東衣手町遺跡	平城跡・基跡	江戸時代後期以降			土師器・陶磁器・瓦		地中保存		
植物園北遺跡	集落跡	古墳時代～奈良時代		竪穴建物・ピット					
北野庚寺 北野遺跡	寺院跡・集落跡	平安時代		東西溝	土師器・瓦				
雲林院跡	寺院跡	桃山時代			土師器・染付・国産陶器				
法勝寺跡 岡崎遺跡	寺院跡・集落跡	平安時代後期		院政期の掘込地家	土師器・瓦・凝灰岩		地中保存		

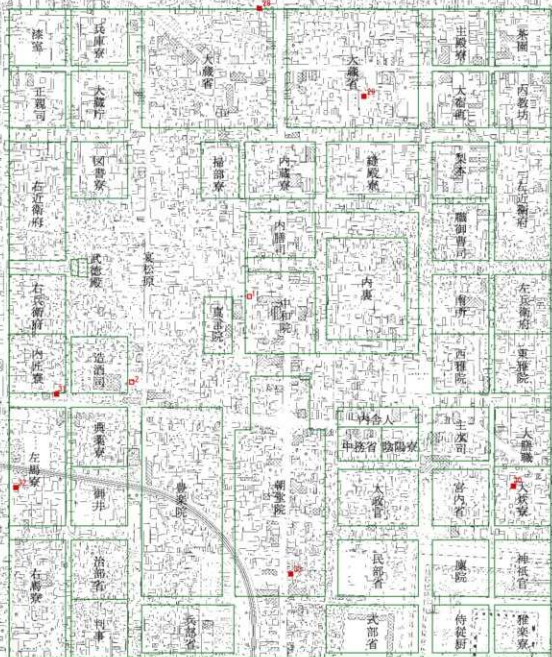
報告書抄録

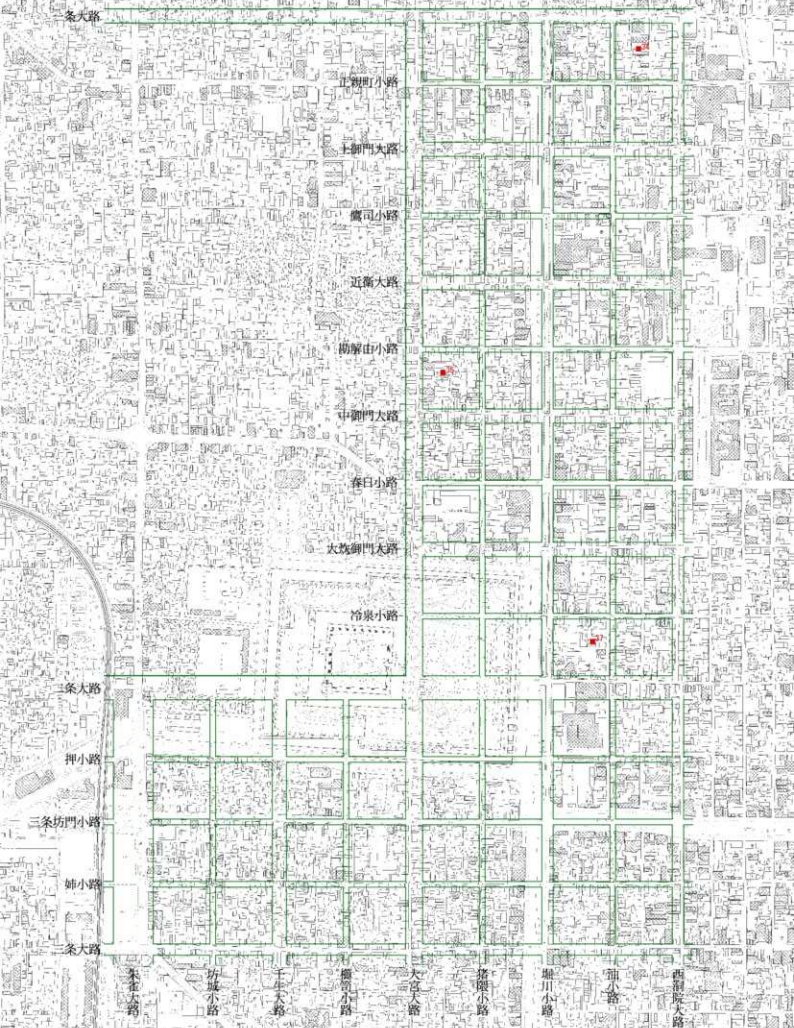
ふりがな	きょうとしなにいせきしくつちようさほうこく							
書名	京都市内遺跡試掘調査報告 平成24年度							
副書名								
巻次								
シリーズ名								
シリーズ番号								
編著者名	馬瀬智光・堀大輔・宇野隆志・家原圭太・西森正晃・鈴木久史・奥井智子							
編集機関	京都市文化市民局 文化芸術都市推進室 文化財保護課							
所在地	〒 604- 8006 京都市中京区河原町通御池下る下丸屋町394 Y・J・Kビル2F							
発行機関	京都市文化市民局							
所在地	〒 604- 8571 京都市中京区寺町通御池上る上本能寺前町488							
発行年月日	西暦2013年3月31日							
所収遺跡名	所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積 ㎡	調査原因
		市	町					
法勝寺跡・岡崎遺跡	京都市京都市左京区 岡崎法勝寺町 (京都市動物園内)	26100	417	34度 0分 47秒	135度 47分 12秒	2012/9/24 4/16～18	20 46 (計66)	動物園
伏見城跡	京都市京都市伏見区 桃山町本多上野9-1	26100	1172	34度 55分 55秒	135度 46分 7秒	2012/8/6 9/20・28	107	宅地造成
鳥羽龍宮跡・鳥羽遺跡	京都市京都市伏見区 竹田浄菩提院町52帖	26100	1166 1167	34度 57秒 66秒	135度 45分 6秒	2012/8/20	28	共同住宅
長岡京左京一条四坊五町跡・東土川遺跡	京都市京都市南区 久世東土川町346-3他	26100	3 783	34度 56分 46秒	135度 43秒 22秒	2012/6/21	55	工場
所収遺跡名	種別	主な時代		主な遺構		主な遺物		特記事項
六勝寺跡・岡崎遺跡	寺院跡・集落跡	平安時代		土坑・池		土師器・瓦		地中保存
伏見城跡	城跡	桃山時代		造成土		国産陶磁器・瓦		
鳥羽龍宮跡 鳥羽遺跡	龍宮跡・集落跡	平安時代後期		堀		土師器・瓦		地中保存
長岡京左京一条四坊五町跡・東土川遺跡	都城跡・集落跡	弥生時代		湿地状堆積		弥生土器		地中保存

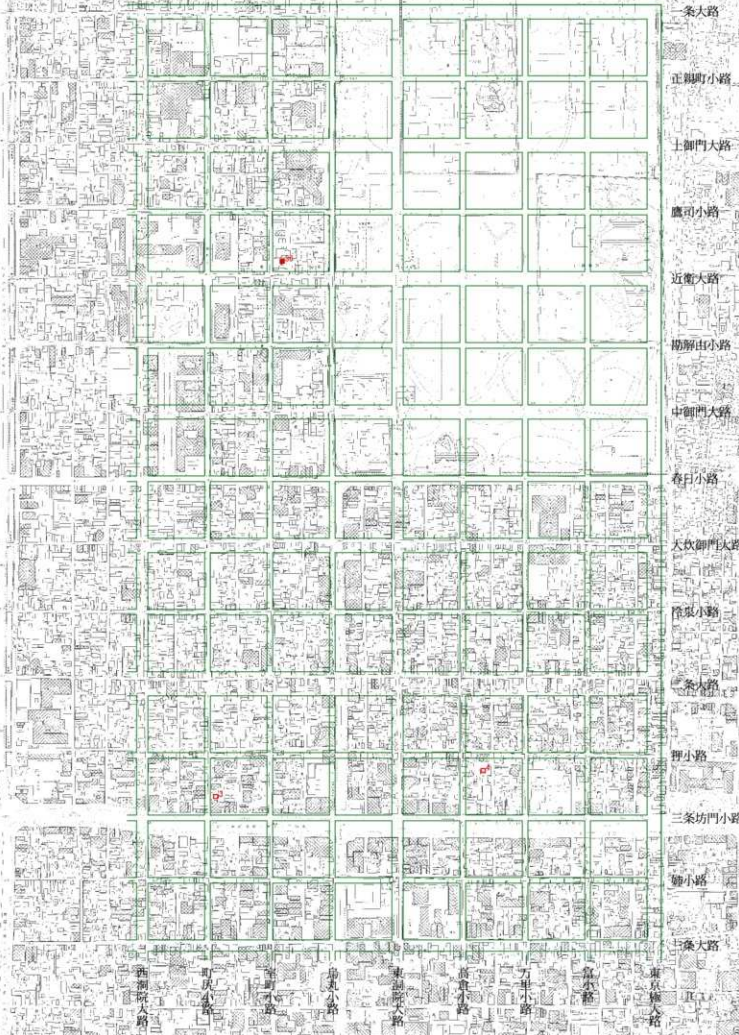
圖 版

凡 例

- 平成24年1～3月 試掘調査地点
- 平成24年4～12月 試掘調査地点







一条大路

正御門小路

上御門大路

廣司小路

近衛大路

揚屋由小路

中御門大路

春日小路

大炊御門大路

隆取小路

一条小路

裡小路

三条坊門小路

鐘小路

三条大路

西河原大路

町尻小路

平野小路

舟丸小路

車御院大路

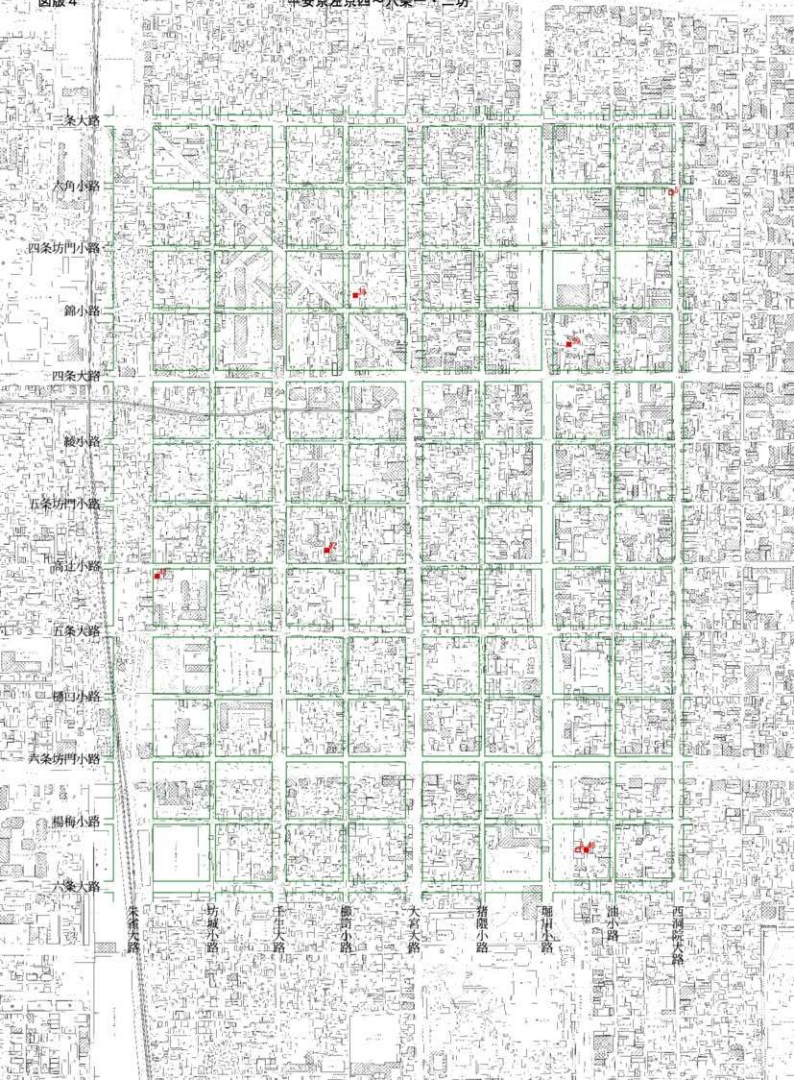
高倉小路

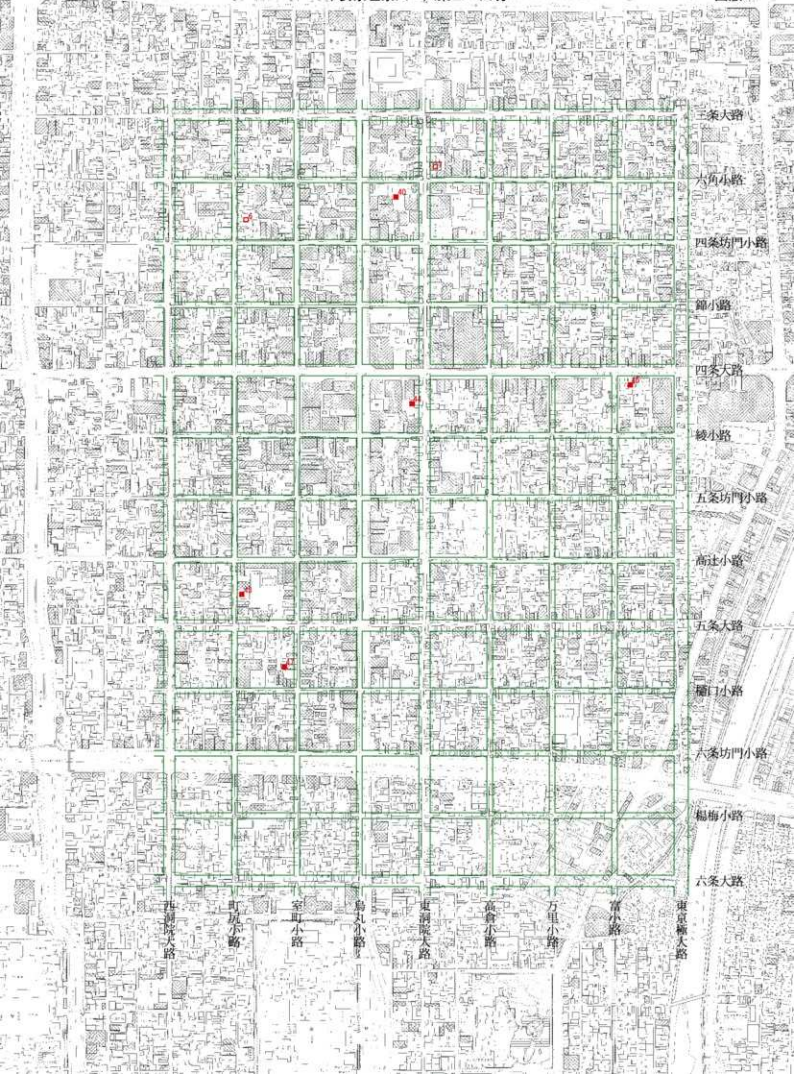
万華小路

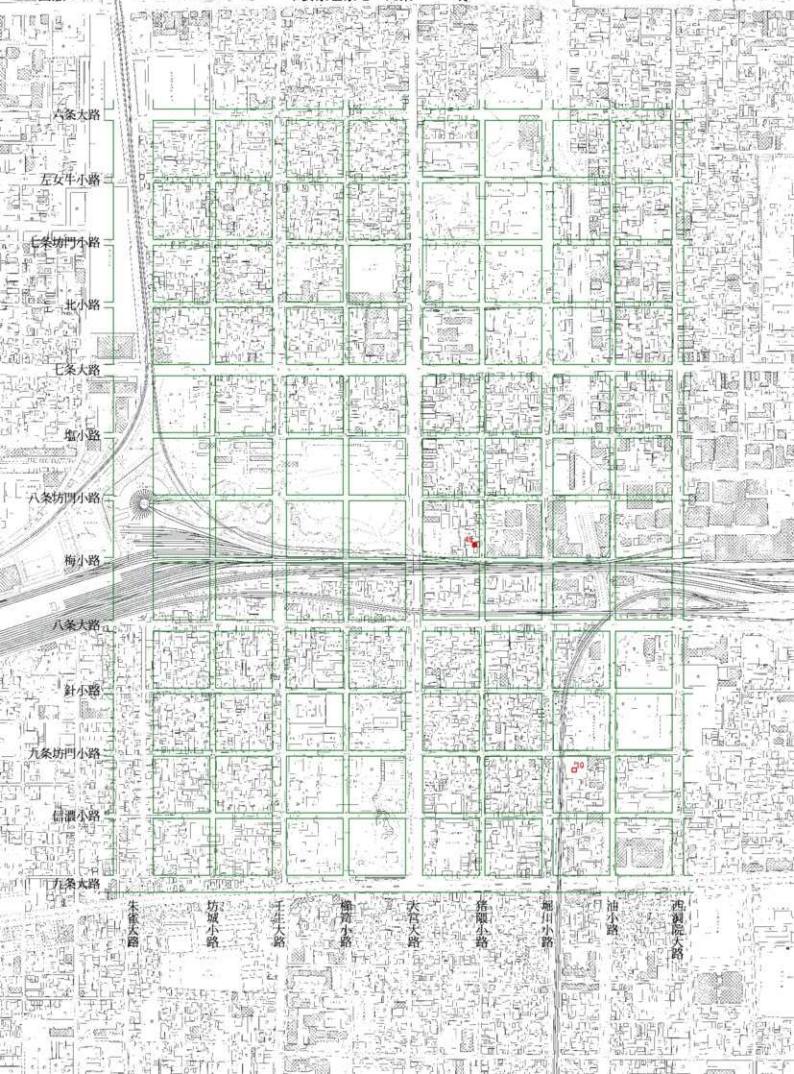
高倉小路

東宮大路

正









八条大路

左女牛小路

七条坊門小路

北小路

七条大路

堀小路

八条坊門小路

梅小路

八条大路

針小路

九条坊門小路

信濃小路

九条大路

西朝原路

町尻小路

空町小路

烏丸路

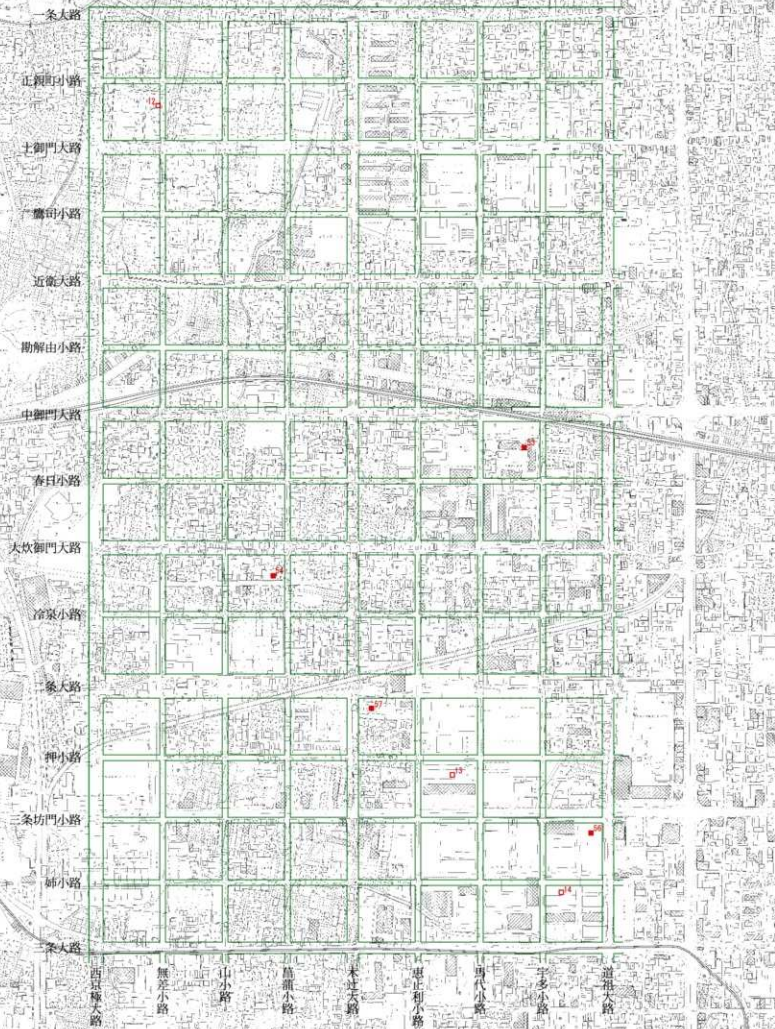
東海院路

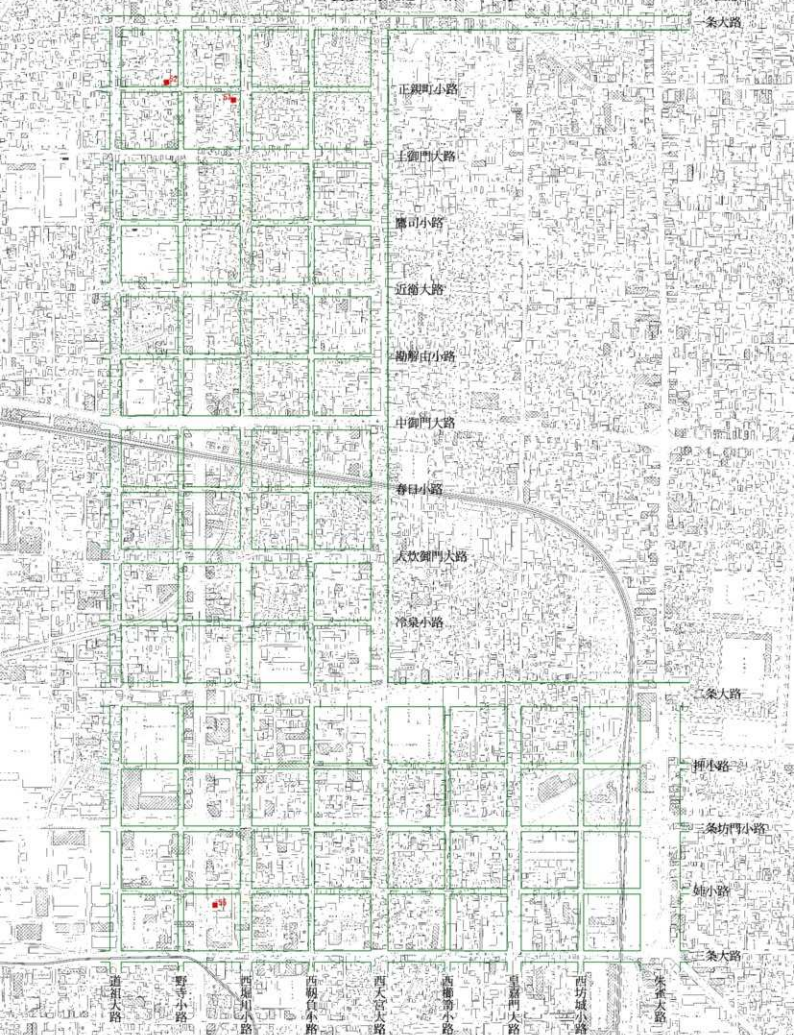
高倉小路

万石小路

富小路

東橋本路





一条大路

正御門小路

上御門大路

鷹司小路

近衛大路

勘解由小路

中御門大路

春日小路

大炊御門大路

常泉小路

二条大路

栢小路

三条坊門小路

錦小路

三条大路

道祖大路

野寺小路

西尾用小路

西朝負小路

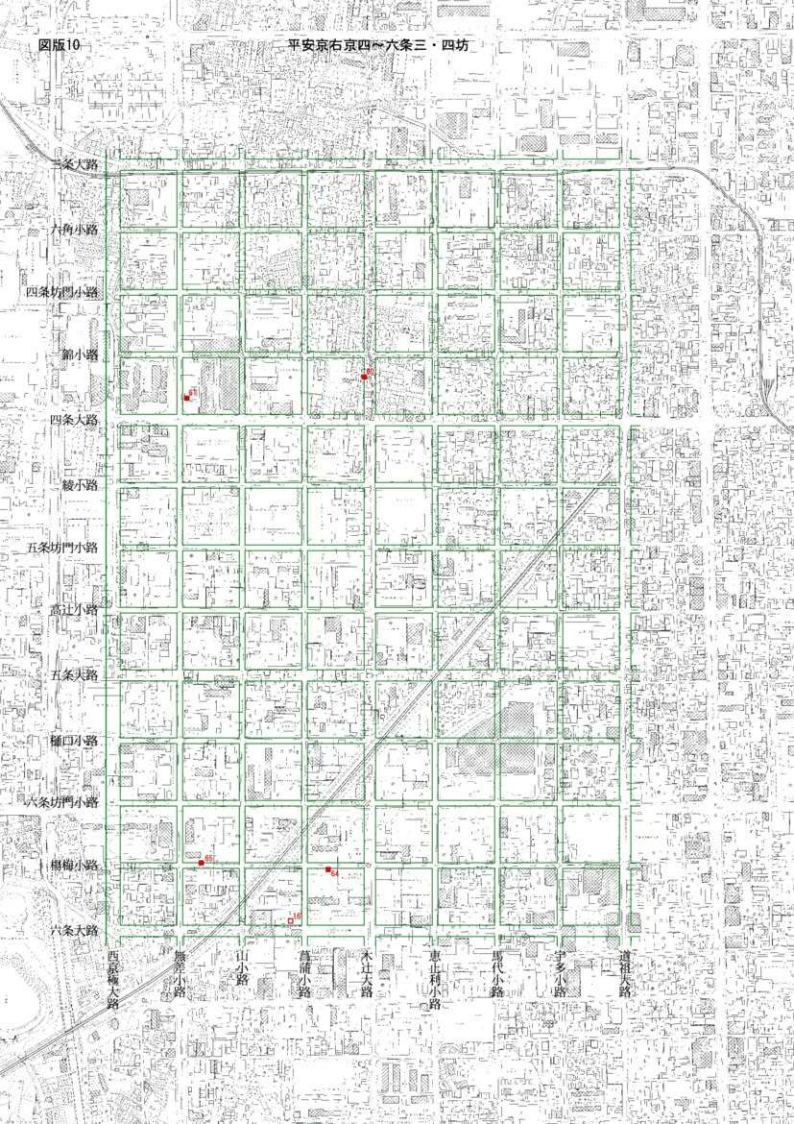
西大宮大路

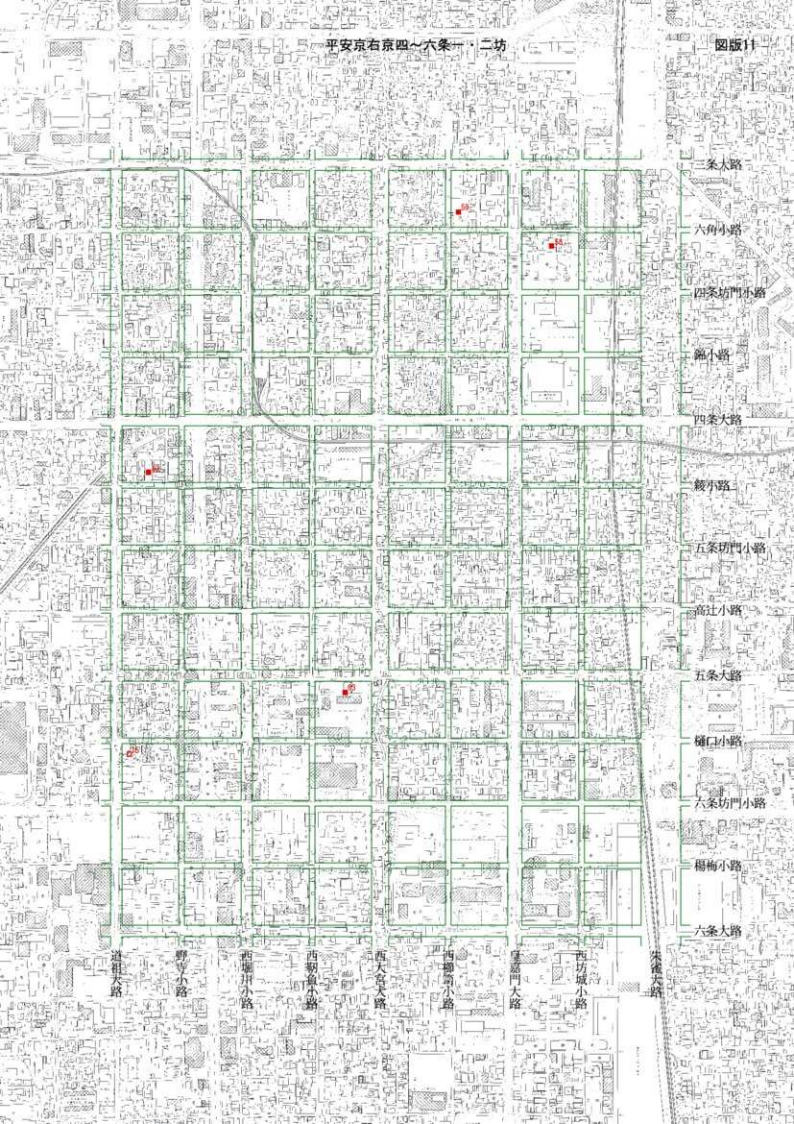
高柳寺小路

皇嘉門大路

西坊城小路

朱雀大路





三条大路

六角小路

四條坊門小路

鏡小路

四條大路

鏡小路

五條坊門小路

高辻小路

五條大路

樋口小路

六條坊門小路

楊梅小路

六條大路

道祖大路

野宮小路

西堀井小路

西朝風小路

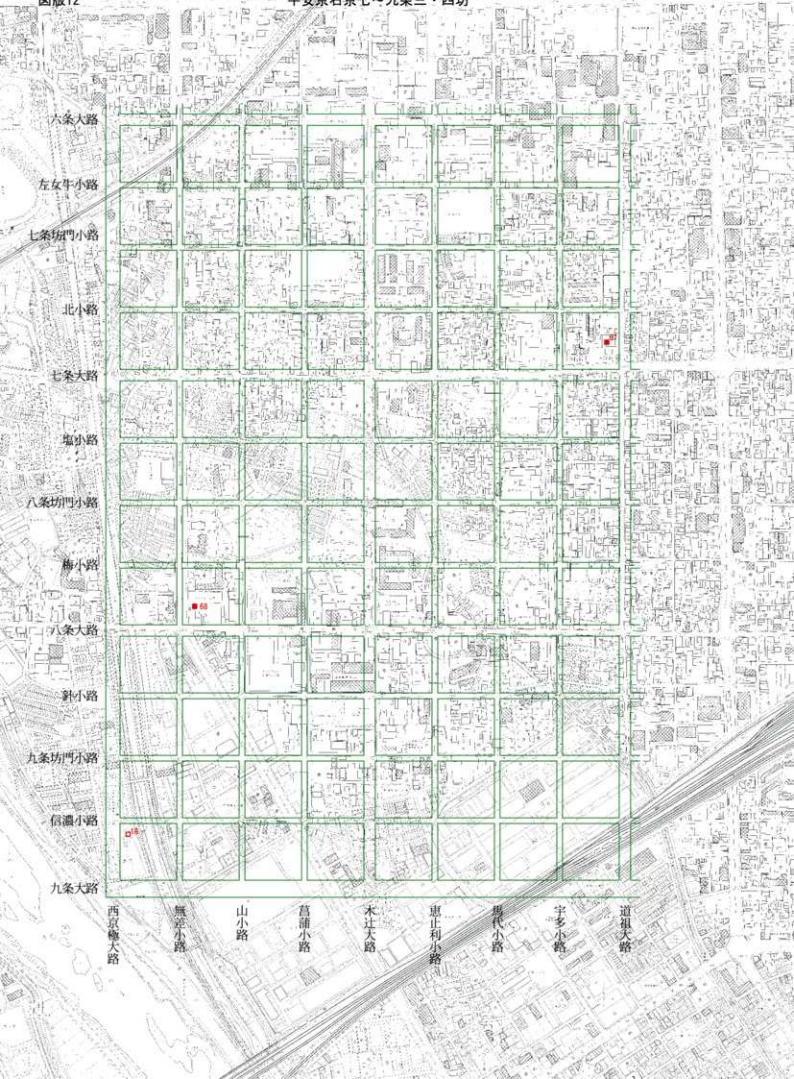
西大宮大路

西堀井小路

厚嘉門大路

西坊城小路

朱雀大路



六条大路

左女牛小路

七条坊門小路

北小路

七条大路

堀小路

八条坊門小路

梅小路

八条大路

針小路

九条坊門小路

信濃小路

九条大路

西京極大路

無差小路

山小路

高浦小路

木江大路

車止利小路

馬代小路

宇多小路

道祖大路



六条大路

左女平小路

七条坊門小路

北小路

七条大路

塩小路

八条坊門小路

梅小路

八条大路

針小路

九条坊門小路

信濃小路

九条大路

道祖大路

野寺小路

西慶川小路

西朝負小路

西大宮大路

西藤荷小路

西堀門大路

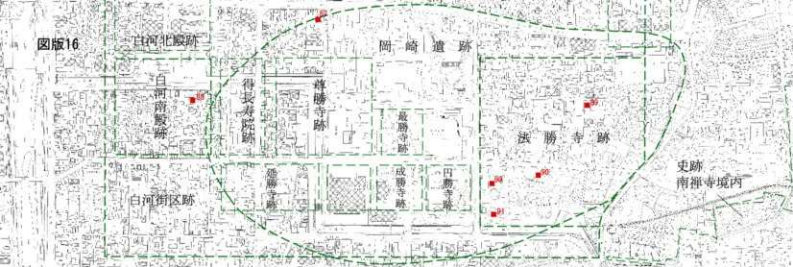
西坊城小路

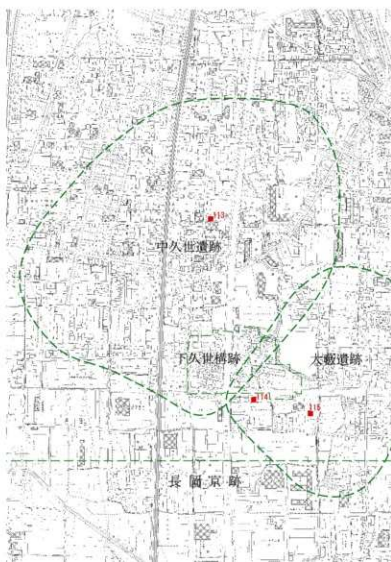
朱雀大路

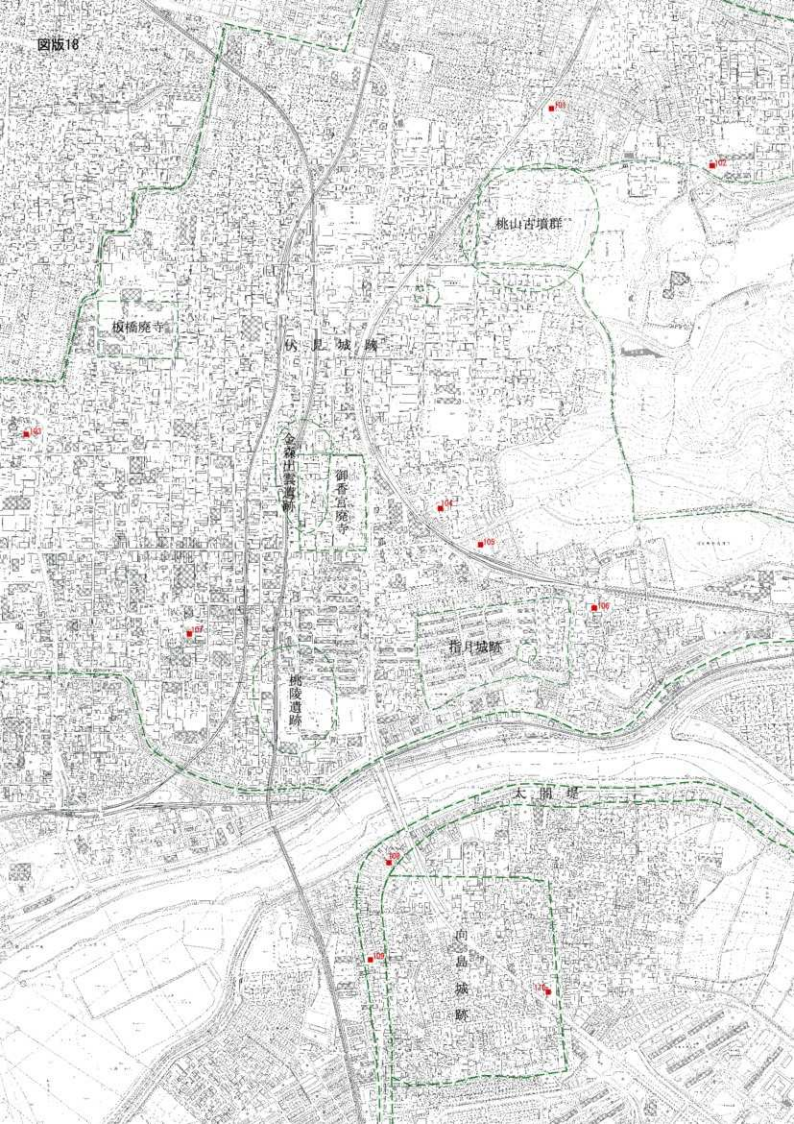




图版16







板橋庵寺

伏見城跡

桃山古墳群

金森出張遺跡

御香宮庵寺

指月城跡

橋陵遺跡

大開堀

向島城跡

100

102

101

103

104

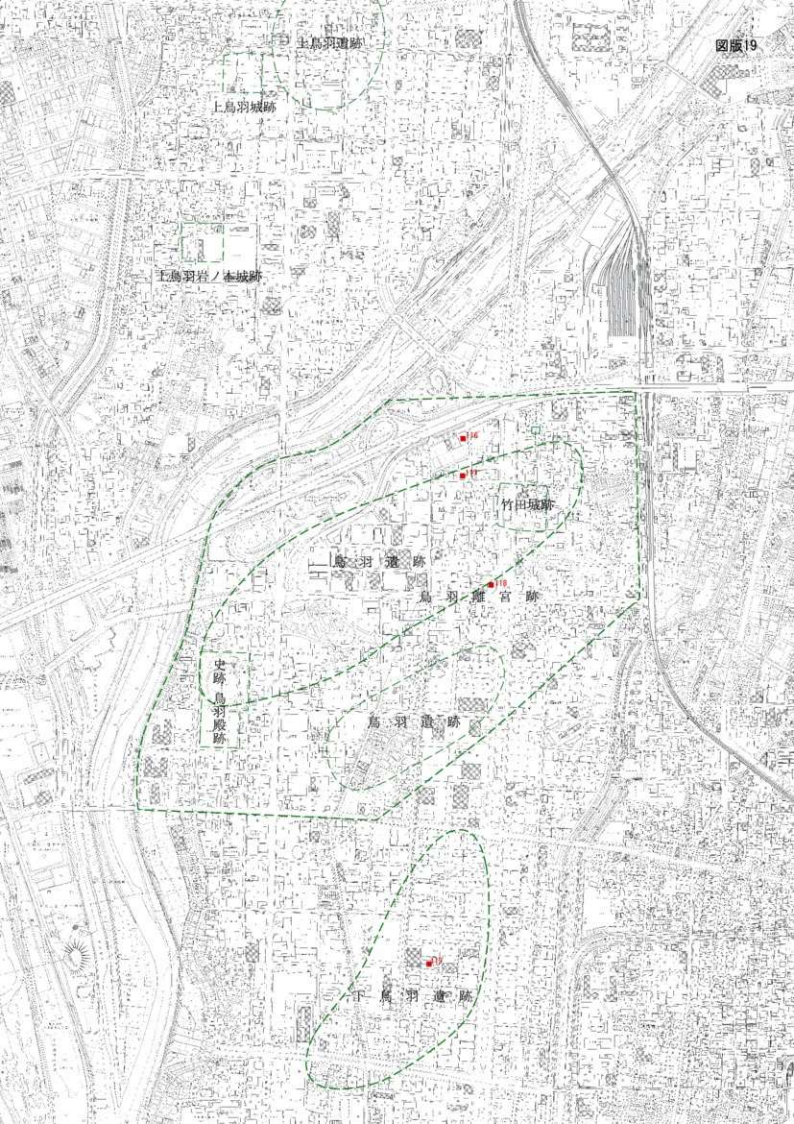
105

106

107

108

109



上島羽遺跡

上島羽城跡

上島羽岩ノ本城跡

竹田城跡

島羽遺跡

島羽離宮跡

史跡
島羽殿跡

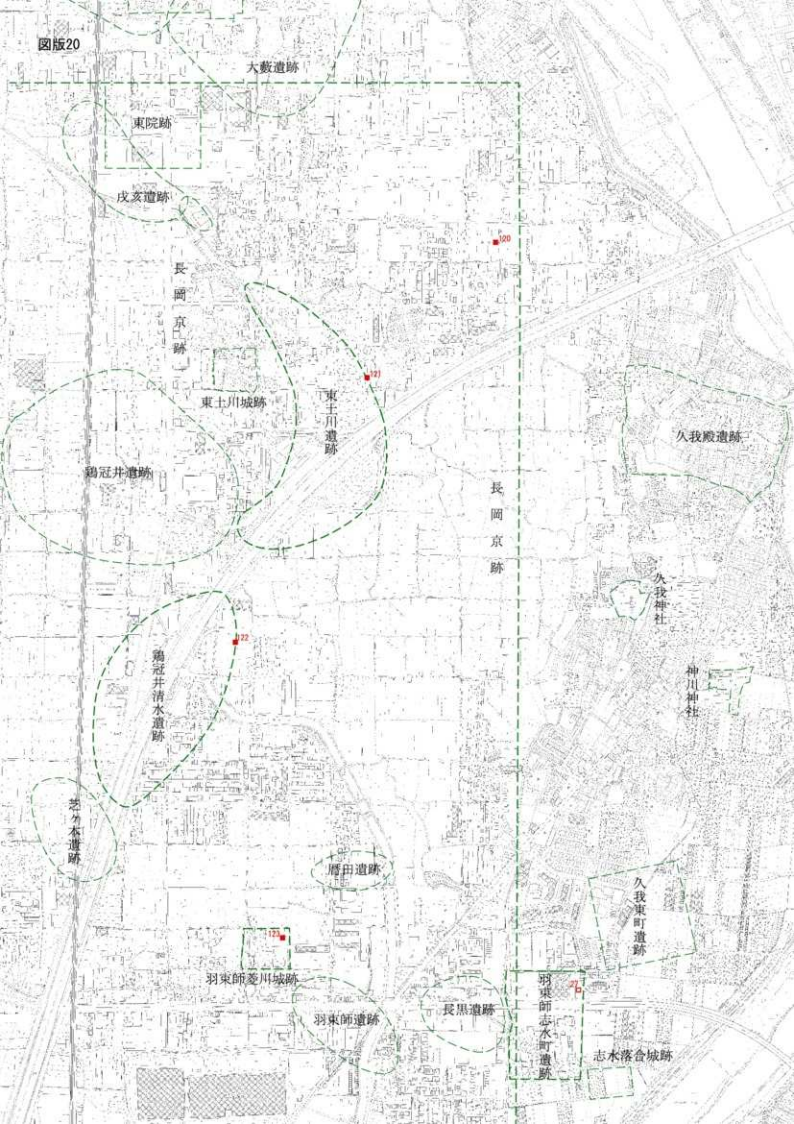
島羽遺跡

下島羽遺跡

10

11

12



大敷遺跡

東院跡

戊亥遺跡

長岡京跡

東土川城跡

東土川遺跡

久我殿遺跡

長岡京跡

久我神社

神川神社

鷹冠井遺跡

鷹冠井清水遺跡

芝乃本遺跡

鷹田遺跡

久我東町遺跡

羽東師菱川城跡

羽東師遺跡

長黒遺跡

羽東師志水町遺跡

志木落合城跡

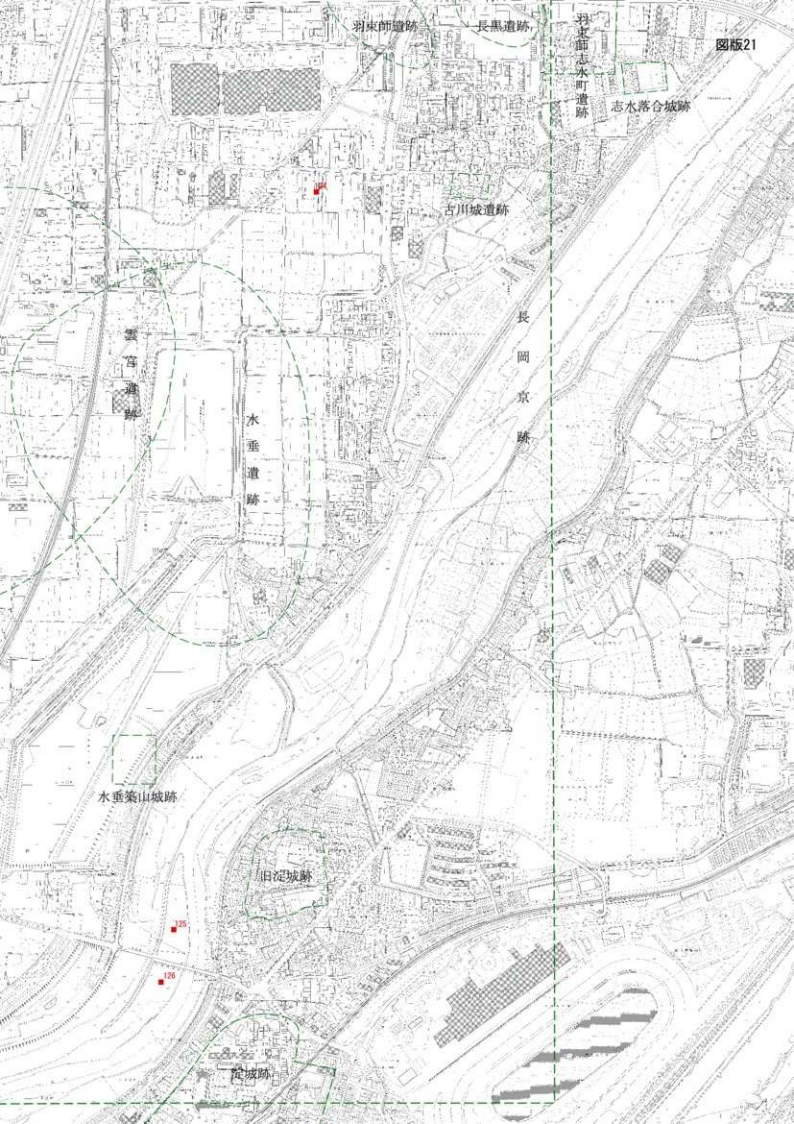
20

21

22

23

24



羽東師遺跡

長黒遺跡

羽東師志水町遺跡

志水落合城跡

古川城遺跡

長岡京跡

雲宮遺跡

水垂遺跡

水垂築山城跡

旧淀城跡

淀城跡

125

126

京都市内遺跡試掘調査報告

平成24年度

発行日 2013年3月31日
京都市印刷物 第243173号
発行 京都市文化市民局
編集 京都市文化市民局 文化芸術都市推進室 文化財保護課
住所 京都市中京区河原町通御池下る下丸屋町394
Y・J・Kビル2階
TEL.(075)366-1498
印刷 奥田印刷株式会社 TEL.(075)441-7060

